

野澤 潤

編著

千景景色

記事紀行文

大坂

偉業館發行

513E59



特 19
93

野澤潤編著

千景
萬色
記事紀行文

明治
27 1 15
内交

大阪
傳業館發行

千景記事紀行文自序

世に筆を執つて千景を寫し萬色を記せんこと、決して容易ならざるべし、古人云へるあり、山水の狀態を記し、風光の勢況を筆せんと欲せば、必ず先づ之が實際に臨んで、其の實物、實事を詳査し、一回自己の胸裡腦中に藏め、更に深思默念以て經歷の順次を定め、前後整列、首尾關聯して、天地自然の理に戻らざることを認めたる後、特に謹んで筆を執らんことを要すと、實に至言と云ふべきなり、

余今千景萬色記事紀行文の著あり、此の語を記して自序に代ふ。

明治三十七年千景萬色にて翠社を帯ぶるの日

著者 識

凡 例

1

- 一、此書は、總て著者自ら實驗せるところの事情及日本全國名所舊跡に於ける、四季の現象に就き、最親切なる觀察を以て編著したるものあり
- 一、此書は、文語簡易にして章句清麗に、文勢壯快にして意義明晰あらんことを主とし、最正實懇篤なる筆を以て編著したるものあり
- 一、此書は、尋常中學、師範學校、同程度普通學科を學ぶべき諸學校及普通文官受験參考上の要素たらしめんとして編著したるものあり

○記事紀行文凡例

○記事紀行文凡例

一、此書は、前陳の如く、總て普通學科を學ぶものゝ爲、受験上參考書として必要あるは勿論、同程度の學科を學ぶべき、世間一般諸學校在學生の爲、作文練習、章句研磨の指南車たるべきものあり

明治三十七年一月

著者誌

2

千城記事紀行文

目次

○月ヶ瀬に梅を賞するの記	一	○吉野山樓に雪景を観るの記	四〇
○月ヶ瀬に雪を観るの記	四	○春曉舞子に戯ぶの記	四一
○嵐山に櫻花を観るの記	六	○舞子濱汀に明月を観るの記	四二
○嵐山に月を望むの記	八	○舞子濱汀に夜雪を賞するの記	四三
○嵐山に暮雪を賞するの記	一	○住吉濱頭に松風を迎ふるの記	四四
○隅田堤上に櫻花を弄ぶの記	三	○浪華濱頭に舟遊を試みるの記	四五
○隅田の別墅に暑熱を避くるの記	二六	○澗河に漁するの記	四六
○隅田堤頭に月を賞するの記	二八	○某水族館を観るの記	四七
○夜邊田に赴いて蟲聲を聴くの記	三三	○某動物園を観るの記	四八
○隅田堤頭に雪を観るの記	三三	○春曉野遊の記	四九
○上野公園に櫻を賞するの記	三五	○春日友を會して詩旅を試みるの記	五〇
○忍ぶヶ岡に暮雪を弄ぶの記	三六	○芝浦に春漁を試みるの記	五一
○飛鳥山に遊ぶの記	三九	○夢に淺川に至るの記	五二
○吉野山に櫻花を観るの記	四〇	○春日江の島に遊ぶの記	五三
○吉野山に月を賞するの記	四六	○某幼稚園の記	五四

目次

2

- 某小學校を參觀するの記……………七
- 洋行の士を送るの記……………八
- 佛京巴里の圖書館に至るの記……………一〇
- 某女學士の海外遊學を送るの記……………一〇
- 某友人の佛國へ流學するを送るの記……………一〇
- 夏日山行の記……………一〇
- 夏日船に轉じて海遊を試るの記……………一〇
- 春日田園を焦すの園に題する記……………一〇
- 夏日夜遊の記……………一〇
- 暑を有明の濱に避くるの記……………一〇
- 富士山に登るの記……………一〇
- 暑を避けんとて寶温泉に赴くの記……………一〇
- 宇治川に笠を觀るの記……………一〇
- 田子の浦に漁するの記……………一〇
- 琵琶湖上に涼風を迎ふるの記……………一〇
- 和歌の浦に夏夕を賞するの記……………一〇
- 央道湖に漁船を弄ぶの記……………一〇
- 船上山頭へ海波を望むの記……………一〇
- 鏡紫海汀に奇火を觀るの記……………一一
- 魚津海濱に盛氣樓を觀るの記……………一二
- 弓ヶ濱に消暑を試るの記……………一三
- 高砂に涼風を迎ふるの記……………一四
- 三保の松原に遊んで夏日の炎威なるを知らざるの記……………一五
- 初秋松島に遊ぶの記……………一六
- 松島に月を觀るの記……………一七
- 習志野に蟲を聽るの記……………一八
- 秋季陸軍演習を觀るの記……………一九
- 田毎に月を賞するの記……………二〇
- 小倉山に紅葉を觀るの記……………二一
- 長崎港に秋月を觀るの記……………二二
- 三尾の紅葉を採ぐるの記……………二三
- 檜津に秋色を觀るの記……………二四
- 秋夜田原坂を過ぐるの記……………二五
- 天草洋に夜泊を助ふの記……………二六
- 秋夜鹿兒島灣に詩情を綴するの記……………二七

3

- 屋島の海に漁火を觀るの記……………二八
- 衣川に秋草を觀るの記……………二九
- 遠く桶狭間に秋暮の月を觀るの記……………三〇
- 春日野に鹿鳴を聞くの記……………三一
- 某園に菊を觀るの記……………三二
- 某山に非狩を催すの記……………三三
- 關ヶ原の霜路を過ぐるの記……………三四
- 新井の古關を過ぐるの記……………三五
- 不知親を過ぎんとして露風に追はるゝの記……………三六
- 甲斐の猿橋を渡るの記……………三七
- 佐野の波に夕雪むるの記……………三八
- 原の驛に富嶽の雪を賞するの記……………三九
- 雪を冒して友人の苦難を救はんとするの記……………四〇
- 六甲山頭に猪を狩るの記……………四一
- 航路に雪を觀るの記……………四二
- 金澤に曉雪を觀るの記……………四三
- 雪夜阪鶴鐵道に依つて福知山に赴くの記……………四四
- 雪夜梅林を採ぐるの記……………四五
- 諏訪湖上に氷を渡るの記……………四六
- 雪球を製て對擲するの記……………四七
- 雪達磨を製るの記……………四八
- 雪窟の下に燈を續くの記……………四九
- 冬夜友を會して時事を談するの記……………五〇
- 寒夜談話會を催すの記……………五一
- 歲暮の記……………五二
- 某友人の内地周遊旅行を送るの記……………五三
- 某氏の故郷へ歸るを送るの記……………五四
- 慈善深き某氏に贈るの辭……………五五
- 友人と共に修學旅行を企つるの記……………五六
- 夜戦に赴いて敵陣を破るの記……………五七
- 實戦に臨んで忠死の狀を觀るの記……………五八
- 某嶺山に至るの記……………五九
- 某市に大火を觀るの記……………六〇
- 某山に登るの記……………六一
- 友人某博士の學位を貢ふて遠く佛國より歸朝せるを迎ふるの記……………六二

目次

作文上の注意

- 意義の通じ易きを主とす……………三二五
- 難字難句を用ゐざるを要す……………三二六
- 簡易の字句を用ゐんことを要す……………三二六
- 猥りに形容の文字を用ゐざるを要す……………三二六
- 熟字連語の多きに過ぎざるを可とす……………三二九
- 同字同語の多きに過ぎざるを可とす……………三三〇
- 例證及格言を用ゐんには特に其事實を明にして能く文旨に適應せんことを要す……………三三〇
- 例證を用ゐるの二種あり……………三三三
- 長文を作らんにには特に簡易明瞭なる文字を用ゐんことを要す……………三三三
- 文は長からんよりは寧ろ短きを可とす……………三三四
- 自作の熟字を用ゐること勿れ……………三三四
- 異様の文語を混用する勿れ……………三三四
- 文を作らんにには豫め多々の文章を讀まざるべからず……………三三六
- 文を作らんと欲せば特に歴史地理の學に精通せんことを要す……………三三五

上欄目次

- 文を作らんにには些細のことに拘泥せず特に大體に就いて之を組成せんことを要す……………三三六
- 詩句を混用する勿れ……………三三六
- 名文を作らんと欲せば之を學ぶの前に於て決して詩賦を試みることを勿れ……………三三六
- 佛經の文辭を混用する勿れ……………三三六
- 文章中漢吳兩音を混讀すべき事あり特に注意せざるべからず……………三三七
- 清國の時文を混用する勿れ……………三三七
- 名文を作らんと欲せば常に實際に當て不風不挽の筆を執らんことを要す……………三三九
- 作文上必要な文字の讀聲に就いて注意せんことを要す……………三三九

附録上欄及本欄目次

- 作文上に於ける六要法……………文章に於ける六要備
- 文章二十二箇例……………用字上の注意

類語萬彙



- 月ヶ瀬に梅を賞するの記……………三三五
- 馥郁たる香花あり○花癖徐に開いて香蕪を送る○花あり香清くして風氣暖あり
- 春風徐に吹いて梅花開く○風暖にして梅花將に開かん

記事紀行文

千景記事紀行文

野澤潤編著

月ヶ瀬に梅を賞するの記

天晴れ山暖にして、四邊霞を罩め、水清く草緑にして、黃鳥所々に囀せんとするのときたり、嗚呼恐は是梅花満開の期からむ、疾く起つて其の香園を探らんかあ、而も我單獨にして杖を曳かんこと、最遺憾とするところあり、殊に途を何に取らんか、未其向ふべきの地を定めず、空く忙然として考案に沈めるあり、時に友人某來つて余が寓を訪ひ、茲より將に月ヶ瀬に赴き、梅花の勝を搜らんとす、請ふ共に手を携へんことをと、切に勸めて止まざれば、余も亦意を決して裝を整へ、別に詩卷文冊を提げ、忽々にして趨けり、遇

○記事紀行文

とす○朝來風冷、ちりど雖ども、梅花却つて其蕾を破れり○遠く探り至る梅花の露○香を探ねて梅花の林を訪ふ○梅林香深くして、鶯鳥の聲清あり、梅林遠しと雖ども香氣高く、鶯鳥之に依つて其の所在を知る○梅花山谿に盈ち、黃鳥梢頭に囀つること頻あり

途上文友あり、余等の行を賛して遂に伴侶たり、尙瓢を携へ山糧を齎らして、用意頗る周到なれば、鼎俎同列して路に急ぎ、談話千百笑語解頤して行き、滑稽諧謔萬々罵嘲して進み、既に里餘に達したるとき、忽微風あり、香芬を送つて其の梅花あるを報じ、黃鳥頭に囀じて名園たるを告ぐるものゝ如し、是に於て詩友某先づ口を開いて曰く、暫く此邊に筵を設くべきあり、蒸梅林近かゝらずして近く、眺望觀覽の便、極めて優秀ありと、余等之を可として、俱に座を定め、左視右瞰して麗色を賞し、上下俯仰して美黛を迎へ、更に行厨を開き杯を傾け、喜評快譚餘念かかりしあり、乃文友詩を賦して、余等に示し、江南君子の正淑あるを語れば、詩友某素より好むところあり、直に筆を執つて次韻二首を記し、自解説して大に誇るものゝ如し、余も亦一詞あつくして止まんや、敢て拙劣凡庸を顧みず、勇威凛乎として懷紙を開き、特に野硯を用ゐて一詩を

○搜索す梅花の山○尋至る梅林の家○谿は梅花を以て満たされ、山は鶯聲に由つて春色明なり○梅を尋ねんと欲して、遠く黃鳥の囀するところに至る○遙に香芬を送るものあり、恐は是江南君子の春を誇るあらん○清香春風に吹かれて來る○清香窓を貫いて

○記事紀行文

染めたり、即三韻相比するに、詩友某の賦意、最巧みにして、能く梅花の眞情を寫し、月ヶ瀬の本態を盡したりと雖ども、余等の韻詞頗る輕濁に流れ、雄猛に傾き、絶景優色を害するの觀ふきにあらす、然れども今にして之を放棄し、途上の砂泥に汚されんこと却つて風流雅趣に背くの感あるを以て、猥りに呼んで名律なりと稱し、笑批歎唱して極りなかりき、否極りなかりしのみならず、花色詩情を探り、詩情蕪趣を訪ひ、交相寄りて胥樂ひの状を呈せり、嗚呼愉快なるか、嗚呼愉快なるか、今日に夕日西山に搗き、群鳥啼に歸らんとするに逢ふて、驚愕周章、行厨を纏め、詩卷文冊を納め、急脚迅歩して以て正路に出で、人俦を購ふて家に還れり、古語に曰く花を賞して花に迷ひ、遂に我家を忘るゝに至る、是全く、花情を知るにあらすして、花情に弄ばるゝありと、實に然り々々々余三友相携へて、梅を月ヶ瀬に探り、專其の眞景を訪はんとして、却

来る

つて賞すべきところの方向に感ふたるあり、蓋余等三友のみならず世間觀梅の士たるもの、概皆斯の如きのみ、乃記して以て自戒の標鍼と爲す

○月ヶ瀬に雪を

観るの記

雪山あり雪谷あり、總て白銀を以て蓋はれたるが如し○皚々たる雪景を觀る○雪は山に盈ち、又谿に満ちたり○皓々たる白雪の山○雪霰梢に盈ちて、恰花の如

○月ヶ瀬に雪を觀るの記

四圍白銀を以て蓋はれ、上下悉綿緞の如し、殊に梅樹、葉落ちて僅に嫩芽を含まんとするところ、更に鵝毛を以て包まれたるの状容や、如何とも評すべきの道なきあり、時に友あり、月ヶ瀬に雪を探りたるの歸途ありとして、余が庵を過れり、乃特に余に對つて、其の狀況を語つて曰く、今日曉を冒して、雪路を踏み、單身勇を鼓して、雪景を月ヶ瀬に搜れり、全く梅花を月ヶ瀬に求むるは、世人普通の状情なるべし、而も更に雪を尋ねたるは、甚以て奇異のことのみ、否決して奇異にあらす、適切正當の理あるものあり、如何とされば月ヶ瀬の山谷、極めて雪景に富むありと雖ども、寒風吹き

し○六花梢に盈ちて寒谷白銀の美に飾らる○皚々たる白雪の山、既に際限なきが如し○遠く六花の原野を過ぎ、近く白銀の山に至る○白梅の如き遠林あり、至り觀れば、是雪霰の枯梢に溢るゝあり○雪を踏んで至る、雪の山○雪景を賞せんとして、遠く深山に入

天色凄愴あるのときに於ては、徒步洗足にして、此地に至らんこと容易ならず、否縱令傳興を賃するあるも、却つて煩擾錯雜にして、快怡少きやの感あれば、是亦雅趣を探ぐるの主旨に背くあるを以て彼此相戻り、格別の興美なきが如くさればあり、然れども余獨り靴を投じて六花の勝を搜りたれば、遠近の山谷皚々として、一望際涯なき白綿を薦けるに齊く、梅樹葉落ち、恰も數萬群集せる鹿角の如くにして、悉皆皓々たる白銀に蓋はれたるの状、實に云ふべからざるの麗色あり、乃詩情に促されて、二韻を聯ねたり、請ふ斧正せんことをと、懷紙を開いて二律を示し、探雪搜景の擧を誇ること多々ありき、余是に於て其の勇威に感じ且詩趣の明美あるを賞し、次韻を試みて之に答へ、特に酒杯を勧めて、快談數刻、遂に相樂んで一風光を費し了はれり、余や別に月ヶ瀬に雪を賞せざるも、斯く友人某探雪の名詩あり、叮嚀親切、精微明瞭、余自、杖を實地に曳

○記事紀行文

る

○嵐山の櫻花を

観て感わる

霽々たる青霞の中、特に認む櫻花の春○櫻花爛熳として春色宏かり○櫻花既に綻びて春色極めて明かり○翠樹絲草の間特に櫻花の纏綿たるを觀る○櫻花多きにあらざれば、既に春色の深さを示せり○

いて、其勝を探りたるに異ならず、嗚呼快怡々々、

○嵐山に櫻花を觀るの記

遠近なく上下なく、一望一瞻總て春色を以て盈々たるものあり、即嵐山の勝たるのみ、嗚呼嵐山や、一壘の圓岳あるのみ、特に櫻花の満塞せるにあらす、綠葉盛榮たるの間、所々相交互して、爛熳たる花あるを觀る、其色其景、一種云ふべからざるの趣味あるを覺ふ、殊に惠法師の和詩、柳櫻相混錯して、其色宛然錦織の如し、則是都門の名趣ありと詠じたることの虚からざるを知るあり、否虚からざるのみならず、尙又優勝ある美景あるを示せるあり、嗚呼麗趣限りなしとは、蓋斯の如きの風光を云へるならん、茲に古人の明語あり曰く、天下の事物、四海の情状たるや、總て同伴同種のもの、多々相輻輳するあるは、却つて雅趣に乏く、單麗美濃麗にして、眞の妙味を缺けり、然れども數種異様のもの背寄つて以て、參差混雜、

○記事紀行文

至り觀れば、爛熳たる櫻花の春○友を誘ふて至る、櫻花の山○橋を渡つて至る櫻花の春○春色あり橋を渡つて櫻樹の林に入る○友を携へて櫻花を探れば、四圍甌然として春霞深し○青霞る潜つて南山に至れば、櫻花満々として春景美あり○對岸の春色、極めて

配置並列の宜きに適ふときは、其の趣景頗る温雅精巧にして、敢て云ふべからざるの妙風を呈するならんか、今一人あり、勇猛人に優れ、力量衆に越え、魁偉精豪、實に天を衝き地を貫くの概ありと雖も、素より猛烈勇強あるのみにして、容貌極めて恐るべく、言語甚疎放あるべく、舉動頗亂暴あるべく、一十始終宏大劇固あるを以て通せんとするに過ぎず、敢て一微の變動遷轉をすれば、唯強猛ありとして、驚愕するの外なきあり、而も斯の如きの人にして、言語清爽、舉作温良の趣きあり、強豪劇烈に相應じ、調理配合の宜きを得ば、其の状味云ふべからざるところあらん、夫山水の風景に於けるも、素より斯の如きの道理あるべきあり、抑嵐山の春色たる、山体一面櫻花あるにあらす、杉、松、檜、柳、既に盈ちて、綠翠盛々たるの間、數樹の櫻花所々に散交し、淡紅の鮮花、香を放ちて滿々たるあれば、綠は花を負ひ、花は綠を抱き、異様混錯して、

蒲麗たり

○嵐山に月を

観るの記

遠く望めば、山後明月あり○遠景總て月に由りて明かり○山後の弦月樹林に隠る○明月梢頭に懸つて、風色清爽たり○弦月雪邊に現はれて山色美あり○月色

大に新趣味を現はすに至る、嗚呼嵐山の花や、能く天下の狀態に適ひ、人情の正趣に應答するものと云ふべきあり、乃嵐山に櫻花を賞し、聊感ずるところを述べ

○嵐山に月を望むの記

嵐山の風光たるや、春色櫻花の勝あるに止まらず、秋候名月の美に富むある、余幸に學に志して、特に閑靜の地を撰び、暫く研磨究極するところあらんと欲し、且暑熱を避けて、嵐峽對岸の地、某亭に在ること既に五閱月、遂に仲秋三五の月を見るに至れり、實に快怡に堪へざるあり、夫嵐山の景や、麓に綠水の流るゝあり、筏舟源より流れて、鮎魚を驚かし、長橋長く架つて山脚に渡り、遠く刹堂あり、近く農舎あり、是に於て余は寓窓の障戸を開き、遙に天の方を望み山景川姿を眺むるとき、圓滿たる玉兔雲を破つて現はれ四邊輝々として其照るに任せ、漸々橋を渡つて嵐峯に至るが如し、

明ければ、蟲聲極めて高し○月光輝々として、叢裡蟲聲深し○月明にして、涼風至る○蟲聲の聞ゆるところ、既に月光輝けり○至り觀ばれ、月光水に映じ橋上却つて人跡稀あり○遠近月色深く、秋氣原野に盈つ○月は明かりと雖ども、冷氣既に襟袂を蓋

殊に叢裡萬蟲の唧あり、其景其色實に云ふべからざるの優秀あり英人嘗つて此地に遊び、國音を以て賞詩を試みたり、今之を轉譯して以て余が觀月の記を飾らん、否飾るにあらす、嵐山の月色特に他に勝り、大に麗美あるところあるを證せんと欲するあり、

一

遙に望む青翠の山、前に水あり筏を浮べ、時に明月燈々として昇り、長橋斜に横はつて、

二

綠の水は長く流れ、筏舟歌を乗せて來り、時に蟋蟀の鳴くあり、

遠く眺む緑瓦の塔、後に天あり雲を負ふ、蟲聲唧々と茲に鳴き、風色頗る麗艶あり、

翠の山は高く聳え、長橋月を誘ふて渡らしむ、旅寓の窓下に聞ゆ、

○記事紀行文

ふに至れり○山上山下總て月光の瞭々たるを觀る○月は橋上に懸つて輝き、水は橋下に流れて澄めり○半輪の月は橋西に去れり○橋頭遙に觀る半輪の月○月色灼々として、山水遙あり○雁聲桂宮にあり

麗々たる風光の夜、

三

我は遠來の客たれども、時去り時往きて歸らず、今幸に嵐山の麓に在り、竊に認む優秀の景、

艶々たる仲秋の色、

山は古來の名地たり、光陰敢て止らずして去る、渡月橋邊の寓に坐し、特に望む明美の色、

四

嗚呼賞すべく賞すべきの景、嗚呼賞すべく賞すべきの趣、時は秋にして既に花あけれども、翠葉盈滿して却つて美あり、嗚呼惜いかる我は旅途の人、永此地に停る能はず、遠く去つて英都に歸るべし、嗚呼惜かる此勝に訣れんこと、夫遠來異邦の人亦此の如きの情に富み、山色風月の觀を縱にするこそ巧あり、蓋是其巧あるのみにあらず、嵐山の景色素より精巧

○嵐山の暮雪を賞するの記

暮色微にして雪景却つて美あり○雪景最も美たり、嵐山の夕○山は大あらすと雖ども、雪に由つて其景壯あり○橋上雪景長くして、山頭寒色深し○雪景微あり、山下の暮○暮色

○嵐山の暮雪を賞するの記

あるに因るあり、嗚呼萬里遠遊の客能く之を賞し、余今之を賞するの機に至れり、暫く相記して以て、都北の勝を誇る、時は既に歲尾に迫り、寒風烈しく吹いて山野に騒ぎ、凍氣市街に訪ふて、戸々爐火を弄ぶに至れり、此地は是洛陽の北、嵐峽の勝たり、然るに今や白雪に埋められ、山上山下總て皚々乎として、他に遮ぎるものなく、僅に渡月橋下大堰川の翠あるのみ、嗚呼皎々たる銀界の景も亦云ふべからざるの麗美に富めるあり、時に橋東に立つて遙に北方の天を眺むれば、一望雪を以て包まれ且つ霏々たる雪片を以て満たされ、綠水橋邊其間に隱見し、蓑笠の水夫、筏に棹して來り、寒風斜に吹けども敢て意とせず、悠悠歌を唱して益す威勇を示し、水下の鮮魚深く潜んで、特に鱗を現はさず、實に靜美の景たるあり、古語に云はずや、春朝長閑の色あり、櫻花滿開の際に於

○記事紀行文

○記事紀行文

微きりと雖ども雪景
明あり○人あり余
を誘ふて、雪を探
らしむ○人あり余を
促して、山雪の深さを
を探らしむ○山上山
下總て白雪を以て埋
められ、河水の翠色
益す深し○寒風山
に盈ち、白雪谷を埋
む○白雪深きところ
一山あり

○隅田堤上に櫻花を遊ぶの記

て現はるゝの景は、是唯其美に由つて、他を眩惑せしめたるのみ然れども冬日嚴凍流水のときにして、白雪埋積の折を以て表はるゝところの美あるあらば、是眞個の美あるべしと、嗚呼嵐山も亦然るあるか、春曉櫻花の美あるのみならず、冬暮堆雪の麗あり、乃人世の状容に於けるや常に富貴成昌のときにして、賢才と呼ばれ、智者と云はれ、慈惠の人として慕はれ、愚篤の徒として愛さるあらんか時節變遷轉化して、一朝産を破り家を倒し貧困究乏の輩たるに至らば、賢才智者たりしもの、俄に化して痴愚魯鈍と嗤はるゝあるべく慈惠愚篤ありしもの、遽然變じて我慾邪曲の徒と罵らるゝに至るやも計られ難し、蓋は櫻花の美に依つて美を衒ひたる山の如く、富貴盛昌に由つて世目を欺きたるに過ぎざるのみ、嗚呼嵐山は櫻花のみ

○隅田堤上に櫻花を遊ぶの記

○記事紀行文

花を遊ぶの記

隅田堤頭櫻花あり○
堤上の櫻花既に盈満
せり○櫻花堤上に盈
ちて、春色大あり
○墨田堤頭櫻花綻び
、春色最深くし
て、鶯鳥囀すること
明あり○塘上櫻樹
を以て盈たされ、塘
邊春色を以て埋め
られ○櫻樹堤頭に聯
つて、春色長あ

長堤萬里春氣盈ちたり、木母寺畔霞霞の中、遠近一抹總て花をらざるはなし、殊に堤下翠流あり、隅田川を稱す、瀛船帆舟上下往來し筏艇交擾れて、其趣を加ふ、時に長命寺の鐘鶯聲と共に聞ゆれば、群鷗水に逆て、吾妻橋下に進み來り、對岸の地淺草の北、今戸橋傍煙高く、待乳山頭青雲巖巖たり、時に又單艇に棹して來るものあり、遂に竹屋の岸に到り、忽々堤上に登るを見る、是亦ん文客某氏觀櫻の行にして、二三の友人を伴へるにてありき、余亦文客を知れり、相見て以て平素の疎濶を謝して曰く僥倖の邂逅、喜怡の至りありと、更に行を同うして堤上に逍遙し、談笑快話遂に言問の某樓に登り、酒を命じて鮮魚を味ひ、文を闘はし詩を弄んで興情頻に起れり、而も胥醉ふて樓を下り、尙歩を進めて梅若塚に詣れば、時既に夕に垂とし、暮色遠く築波の邊に現はれ、金鳥近く飛んで山後に隠れんとするが如し、是に於て四友相共に驚いて曰く、余輩

○記事紀行文

り○友を携へて堤上に逍遙すれば、櫻花片々として襟帽に墜つ○友を誘ふて木母寺に詣り、櫻花深きところ春色の明るを觀る○三圍社頭、櫻花の春○春色明にして櫻花極めて麗々たり○娟々たる花あり櫻花と稱す○隅田の河上、櫻樹茂り、綠水淡紅を浮

今日の觀櫻たるや、特に風光の間に在つて、雅致清爽の中よりせんことを欲しあがら、突然樓室に籠つて空しく詩酒に埋められ、眞趣正旨のあるところを知る能はざりしは、全以て遺憾の至りあり、加之日既に茲に及べば、花ありと雖も月なく、暗冥を船に乘せて、徒然棹を還へすあらんこと、極める愚あるべきあり、嗚呼如何せん光陰再來らず、日月敢て反らざるを思へば、轉惘然たるあり、余等にして魯陽公の威力あらば、大錘を揚げて陽光を停めんものを嗚呼今に至つて歎するあるも、決して其効あかるべく、必竟兒戲を試みるに過ぎず、寧相携へて、速に去らんことを欲すと、踵を返して竹屋の渡舟場に到り、將に船に入つて水程に走らんとするに當り突乎として堤頭に聲あり、君等は是より去らんとするか、何を迂るや、暫く歩を復して余輩と共に來れど、余等驚いて顧みれば、知己某々相伴ふて觀櫻の行を試みつゝあるあり、然れども其言の意外

べて流る○綠水深きところ櫻花湛ふ○綠水櫻花を浮べて流れ、筏舟霞霞を衝いて行く○春色鮮々たり○春景極めて鮮麗あり○香辨春野に盈つ○櫻花深きところ靈趾あり○長堤萬里總て櫻花を以て盈たさる○春曉春暮、悉く皆花のみ○碧流櫻花を浮べ、鶯鳥春

○記事紀行文

あるを以て、今何が故に余等を止めたるや、日既に暮るゝに垂として別に興を呼ぶべきの具あきを疑ひ、君請ふ余等を止めんとするの理由を語らんことを、少く威勢を示して詰り問へば、彼輩大聲に呼はつて曰く、今夕は是三圍社頭新機發電氣作用を試み、堤上櫻樹の間、數丁連聯たる火線を放つの設けあり、時幸に薄暮たり、暫にして、舉行すべきあらん、余等初めて此舉あるを聞き、嗚呼迂るりく、常に新聞紙面に眼を注ぎつゝある輩にして、斯る快事あるを知らざりしとは、周章履を反して知己某々等の行くに従ひ、三圍社前の某亭に入り、相埃つこと一辰刻にして、忽ち號砲の音を耳にしたれば、直に起つて堤上に赴き、電氣發開の狀態を觀んことに注慮したり、否注慮するの暇なく、迅敏快速、眼前を遮るものあるが如く、一瀉千里の勢を以て、堤上萬樹の櫻花を潜つて、無数の電線光輝燦々として連列し、數丁の間、恰畫の如く、花辨常に倍して

色を轉ず

○記事紀行文

麗美艶媚云ふべからざるの状あり、余等復將に花を觀るの心を奪はれ、虚然本來の企望をして、變轉せしむるあらんとするに至れり、乃同伴一友の戒慎に由つて、茲に大に警むるところあり、電火の間に燦々たる櫻花の美を賞したる後、再船に投じて歸路に就けり

○隅田の別墅に暑熱を避くるの記

炎威烈しと雖ども、特に之を避くるの地あり○暑熱を避けて別墅に隠る○某別墅あり、單獨避暑を試みんと欲す○暑を

○隅田の別墅に暑熱を避くるの記

炎威燒くが如く、暑熱蒸すに齊し、然れば都下の人士にして、少しく間あり暇あるものは、概皆遠く里外の涼場に赴き、或は別墅に入り、或は旅寓に止まり、或は所々意の向ふところに任せて旅路に逍遙し、專炎暑を避けて其身を養はんことに汲々たるあり、而も余は之に習はず、近く都下の一隅に在つて、靜に此の熱威を凌がんと、却つて快怡多からんかと、遂に思ふところを定めて書冊數部及び五六の衣装を携へ、簡易輕便、人傳を賃して小梅に至り、某別墅に入つて、暫時避暑を試みつゝあり、蓋此の別墅たるや、舍屋大

恐れて遠く他郷に赴かんよりは、近く都邊の別墅に至らん○暑熱盛なりと雖ども、之を避くるの術あり、即風色明美にして、山水大あるの地を撰み、茅屋草舎に就いて書冊を開すべきあり○朝來炎熱大あり、書を友として某別墅に赴き、遠く山水を望んで涼風

○記事紀行文

あらずと雖ども、室數五六あり、樓臺高からずと雖ども、西富嶽を眺むべく、北築波を視るを得べし、庭廣からずと雖ども、老松枝を垂れ、翠柳風に搖ぐに堪へ、池水細ありと雖ども紅餌金鱗を潜ましむるに足り、草苔微ありと雖ども螢火を宿らすに便あり、加之家眷の住むところ神田川の堤坊に在り、日々數回船を廻らして往來し食糧家具を運搬すること頗る敏速なれば、特に一老嫗を賃して、食膳の給仕に當らしめ、日夜朝夕、我思ふところに任せて、樓室に休ひ、庭室に眠り、炎熱甚しきの時刻を計つて靜坐安外し、新聞雜誌の類を讀み、詩歌俳句の卷を繙き、愉々怡々として光陰を重ねつゝあり、時に平素懇篤知交の友、二三、五六相携へて訪來り、笑語快譚、悠々胥樂むこと屢あり、茲に一日急雨あり、庭中庭外、總て濡ひ樹木草苔、翠色を加ふること層一層にして、清風舍屋を包み涼氣室に盈ち、爽快明喜云ふべからざるあり、是に於て獨思へらく

○記事紀行文

を迎へんと欲す

余此の別墅に來つてより既二週日、殊更苦熱を覺ゆるにわらず、極めて威災を避くるに宜く、剩費少くして意氣安く、尙書を読み、文を作つて快を呼ぶべきの友多く、至便至好の舉たるを覺え、乃感ずるところを記して、後の紀念と爲す

○隅田堤頭に月

を賞するの記

長堤月下に蜿蜒たり

○堤長月を載せて、

夜色靜あり○月は堤

上に輝いて秋風低し

○墨田の月は堤頭に

照けり○墨田の水は

翠あり、月下の蟲は

○隅田堤頭に月を賞するの記

今宵は是仲秋の望月あり、一天雲晴れて星所々に輝くるとき、東山の傍、皎々たる團塊の昇るを見る、是三五の明月の現はるゝあり、余は幸にも嚴父に従ふて墨田某氏の許に至り、觀月の宴に列あるを得たり、夫某氏とは嚴父の壯年時代の學友にして、現今某大學校の教授あれば、敢て遠應騰踏するなく、門に入つて姓刺を通じ、主人の誘導に任せて樓上に登り、茶菓を以て款待せられ、尙珍膳豐酒を配して恭遇せられ、喜嬉消快、舊を談し新を語り、時々刻々相進み晉往くに隨ひ、團塊高く伸びて既に東山の頂、數丈の頭に懸れるの

○記事紀行文

靜あり○月光燦々として、

○風色清靜あり隅田

の月○月を賞せんと

して、三圍社頭に詣

る○長命寺畔、月色

靜あり○長命寺の鐘

聲、月光の輝くに從

ふて響く○明月高く

照いて、山水明美あ

り○山は遠く、水は

深し、墨川の月○三

五の明月、爛々とし

とき、庭後の玉薄露に濡ふて輝き、蟋蟀、蛩、蟲、又鈴蟲、草裡に唧集して、秋を鳴こと頻あり、是に於て主人先口を開いて明月の詩を誦すれば、嚴父亦之に應じて、月下の蟲に題するの律詩を吟じ、主客更に醉ふて、吟詠止まず、終に紙筆を執つて、觀月の文を書し、秋宵の風光を書き、歡娛快愉敢て盡期あきか如し、然るに主人余に命じて、隅田堤頭に月を賞するの詩を賦せしむ、余素より學なく才あければ、雅趣を賞し、風色を評すべき意匠に拙く、今俄にして斯命を蒙るあるは、實に苦煩の極たるのみ、殊に嚴父も亦余が性に鈍くして斯の如きも識量あきを慮り、主人に請ふて其任を解かしめんとしたり、而も主人決して之を容れず、特に告げて曰く、余嘗つて或る友人に聞けり、令息は文學に志して、黽勉鞠窮、孜孜汲々、常に寢食をも忘るゝの熱心あり、過日疾に其業の奧秘を極め、優秀卓絶を以て學士の稱を得られたりと、余素より之を信せり、否其期

○記事紀行文

て輝やく○特に船を
 浮べて、月下に遊ぶ
 ○墨田水清くして、
 月映すること深し○
 秋夜の風光既に千金
 の價あり○一宵の風
 光極めて麗美あり○
 詩を賦し文を試みて
 明月を賞す○詩韻を
 聯ね文語を綴つて、
 明月を迎ふ○主客相
 對して明月を賞す○
 主客杯を傾けて、秋

にして、初めて之を信じたるにあらず、余が親族某の二男、某大學
 校に在つて、令息の學友たり、屢々來つて相談するごとに、令息の
 博識強記あるを贊美して止まず、然れば余亦令息の現狀に感じて、
 敬慕の念に堪へず、若し好機會のあるあらば、切に令息の貴臨あら
 んことを欲したるや久し、今宵幸にして君に従ふて來駕せられ、
 余が喜び實に究極なきあり、乃切に一韻を所望せるありと、嚴父
 大に迷惑の狀あり、余亦慚愧に堪へず、唯頭を垂れて、暫時黙黙
 然たりと雖ども、主人の請望願りあるを以て、嚴父余に命じて一律
 を作らしむ、余其止むべからざるを察して、遂に筆を執り、五言俳
 律一首を書して主人に捧ぐ、主人大に悦んで、復次韻一首を筆し、
 興和藎々として、恰秋草の茂れるが如く、快狀盛々として、宛
 蟲聲の唧唧するに似たりき、乃夜更けて冷氣至り、明月西山の頂に
 輓れるに及び、主人に請ふて歸路に就かんとせるも、主人敢て許さ

○記事紀行文

○夜墨田に赴いて
 蟲聲を聞く
 の記
 蟲聲 靜にして夜色
 麗あり○蟬蟋の聲

す、終に褥を設けて臥せしめられ、覺えず熟睡して、宏音の耳に入
 るに驚かされ、覺めて褥を去れば、牀頭の時辰器十二點鐘を報する
 に逢ひ、再愕いて主人に面し、夜來の歡待敬遇を謝し、曩に耳を
 貫くが如く強聲を聞きしは、全以て如何と問へば、則是午砲あり
 と答へられ、嚴父大に笑ふて曰く、余自熟睡して既に數刻を過ぎ
 たるを知らず、唯時辰器の損傷して、指針の向ふところを誤れるを
 らんと推斷せること、實に懺悔へ堪へざるありと、余嚴父と共に叩
 頭誠謝し別を告げて其廬を出で、人車を賃して家に歸れり

○夜墨田に趣いて蟲聲を聞くの記
 嗚呼快あるか秋夜の景、風涼月明にして、身容極めて爽快あれ
 ばあり、嗚呼哀あるか秋宵の色、四邊凄寂として、清狀陰密され
 ばあり、古人云へるあり、月を観るの情念や、蓋人意の如何に由つ
 て變遷あらん、其感ずるところ、其思ふところ、其認むるところ、

○記事紀行文

は陰に開き、堤上の月
 月は陽に輝く○蟬蟋
 相群つて、月色愈
 美かり○秋風吹くと
 ころ蟲音明かり○
 叢下蟲聲あり、月色
 に促がされて却つて
 静かり○蟲音寂々た
 り秋暮の夜○秋夕風
 落ちて、蟲聲遙か
 り○鈴蟲あり月下に
 唧く○萬蟲聲を高く
 して望月の下に群る

其類ふところ、各相異なるるに從ふて、之が趣味状態のあるところ
 違變少からざるなり、一は秋夜の景を目して、爽快ありと云ひ、
 一は秋宵の色を眺めて凄寂ありと評するあり、然れば茲に月を觀る
 の意想見解を問ふあらんか、甲乙の問ふところ、必ずや齊一なら
 ざるべく、丙丁の應ふるところ必らず平等ならざるべし、乃甲者
 答へて云はん、圓月輝々として山頭に熠々あるは、是余が爲の麗景
 ありと、乙者應へて云はん、新月の柳梢に懸つて、雨後の青苔を照
 らすあるは、實に余が觀るところの美景ありと、尙進んで丙丁の云
 ふところを質せば、丙亦之に應じて云はん、弦月西山の邊に懸つて
 更に白雲の裡に隠れんとするときは、生が企望の清色あり、生が
 愛慕の麗容ありと、丁亦之に從ふて答へて曰く黒雲蒸々として將に
 雨らんとするときは、急風あり斜に拂ふて黒雲忽晴れ、瞭然たる明
 月、玉鏡の如く輝々として現はるゝを觀る、是生が常に愛翫して止

○記事紀行文

○蟲聲空しと雖ども
 叢裡其影あり○樹
 下の叢草蟲音を宿す
 ○墨田堤上、言問の
 邊、叢裡露を含んで
 蟲音濕かり○蟲聲
 の集まるところ月色
 妍々たり○蟲音遠く
 して秋風高し○墨田
 堤東七草の圃あり、
 特に秋蟲を集めて、
 月光を迎ふ

○隅田堤頭に雪

さるるところありと、嗚呼人意の向ふところ動くところ、人情の認む
 るところ思ふところ、實に千種萬態にして、決して平等均一ならざ
 るあり、夫斯の如くあれば、秋夜蟲聲を聞かんに、人耳意念の異なる
 るに從ふて、悉皆相違ふべきあり、是に於て余獨歩を進めて墨田
 に至り、三圍社前草深ざるところに坐し、特に蟲音の動くあるを俟て
 り、今幸にも半輪の月あり、遠く房總の天より昇り、華表を照ら
 して其影の斜なるとき、四邊聲立つて唧々啾々たる啾々啾々たり、
 琳々啾々たり、蓋是萬蟲相群つて、其咽を鬪はゝむるあり、余大
 に感慨に堪へず、嗚呼秋夜の景たる、月を賞するに好く蟲を聞に宜
 し、而も其の月光の照らすところ、其の蟲聲の響くところを考ふる
 勿れ、是必ずや快怡を呼ぶ能はずして却つて悲哀を生ずるに至らん
 のみと云はんか、全聊か想ふところを記す

○隅田堤頭に雪を觀るの記

○記事紀行文

を觀るの記

堤は長くして、白雪の一字を形り、水は翠にして、其影を映すること深し○鹽々たる白雪は、長く聯綴して、堤上に堆し○雪を戴くの堤あり、水は湛はすの流れあり○川上長堤あり、雪を載せて皎々たり○寒風雪を拂ふて、堤頭益

東西總て數十里外の地、南北亦數十里外の田、富士山遙に聳えて白扇の倒に懸れるに似たり、築波山遠く峙つて、怪巖の空に竝べるに齊し、然るも皆是白雪に埋められ、皓々體々として一微の汚濁を加之總房、武相、常野の邊、一望千里遮るものなく、平原坦圃、沿海のところ、悉愈雪敷の重されるのみ、嗚呼壯快勇愉の景あるか否、時に余が家は木母寺北の田傍にあり、右瞰左眺遠近の地左視右望遐邇の丘、相竝び胥聯つて總て瞳下に集まるべく、實に云ふべからざるの風景を縦にするを得るあり、遇人あり余が家を過つて雪の眞景を評せんことを請へり、否之を評せんことを請へるのみにあらず、自亦之を望んで評せんとするあり、余素より斯景を好めば、喜び諾して、樓に誘ひ、特に四扉を開いて席を同らし、坐視起望の間に於て種々鴉毛の如何を評談したり、彼曰く雪景の少あるは實況狭くして眞味に乏し、然るも今日の望眺即武蔵野の雪

記

○記事紀行文

○上野公園に櫻

花を賞するの

白し○寒堤の白雪、墨田の水に映じて、愈深し○霰水上に浮びて、翠色深し○堤下の流れ、堤上の雪○雪ふること頻にして、堤頭寂寞たり

たるものは、區域宏大にして、際涯極めて緩緩なれば、風光之に従ふて潤く、狀勢之に應じて久し、嗚呼快あるか否、是此の遠影や、是道の壯景やと、余亦之を評して曰く、狀態容勢千様にして、始終均齊あらざるものは、却つて宏大廣滿の間に擴張せんことを要す如何とされば切に僅少短縮あらんには、其狀簡に過ぎて美質に乏ければあり、而も關東廣原の雪景あるものは、疆涯特に大にして、瞻眺の價值充分ありと、是よりして更に洋食を喫し和酒を傾けて興を加へ、快話怡談以て時の過ぐるを知らず、乍時辰器の夕刻を告ぐるに逢ふて客の驚去るを送り、遂に窓戸を扃して机に對し、墨田堤頭に雪を觀るの記を作る

○上野公園に櫻を賞するの記

深林翠綠濃にして、園色大あるところあり、之を稱して上野と云ふ、是元三百年來培養の櫻樹多く、特に叮嚀ある保護を加へられ

○記事紀行文

不忍の池東一山あり、特に名けて忍ヶ岡と云ふ、春日花盛にして、鶯鳥の轉ずること多々あり○上野公園櫻花美あり○上野の櫻樹翠林の間に茂り、春朝 春夜 頻々として開く○公園名櫻あり翠林の邊に盈満たり○上野山頭萬樹の櫻、日々に綻びて青色妍あり

ば、設計組織共に自然に適ひ、風色頗る宏にして且美あり、古より別に稱して忍ヶ岡と云ふ、岡西清池あり不忍の池と云ふ、即山水相應じて景色甚麗々たり、殊に涯りなきの翠樹、天をも劈くばかりの巨幹多くして、更に無數の櫻花を交へたれば、麗娟にして却つて清爽粹灑たり、清爽粹灑にして還つて麗娟たり、世に所謂陰陽相合して眞の趣味あり、黑白霄竝んで全き勢狀ありとの諺に同じく、單一箇獨にして翠緑の一に偏し、花色一に傾かば、其趣や素より平凡に過ぎざるべきあり、而も兩色 相交りたるを以て其美益す美あるべく、其景極めて壯快あるべきあり、時に東叡山寺の鐘磬あり、樹林に響いて園裡を動かせば、櫻花所々に散落して、夕暮の景を示し、鶯鳥翼を收めて時に歸るあり、余や今單身獨歩の身、別に伴侶なければ、唯獨此の壯景を縦にしつゝあるのみ、時に人あり余が肩を叩いて曰く、君も亦風流の君子あるか、特に伴を求め

○記事紀行文

○春色 妍々たり上野の山、萬樹の櫻花時を競ふて開く○人あり余に告げて曰く、今日は是上野山頭盛春の期ありと○人あり余が寓門を叩いて曰く、櫻花満々たり上野の山と○東叡山頭櫻花盛々たり○東叡山頭名櫻盛なり○上野丘邊満開の花○櫻花東西に盈ちた

ず、侶を誘はずと雖ども、櫻花ある一友あり、春色ある一侶あり、是之に由つて相樂み霄戯るの興を備ふれば、趣味清快にして、頗る妙好あり、敢て凡俗庸平の伴侶を求むるを要せざるあり、語に曰はずや、天下の狀況を探らんと欲せば、必先伴從を避くべきを要す社會の情態を知らんと欲せば、特に單獨孤一あるを便とす、如何とあれば時として障妨あるべく、却つて煩擾を生ずるの虞あれば、夫觀櫻のこと亦此理に基くのみ、蓋是風流の君子あらざれば、未此語を味ふ能はずと、余莞雨として笑ひ、更に之に應じて曰く、余別に風流君子に習はんとせざるにあらす、自然にして茲に至れるのみ、古人曰はずや、自然にして自然を行ふ、是自然あり、抑も自然あれば常に自然に従ふを以て天理人道と爲す、天理人道に従ふ是天理人道なりと、余が今日觀櫻の行たる、斯の自然即天理人道のあるところに従ふて試みたるものあり云々、乃知己相對するありと雖ども

○記事紀行文

敢て手を携へず、交相笑ふて去れり、然らば今日上野公園に櫻を賞したるの記を要せざるべからずと、急ぎ家に歸つて筆を執り、終に斯語を録するに至れり

○忍ぶヶ岡に暮雪を弄ぶの記

春は翠あり淡紅あり、鶯聲あり、夏は深緑あり清風あり、秋は明月あり、蟲聲あり、紅葉あり、各盛美壯麗のもののみ、然れども冬は唯單一孤調ある雪景あるのみ、否單一孤調として、敢て顧みるべき價值なきが如きか、否々其の價值なきにあらず、却つて大なる價值あるあり、時に友あり余が寓を訪ひ、切に誘ふて忍ぶヶ岡に至らしむ、乃相携へて杖を曳み、雪を踏んで不忍の池畔に巡り、岡西東照宮下の石階を攀す、終に摺鉢山頭に登つて四圍の景色を眺望したり、嗚呼壯あるかあ、宏あるかあ、東は總房一体の原野、少く南に亘つて相州の沿岸を觀るべく、北は常野に延び、筑波、日光の山影

記

雪を弄ぶの

暮雪の風色愈美あり○冬夕の雪景、更に體然たり○忍ぶヶ岡頭、暮雪深し○雪は深し忍ぶヶ岡○薄暮雪深くして、遠近際涯をし○雪降ること

○記事紀行文

盛にして暮色遙々たり○雪降ること頻にして、冬夕迫れり○風脚高からずと雖ども、雪降ること益々多々あり○薄暮天色變じて、雪景麗あり○夕風斜に吹いて雪降ること限りなし○東叡山頭白雪堆し

○飛鳥山に遊ぶの記

記

を認むべく、復び東照宮邊西階の頭に歸り、眺下一望不忍の池、向ヶ岡、湯島、本郷の地、更に越えて、少く北を願れば、清瀧山、根津、日暮里の岸等、總皆瞻々たる白雪を以て埋められたるところ、或は高さあり低きあり、或は斜あるあり、曲れるあり、或は長さあり短きあり、或は屋頭軒端あり、或は森林小丘あり、或は池澤海川あり、或は塔あり伽藍あり、或は高社華表ありて、其影其色一様ならず、千種萬態の趣味限りなきが如し、然れば上野公園の雪たる素より他に異るところ多く、偉觀壯望を備へて以て、世に比類なきの妙趣あるが如きか、余等今日登岡の擧、眞に幸業のことあるべきあり、是に於て同友某に勸めて此行の記を作らしめ、家に歸つて更に畫筆を染めたり

○飛鳥山に遊ぶの記

氣暖にして天晴れ、遠霞靄々として四邊皆長閑の状あり、時に校友

○記事紀行文

飛鳥山頭櫻花の美あり、飛鳥山麓春風の香あり○飛鳥山色最美なるのとき、黄鳥囀々して春色を賞す○飛鳥山邊櫻樹茂り、春色霞々として青霞深し○飛鳥山東蕪風あり○春色美麗あり、飛鳥の山○春風清美あり、飛鳥の嶺○東西風に追はれて至る櫻花の

五百有餘員、相携へて春季運動會の催しに預り、地を都邊飛鳥山に籍りて、大に清遊を試むべきことありたり、是に於て教員數十名の指揮監督に依つて、壯幼相集り、強弱胥群り、列を整へ伍を正うして途を發したり、幸にも朝來の好晴、殊更に暖ければ、櫻花爛熳として山體を包み、馥郁たる香芬、四圍を壓して來り、運動場頭春又春あり、快意嬉心交發り、終に豫備企設に従ふて繩引きあり玉取あり、旗取、競歩、二人三脚、三人四脚、擲飛、網越、中乘、障物等、順を追ひ序を正うして、之を試み、勝負を決し、優劣を區ち、賞を與へて行厨を開かしめ、各自在の歡を盡して歸路に就けり、乃斯の如く五百有餘名の校友悉皆運動會を賞するの語あり、或は詩歌、或は文章、或俳句、或は英詩等、頗る改良のもの多々あり、今其の七八を採つて左に録せん

飛鳥山頭に春季運動を試むるの記

飛鳥井生

時は是春あり、日は是皇祖の祭期あり、恰好し天晴れ氣暖にして櫻花梢に盈ち、嫩黄鳥下に隠れて嬌聲を縦にするあり、是に於て余等伴を携へ侶を提げて奔馳走駈し、急往迅來千態萬容の遊戯を試みたり、其の狀情の快壯ある、其の行動の爽宏ある、實に云ふべからざるのこののみ、今家に歸り机に對して書を繕かんとするの前に當り、筆を執つて這記を作る

同

飛鳥野生

運動のことたる、素より身體骨格をして強壯ならしめんが爲のみ、夫單に斯くの如く云放たば、眞に簡易平凡のことにして、別に便益を效すべきの舉あきか如し、然れども之が眞髓を探るときは、其功極めて多大ありと云ふべし、夫運動は身體をして健康ならしむ、身體健康なれば心意壯快あり、心意壯快なれば、精神明晰あり、精神

○記事紀行文

香○南北、風に驅られて至る春嶺の花○風に散す老樹の花○雨後の櫻花其色艶あり○艶乎たる雨後の櫻○五六の友人相群つて櫻花を賞す○伴僚席を設けて、櫻花を賞す○氣暖にして風光美あり○天晴れ氣暖にして、櫻花艶麗あり○天色麗々として、花情自

○記事紀行文

清美あり○氣色麗美にして、遠近花を以て盈たさる○恰好し天晴れ花薫るの日○恰好し風光静温の時たり○鶯鳥聲を弄んで、春色を語る○鶯鳥嬌音を放つて、春色の深さを告ぐ○黃鳥枝間に囀じて、春花の盛なるを贊す○嬌鶯あり櫻花を尋ねて飛ぶ○嬌鶯花

明晰なれば、考慮正し、考慮正しければ、行為清純あり、行為清純なれば、立身成効、忽至らん、嗚呼運動は立身成効の基たるあり、乃今校友運動會を催せるを賀し、聊所感を筆して紀念に代ふ

運動會に就いて感あり

飛鳥川生

人生は何の爲に此世に在るものあるか、未其の奥密なる眞理を知るに由よく、之が必要の主趣たる、如何の理ありて然るか、全以て研究精索したるものあり、然れども是運動其ものたる、人生養育上極めて必要なるや明あり、時に余等校友相謀り、今月今日を以て、春期運動會を試みんとして、都陔飛鳥山に趣き、各自任意の遊戯を弄び、歡を盡し樂を縱にするを得たり、否單に歡を盡し樂を縱にしたるのみにあらず、人生養育上極めて必要なる基因を効したるあり、體育成整上最大なる幸好を得たるものあり、乃思ふところを記して這會を祝す

同

飛鳥田生

同

飛鳥原生

櫻花既に開いて香唇を動かし、春風園林、玉塵を飛ばす、時に好友相戯れて心氣樂しく、噫然吟嘯、花復新あり、

春雲漢々として山色青く、校友相携ふ飛鳥の程、高人樓隱のところを問はんと欲すれば、花香を吹送る天風の聲、

同

飛鳥阪生

開邊春色、塵埃を絶ち、櫻花開くところ日光催す、飛鳥山頭嬉遊のとき、香芬馥郁として天を厭して來る、

同

飛鳥戸生

飛鳥山頭春風暖なれば、東西悉櫻花開き、南北愈香芬の中に在り、嗚呼快美ある哉、

同

飛鳥邊生

○記事紀行文

間に囀じて、春色の美あるを賞す○余等五六の友を携へて至る○余輩知友のも相供ふて來る○友を提げて花情を探る○友を誘ふて花情を捜る○其の状情の清快ある、實に云ふべからざるあり○其の壯快あること、實に筆

飛鳥邊生

○記事紀行文

紙の及ぶところにあらず○其の爽快あること、敢て名状すべ

からざるあり○茲に筆紙を執つて之が状情を記せんとするも

、特に及ばざるどころあり○春色明美にして、敢て筆紙の

記し盡すべきものにあらず噫々○茲に筆を染めて之が状況を畫かんと欲すれども

日煖にして山頭霞暖き、風静にして山下細流の聲を聞く、時に鶯鳥あり翼を鼓つて啼けば、櫻花爛漫として萬樹に滿つ、

同

飛鳥木生

遠近霞深くして春色大あらば、山頭の櫻花爛漫たるどころ、黄鳥徐に囀じて其美を賞し、人々相競ふて其聲を賞す、

同

飛鳥尾生

明美限りなきの山、艶麗極りなきの花、春雨に逢ふて瀟ひ、春風に觸れて薫る、吾人數友相伴ふて此山に遊び、特に胥吟じて此花を賞せり、

同

飛鳥生

春風暖にして櫻花笑ひ、馥郁たる香芬四圍に盈つ、嗚呼快美ある哉此景、

同

飛鳥村生

○記事紀行文

拙劣の手腕、素より能ふべきことにあらず○麗美の状、特に窮極なきが如し○艶美の景色、敢て盡くるところなし

○吉野山に櫻花を觀るの記

吉野山頭櫻樹の林あり、俯視仰瞰するも、其の際涯を知る能はず○芳野の山櫻は單瓣のみ、而も其色

遠く望めば雲煙の如く、近く瞰れば錦繡に似たり、殊に鶯鳥あり梢間に旋つて啼き、春風輕く吹いて香芬を擴む、而も是唯春時の景のみ、古語に曰く、花薫美ありと雖ども敢て長に亘らず、蓋一期虛榮に過ぎずと、是或は然らん乎

○吉野山に櫻花を觀るの記

余常に閒暇なしと雖ども、性として素より櫻花を好み、然れば千難萬障ありと雖ども、特に日を計り時を搜つて觀花の行を繼にすること屢あり、今や吉野の櫻花將に開かんとするのときありと聞く、是必ず速に往いて觀覽せざるべからず、語に曰く時の至らんとするは、其機極めて敏捷あり、若し隣隙たも之を延すあらば、好期逸して遂に之を握るの際なきに至らんと、即時期進行の迅速なるを

○記事紀行文

美にして香芬深し○
 芳野の櫻林、山谷に
 盈ち、上下薫香の外
 なきあり○山前山後
 皆花のみ○山腹の櫻
 樹今尙盛榮たり○花
 上花あり芳野の山、
 花下花あり芳野の谷
 ○遠く望めば恰雪
 の如く、近く視れば
 、千萬限りなきの櫻
 花あり○花は是皇國
 主要の櫻、地は是神

示し、人の處世立身の遅れざらんことを戒しめたるものあり、夫騰
 踏して期に後るゝことの害あるを知らば、觀花の行亦決して等閑に
 附すべからざるものたり、往くべし行くべし、疾く行かざるべから
 ざるありと、遂に装を整へて吉野に至れば、山上遠く山下近からず
 して既に芬々たる香氣來り、春色盈満として我を迎へつゝあるが
 如し、是に於て歩を進めて吉野川の沿岸に登り、更に吉野町に入り
 一目千本の林を眺望すれば、上下高低悉皆花と花のみ、古來文人
 詩仙墨客の輩、交往いて花を賞し、迭に來て香を弄び、韻を試み
 賦を竝ぶありと雖ども、未之が精細を穿てるものなく、圖畫寫生の
 筆、決して其の實景を表はしたるものなく、蓋是麗美清艶あること
 宏遠に過ぎ、廣漠に餘り、既に天下の精巧にして、之が精巧を寫す
 能はざるならむ、嗚呼宏あるか吉野の山、嗚呼美あるか吉野の
 花花に入て花を搜れば、際限なき花のみ、花を出で、花を顧みれば

○記事紀行文

州冠麗の山○天晴れ
 て風暖ふれば、櫻
 花綻ぶ○氣寒からざ
 れども白雪の降るか
 と疑はる、蓋是吉野
 山頭、櫻花の景たり
 ○最美あり吉野の花
 ○極めて麗なり芳野
 の櫻○遠く眺むるも
 皆櫻花のみ、近く望
 むも亦櫻花のみ○嗚
 呼美あるか吉野の
 花○嗚呼麗あるか吉

亦究極なき花のみ、余が此花を探ること既に十有二回、年々歳々、
 春三月を以て道山に登り、殆んを三日の間山谷に上下し、高低に俯
 仰して、花を觀んことにのみ我々たりしあり、今年亦三日を要し、
 朝夕始終花間に歩行し且逍遙して止まざりしあり、然るに一日急雨
 あり少く風脚を加へたれば、満開の花弁之がために打破せられ、霏
 々として散じ、片々として飛とこる、實に惜むべく悲むべきものな
 りと雖ども、際限なきの山林、際限なきの香、雨に濡ふて艶色高く
 風に追はれて、紊亂するの狀、決して明表すべからざるあり、剩雨
 後潤濕多々あるのとき、遠く花林の狀容を望めば、淡紅少く色を増
 し、芬芳低く移りて山谷を繞るの感あり、嗚呼櫻花の勝を探らんと
 欲せば、東途隅田、上野、飛鳥、小金井の名地あり、關西風峽、吉
 野の優場あり、其數取て小しと云ふべからざれども、特に吉野の花
 の宏麗ある、卓絶秀逸のものたるべし、余常に此山を愛し此花を賞

○記事紀行文

芳野の櫻○一目千本の櫻林あり、芳野限りなくして黄鳥を招く○一望櫻林の外あきあり○四圍櫻林を以て盈たさる○四圍皆香芬のみ○芳香天地に満ちたり

○吉野山に月を賞するの記

月下の名山景色美あり○月下の風光、益娟々たり○月前

して止まざれば、雨中の吉野、風の吉野、月の吉野、雪の吉野等、悉く皆實驗の中にあり、尙花の吉野と云はゞ、最得意のものにして、花を觀、夢中花を語り、夢中花に戯むるの擧あり、嗚呼余が愛花の性、斯の如くに奇あると思へば、終に花の爲に狂心するあらんやも量られず、長く愛好のものに觸るゝときは、能く狂するに至るありと聞く、決して此山に止まるべからず、急去つて歸らんかあど勿々にして旅寓を辭し、山を下り谷を渡つて國道に出で、俸を雇ふて北に馳けたり

○吉野山に月を賞するの記

吉野山とは是花の山のみ、否決して花の山のみにあらず、月の景色亦極めて清美爽麗あるあり余一日友を誘ふて此名山に登り、淡暮某旅寓に入つて晚餐を了へ、更に寓を出で、山頂に至り、遠く東天を仰いで玉兔の昇るを俟てり、時恰も八月三五の日あれば、圓月照々として白雲を破つて現はれ、四邊の嶺峯連綿として起伏し、望下眺前鮮々として塵埃たもあさが如し、友人頸に歎賞して止まず、遂に、贊辭あり、直に懷紙を取り野硯を磨して余に示せり、蓋是詞藻少くして、且韻字を用ゐざれども而も句勢流暢にして趣旨清爽あるところあり即

春のあしたの花もよし、
秋のゆふべの月もよし、
冬の日頃のゆきもよし、
實に三芳野の名に適ふ、
山のいたゞき雲晴れて、
谷のそこまで月を照る、
閑あきかけに鳴く蟲の、
聲さへ専ら澄みけりあ、

余亦一辭を賦して曰く

風は林梢を掃ひ草煙の如く皓々たる圓月特に明あるの邊、芳野山頭白雲空く、快爽ある景色快爽ある天
然るに又友人の文詞あり、之を録して余に示し、特に斧正せんことを

○記事紀行文

の山峯焯々たり○名嶺の月光無限の麗色あり○光は高し名山の月○山頭の弦月、櫻樹に懸れり○秋夜の名山、月光に依つて益す清美あり○三五の明月、晴灼として輝く○半輪の月は高し、吉野の山○新月山端に懸つて秋霽静あり○月光を踏んで月光の美あると

ころに至る○明月の
照らすところ、明景
あり○焯々たる明月
山腹に懸れり○清爽
限りなし○麗美際限
なし

○吉野山樓に

雪景を觀る

の記

名峯六花あり、艶美
最深し○名峯の白
雪、趣味限りなし○
春は櫻花に由つて美

を請へり、乃取つて之を覽れば

吟歌して月を賞す山邊の樓、白雪來往す吉野の秋、空階あるに非
ずして草蟲咽び、今宵最佳し是此行

斯の如く二人相對して詩歌を闘はし、胥評贊し交論明して夜の閑
くるを知らず、露深く袂袖を濡はすこと頻ふるに及び、疾起つて旅寓
に歸り、翌曉霧を冒して山を下れり乃筆を執つて此の行事を記す

○吉野山樓に雪景を觀るの記

四邊皚々として皆鵝毛のみ、四圍皎々として悉銀露のみ、此地は
最三芳野の奥、吉野の卷あり、余や特に雪景を弄ばんとして杖を曳
きたれば、某山樓に宿つて朝來霏々たる清色を望み、風に散る霰
風に飛ぶ霰、縦横斜曲千變の狀、實に明表すべからず、眞に解説
する能はざるこののみ、春にして花に富み、秋にして月に昌ある
の山、今又雪に依つて麗美の景を生ず、嗚呼偉あるか三芳野の地

あるべきも、冬は六
花に因つて極めて麗
あり○皎乎たる名山
の雪○皓々たる靈峯
の雪、嗚々たるか
高峯の雪○特に杖を
曳いて吉野に至り、
寒霜月を迎へて其美
を賞す○友を携へて
雪を芳野の山頭に賞
す

○春曉に舞子

に遊ぶの記

○記事紀行文

嗚呼盛あるか三芳野の雪、西人云へるあり雪景に富めるの地は、
其の山容、其の水狀、其樹林、原野、岡丘の態、變異違替の甚き
ものあらざれば、決して精美ある能はざるべし、蓋は一概均齊のも
のにして、全体白色の外なき、決して變化と現はさざればあり、夫
人の性の如きも亦然り、正直一遍にして敢て他を思はざるの人、若
くは強固純白にして、少も裝飾なきの徒ならば、風俗行爲、言語、
音聲、容貌等に於て一種特得、衆目を驚かし、世間を驚むべきの優
舉からんには、決して社會の尊重を蒙る能はず、必ず天下の敬慕
を占る能はざるありと、余茲に吉野山頭の雪を眺めて、特に此語の
理あるところを覺れるあり、乃所感を記して後の戒と爲す

○春曉舞子に戯ぶの記

踊るが如く、躍ふ如き杖、伏すが如く寝るが如きの幹、翠綠相滴り
微風斜に吹いて、宛然琴瑟の音の如く、曉々鬪々汀渚を厭して來る

○記事紀行文

白砂青松の下、春風
 徐に至る○白砂の
 邊青松あり○老松
 枝を垂れて、春色
 を迎ふ○老松風を合
 んで、夏熱を拂ふ○
 青松明月を停めて秋
 色に誇る○松梢雪を
 載せて、寒浪に映す
 ○銀砂の邊、三五の
 月を迎へ、衛鳥翼を
 鼓いて、遠く波途に
 飛ぶ○波上遙に觀る

ものあり、是舞子の濱松あり、余今を去る三閏年の前、春三月三日
 の曉、佛人某氏と共に神戸を發し、瀛車に投じて舞子に至り、或は
 老松の元に踞踏し、或は瀛砂の邊に臥し、或は汀砌の石上に休ひ、
 或は右に或は左に、散策運動、馳駈往來して近く須磨、明石の露饅
 を眺め、遠く淡路島の山影を望み、衛鳥翼を翻へして浪頭に翔ける
 を賞し、鮮鱗銀鱖の波外に跳ぶあるを視、愉然快乎として春色の限
 りなきに感歎せるあり、是に於て佛人某氏の作詩あり、余試みに之
 を採譯せり

一

汀にあら瀛の松、
 千代を經にけむ姿あり、
 吹く春風をやとらせて、
 最面白き聲すあり、

枝を垂れぬるるを見れば、

緑いやます葉のかけは、
 琴の音色にまがふある、
 最ももしろき聲すあり、

二

遠く浪路を見渡せば、
 往く千鳥あり衛あり、
 東の天にかすみして、
 西のあふたにきりこめて、

淡路島山かけきよく、
 歸る船あり艇あり、
 遙につらなる浪華湯、
 微につよく玉藻沖、

三

磯にあさりて手さぐれば、
 漁の子たちが争ふて、
 拾ふ姿のをかしさよ、
 鶯權の音にまじへつゝ、

砂のあかに貝を視ひ、
 我よ我よと競ひつゝ、
 水夫船子らが綱引きして、
 うたふ聲々おもしろや、

四

實に日の本は神の國、
 うるはしき山清き水、

世にめづらしきくさくさの、
 春は春あり夏は夏、

○記事紀行文

舞子の月○砂汀靜に
 揺く、舞子の松○老
 松枝を垂れて、銀砂
 を握るに似たり○松
 樹月下に茂り、汀風
 浪波を追ふ○舞子濱
 頭、風靜あるところ
 、衛鳥友を誘ふて、
 遠く波上に翔ふ○舞
 子濱邊清風あり、遠
 く衛鳥の聲を載せて
 去り、近く行人の袖
 を拂ふて來る○松梢

○記事紀行文

○記事紀行文

縁深くして、風光

益す絶佳あり○風光

の美あること、敢て

名状すべからず○松

風の颯々たるどころ

自清音あり○清音

の發るところを尋ね

て、特に蒼然たる老

松を認む○絶佳絶美

の風景あり

○舞子濱汀に

明月を觀る

の記

秋の月かけ冬の雪

麗うこそ見えにける、

四季のけぢめもあらなくに、
最たのもしきどころかぢ。

抑外人にして斯くの如きの賞辭を惜まず、一心以て之を美とし、

一念以て之を麗とし、賛歎措かず手を拍つて快と呼ぶあるは、蓋し

優秀限りなきの絶景あればあり、余感銘に堪へず、聲を放つて高吟

すれば、佛人某氏も亦國音を以て唱稱すること三回、嗚呼今日舞子

濱頭散策の樂たる、實に云ふべからざるの快情を以て盈されたり、

時に遠寺梵鐘の聲あり、夕昕を告げて歸らんことを促すに似たり、

乃佛人某氏を勸めて瀛車に投じ、一瀉千里の勢に任せ、瞬間にし

て神戸に達せり

○舞子濱汀に明月を觀るの記

遠近影暗くして、四圍何の狀態あるやを知るべからず、眼を閉ぢて

之を察すれば、婆々として音あるは、芽停の海の浪あらん、削々と

○記事紀行文

婆々として音あるは

、恐は是松風の波

頭に騒ぐあらん○婆

々として聲あるは、

蓋波脚の落を洗ふ

あり○汀渚に往來す

、衛鳥の聲○松風に

追はるゝの千鳥あり

○波上に浮べる鷗あり

り○波間に漂ふ鷗鳥

ある○鳧鴈波上に漂

ふて、海色艶あり○

遠く聞ゆ、甯院の鐘

聲するは、汀渚の邊に往來する千鳥の爪の響あらん、遠く耳を貫き

來るは、淡路の北岸、岩屋觀音寺の鐘聲あらん、近く袖を拂ひ、襟

を撫で去るものは、濱松に由つて吹荒べるの風あらん、蓋是暗考

推しに成るものありと雖も、總皆誤認さかるべきあり、否誤認さ

きのみならず、必愈其鶴に當れるもののみ、然るに刻一刻を過ぎ

東天遙に半輪の月を浮べ、白雲飄舞たるの間より輝くあり、遠然暗

を破つて四圍照々たり、上下悉く瞭然たり、嗚呼舞子濱頭の月や

他に優るの景ありとは、或る古人の言あり、余今にして其虛あらざ

るを知れり、月あり松梢に懸つて、風と共に動き、蟲あり松下に宿

つて、露に咽を濡はすとば、某文人の由井ヶ濱に遊べるのとき、特

に筆を染めたるどころの賛詞あり、是單に由井ヶ濱のみに用ゆべき

の語句にあらず、舞子の濱松も亦此の賛詞を蒙るべきものたり、否

由井ヶ濱にして此の賛詞ありとせば、舞子の濱たるもの既に之に勝

○記事紀行文

○遠く響く、山院の鐘
 ○遙に響く、山寺の鐘
 ○鐘聲鏗々として波上を渡る
 ○梵鐘の聲は鏗々たり、明月の夜
 ○愉快の状云ふべからず
 ○怡々限りあり、快怡窮りあり
 ○快味際涯なし
 ○慰々として賛歎するの外なきあり

るの賞辭あかるべからざるあり、殊に淡路の島頭より照らし來り、斜に銀波を渡つて遠く備藝の沿岸、阿讚伊の北汀に輝くの状、全以て明釋すべからざるの麗美あり、是に於て余が賞月の感念を加ふること増深く、竊に文あり又詩あり、愉快胸を衝いて起り、快喜腸に盈ちて、其の際涯を知らざるが如し、嗚呼斯濱の松月たるもの能く文客をして垂涎せしめ、詩人をして耽惑せしめ、歌仙、俳師をして狂喜せしむるの勝あり、余は常に學に疎ければ、文を作り詩賦するの識量乏く、歌を詠じ句を弄ぶの才能なく、唯此濱に來つて徒に月を觀るに過ぎざれども、手を空くして歸らんこと最懺愧の至りあれば、世人の嗤嘲を蒙らんことを顧るに暇あらず、特に疎韻を連ね、駄辭を綴りたるあり、時已に曉に垂んとして東天白氣あり、西空殘月淡く、濱後鐘聲の聞ゆるあり、乃驚愕以て家に歸らんことを思へば、松頭俄に燦輝として金鳥の光を現はし來れり

○舞子濱汀に

夜雪を賞す

るの記

夜暗しと雖ども、白雪に依つて、却つて明あり
 ○夜雪の景色頗る美あり
 ○舞子濱頭に夜雪を眺むれば、綠波益翠あるを視る
 ○舞子の汀渚、夕雪あり、浪に浮び波に漂ふて、景色美あり
 ○夕影微に

○舞子濱汀に夜雪を賞するの記

舞子濱汀某樓に登り、特に月下の積雪を賞すべきのとき至れり、嗚呼快怡あるか否是此宵、嗚呼喜嬉たるか否是斯雪、余や年來這濱に遊び、春、夏、秋、冬、杖を曳くこと屢にして、或は遠霞の靉靆たるを眺め、或は近海漁網の状を探り、或は避暑迎涼の旅、或は明月松風の行、時に應じ、機に臨んで、隨意の企舉を試みたること、極めて少からず、而も夜雪を觀るの好期に接せず、頗る遺憾に堪へざりしと雖ども、茲に偶然某友人の勸諭に由り、遂に従がひ來つて斯の如きの佳景を觀るを得たり、嗚呼快怡あるか否是此宵、嗚呼喜嬉あるか否是斯雪、然れば特に觀雪の記あかるべからず、乃筆を執つて之が概況を記す

時は維某年一月二十有五日あり、親友某と共に瀟車に投じて舞子の渚汀に至り、薄暮某樓に登つて、對水の窓を開き、酒を命じ食を

○記事紀行文

○記事紀行文

○遠く響く、山院の鐘
 ○遙に響く、山寺の鐘
 ○鐘聲鏗々として波上を渡る
 ○梵鐘の聲は鏗々たり、明月の夜
 ○愉快の状云ふべからず
 ○怡々限りありし
 ○快味際涯なし
 ○慰々として賛歎するの外なきあり

るの賞辭あかるべからざるあり、殊に淡路の島頭より照らし來り、斜に銀波を渡つて遠く備藝の沿岸、阿讃伊の北汀に輝くの状、全以て明釋すべからざるの麗美あり、是に於て余が賞月の感念を加ふること増深く、竊に文あり又詩あり、愉快胸を衝いて起り、快喜勝に盈ちて、其の際涯を知らざるが如し、嗚呼斯濱の松月たるも、の能く文客をして垂涎せしめ、詩人をして耽惑せしめ、歌仙、俳師をして狂喜せしむるの勝あり、余は常に學に疎ければ、文を作り詩賦するの識量乏く、歌を詠じ句を弄ぶの才能なく、唯此濱に來つて徒に月を觀るに過ぎざれども、手を空くして歸らんこと最懣愧の至りなれば、世人の嗤嘲を蒙らんことを願るに暇あらず、特に疎韻を連ね、駄辭を綴りたるあり、時已に曉に垂んとして東天白氣あり、西空殘月淡く、濱後鐘聲の聞ゆるあり、乃驚愕以て家に歸らんことを思へば、松頭俄に燦輝として金鳥の光を現はし來れり

○舞子濱汀に

夜雪を賞するの記
 夜暗しと雖ども、白雪に依つて、却つて明あり
 ○夜雪の景色頗る美あり
 ○舞子濱頭に夜雪を眺むれば、綠波益翠あるを視る
 ○舞子の汀、夕雪あり、浪に浮び波に漂ふて、景色美あり
 ○夕影微に

○舞子濱汀に夜雪を賞するの記

舞子濱汀某樓に登り、特に月下の積雪を賞すべきのとき至れり、嗚呼快怡あるか否是此宵、嗚呼喜嬉たるか否是斯雪、余や年來道濱に遊び、春、夏、秋、冬、杖を曳くこと屢にして、或は遠霞の飄飄たるを眺め、或は近海漁網の状を探り、或は避暑迎涼の旅、或は明月松風の行、時に應じ、機に臨んで、隨意の企舉を試みたること、極めて少からず、而も夜雪を觀るの好期に接せず、頗る遺憾に堪へざりしと雖ども、茲に遇然某友人の勸諭に由り、遂に從がひ來つて斯の如きの佳景を瞰るを得たり、嗚呼快怡あるか否是此宵、嗚呼喜嬉あるか否是斯雪、然れば特に觀雪の記あかるべからず、乃筆を執つて之が概況を記す
 時は維某年一月二十有五日あり、親友某と共に瀛車に投じて舞子の濱汀に至り、薄暮某樓に登つて、對水の窓を開き、酒を命じ食を

○記事紀行文

○記事紀行文

して白雪松頭に懸れり
 ○濱汀の夕雪頗る
 絶美あり○汀頭の夕
 雪、浪に映じて、益
 す皓々たり○舞子の
 夕影極めて静閑あり
 ○汀砌に起つて遙に
 夕風の至るを望めば
 、舞子濱頭雪激飛ぶ

○住吉濱頭に

松風を迎ふ

呼んで、遠く淡路の島影を望み近く砌端の浪を眺め、清怡純快の心
 念を湛へ、笑譚興話頻あるとき、忽片碎の氷鏡輝き、四面焯々と
 して、白銀の山あり、否白銀の山あるのみにあらず、濱汀松杉皆白
 銀の下に埋められ、往來の船、馳駆の漁夫、是亦悉白銀を以て包
 まれたるが如く、皚々たり皓々たり、灼々焔々、相輝いて瞳眸を射
 るかと疑はれ、實に無限の麗景たるなり、是に於て船を賃して寒浪
 に浮び、遠近夜雪の妙況を弄ばんことを欲し、樓主に依つて懇篤
 誠實ある舟夫を呼び、友人某と共に之に投じ、右に勝し左に權し
 精細緻密、眼力の達せん限り眺望を縦にし、思念の及ばん涯り考
 案を専にし、終に曉を徹して樓に還し、朝食を喫して歸途に就けり
 嗚呼舞子濱汀に夜雪を觀るの快たるや、蓋し窮極あからんのみ嗚呼

○住吉濱頭に松風を迎ふるの記

遠く吹來る老松の風、近く響渡る琴瑟の聲、呼々たるが如くにして

○記事紀行文

るの記
 住吉濱頭松風の清朗
 あるを聴く○住吉濱
 頭松風の高さを聴く
 ○住吉濱邊松風低く
 、行人襟を開いて、
 快涼を容る○住吉
 濱上松風の聲を聴
 けば、宛曉々たる
 笛音の如し○遠く笛
 聲あり、風に從ふて
 余が耳を叩けり、蓋
 是濱頭青松の動ける

呼々たらず、鏘々たるが如くにして鏘々たらず、否靜に至るときは
 呼々たらずして凜々たり、緩く聞ゆるときは、鏘々たらずして曉々
 たり、時に某月某日を以て住吉の濱漸に遊べば、老松枝を垂れて白
 砂を握るに似たり、翠葉梢に盈ちて宛然玉露の滴るが如く、遙に見
 る由良海峽の浪、往來の船船、氣煙を吐き白帆を掲げ、北より巡つ
 て紀伊の沖に出で、南より入つて浪華の灣に進み、美を乗せて行き
 麗を載せて來り、風光艶々として實に云ふべからざるの景たり、加
 之俄に琴を弾するの聲あり、瑟を鼓するの音あり、鬪腕として濱
 頭に透り、恰も雲上仙女の樂を奏するが如きの感あり、奈時に怪氣
 に堪へず、手を拍ち脚を踏んで、賛詞を唱へ、踊躍して止まるとこ
 ろを知らざるに至れり、嗚呼奇あるか妙あるか、此地は是濱汀
 のみ、別に琴瑟を弄ぶの家なくして、清音朗聲の聞ゆるあるは、全
 く怪異のことあるのみ、四顧俯仰して其の妙音の發るところを尋ぬ

○記事紀行文

あらん○青松益青
 々たり住吉の濱○蒼
 松翠枝を垂れて、白
 砂を掬するかと疑は
 る○松風唳々乎と
 して濱頭に響く○松
 風颯々として、恰笛
 聲の如し○人あり濱
 頭に起つて、松風の
 至るを待つ○風あし
 と雖ども、松頭唳
 々の聲あり○松風四
 圍に動いて、恰笛

るも敢て之を認むる能はず、蓋は神仙の行爲あらんかと、疑念交
 至つて遂に踵を反し、或は西に或は東に、或は北に或は南に、馳驅
 奔走して探査すれども、決して其の基因するところを瞰る能はず、
 嗚呼奇なり嗚呼怪あり、抑天使來つて曲を奏するあるか、地祇現
 はれて譜を弄ぶあるか、何夫神妙靈奇にして容易に窺知るの道なき
 や、時に童兒あり余が前を過つて遠く去らんとするに逢へり、余周
 章彼を止めて問ふて曰く、汝聞かずや、空際琴瑟を鼓するあるを、
 是誰が家の妙手の奏するところなるか、汝若し之を知るあらば、請
 ふ余を伴ふて其許に至らんことをと、童兒慨然として余が顔を仰い
 て歎じて曰く、嗚呼君は極めて迂遠疎濶の人なり今にして琴を弾じ
 瑟を鼓するあるあり、濱汀渚邊遙々として、人家全く隔り、僅に鷗
 衛の翔翔するあるのみと、而も余尙之を信する能はず、益々疑念を
 催して童兒に質せば、彼復口を開いて大笑し、余が肩を叩いて曰

○記事紀行文

聲を送るが如し○松
 風徐に吹いて、恰
 琴瑟を鼓するが如し
 ○清音あり松梢の間
 より發る○麗音あり
 渚松の間より來る○
 誰か賛美せざるもの
 あらんや○豈賛歎せ
 ざらんや○快賞に
 堪へず

く、嗚呼了解せりく、蓋は琴を弾するにあらず、瑟を鼓するにあ
 らず、濱汀の老松、風に觸れて麗音を發し、颯々として恰奏曲の
 如くあるのみ、君知らずや、清風松梢を撃つときは、必ず麗音あり
 其響瑟琴に似たり、又蟲聲に齊し云の言あるを、是に於て余大
 に覺るところあり、天地聲音あし、事々物々相觸れて後初めて之を
 發す、然れば特に琴瑟あらざれども、琴瑟の聲を發すべし、人生の
 情状も亦斯くの如く、甲乙相齊く、丙丁相似たるもの多々あるべき
 あり、嗚呼余が現今の企望念思にして、別に學事に熟するなく、更
 に正儀に切あらざるあらば、必ずや邪曲奸惡の徒に似るべく、知ら
 ず識らず不正の輩に伍せらるゝに至らんのみ、余が松風を聞いて琴
 瑟を聲ありと誤認せるが如く、世人余を目して不正邪惡の輩たりと
 思ふの期あるあらん、嗚呼危い哉、乃所感述べて住吉濱頭に松
 風を迎ふるの記と爲す

○記事紀行文

○浪華灣頭に舟遊を試みるの記

浪華灣頭に舟遊を試みるの記
浪波高く搖ぎ、舟船低く動く○浪華灣頭浪波静にして、往來の船舶多々益す多々あり○浪華灣頭、水深さところ、無数の艇舸波を排して駭まる○浪華灣外、浪高きところ、大艦巨艦船艦を列ねて至り○

○浪華灣頭に舟遊を試みるの記

浪華灣頭に舟遊を試みるの記
清風徐に吹いて浪波却つて靜に、蘆葦擾々として白鷺還つて眠り日至夜去の船、遠來近到の船、千萬の貨を載せ又千萬の人を乗らしめ、織るが如く緩るが如く、頻繁混錯して敢て之を算定すべからず、嗚呼盛昌あるか浪華灣頭の賑ひ、嗚呼壯快あるか大阪港内の狀、時に余五六の友輩を伴ひ、船を賃して安治川に舩し、漸次路を進めて下流に浮び、遂に木津、尻無の河尾に漁り、或は右に漕ぎ左に繰り、走駈縦横、波間に行けば、鮮鱗群を爲して潜るところに渡り、金儲列を連ぬるところに巡り、特に釣を垂れて之を收め、直に炊火に上して快食し、更に瓢酒を傾けて興醉を貪り、各思ふに任せて詩を賦し文を整へ、高吟空唱、實に云ふべからざるの快を得たり、尙某友人竊に齋らすところの袍を開き、洋琴を操つて曲を試み、妙音沈々波を動かして發り、龍宮の神をして驚愕措く能はざ

○記事紀行文

○澗河に漁するの記

澗河に漁するの記
澗華灣内、水深さところ艇舸船舶帆を並べて來る

○澗河に漁するの記

澗河に漁するの記
微雨斜に降つて河水濁りを生じ、暖風靜に來つて、浪波音さきのことろ、艇を巡らし網を投じて漁するものあり、是某校同窓三四の友今日特に此舉を企てたるあり、恰好し春來魚族加はり、水下一面鱗鱗を以て盈充せらるゝの期たれば、一網一投にして千百の鱗尾あり右に漕ぎ左に掉し、進退縦横甚巧あり、乃僅々三四刻にして既に數斗に滿つるに至れり、其快極りあし、是に於て更に進んで牧方に廻り、廣く中流に浮んで鮮魚を焙り、豫計の酒を煖めて、相酌み胥食し、各思ふに任せて譔樂せしめたり、時に同行某氏聲を放つて歌ふて曰く、波浪の動くところ鮮鱗あり、鰲權の搖ぐところ麗

○記事紀行文

魚○紅鱗銀鱈總て麗
函の内に在り○西海
の魚族藻草の類、能
く蒐集して敢て漏さ
ず○海獸魚族藻草の
類、悉皆此の函
中に藏めらる○鯛魚
あり、玻璃函中に
飼はれ、海獸あり、
特に池を設けて潮水
を湛へ、臨機餌を與
へて其食を絶たす

河、溝、渠、塚、堀の状、能く其實を型し其真を模し、一見以て世
界五大洋を探ぐるを得べく、一閱以て其の十五海に漁るの感あり、
余や今を去る四年の前、春三月米國に赴き、某大博覽會に臨むに至
り、大水族館の設備を質し、專茲に學ぶところあり、爲に得るあ
るもの極めて多々ありしなり、然るに之が採集の法たる極めて精密
にして、最鄭重なれば、熱帯海河の魚族、寒温潮淡の鱗種、一々
細微なる區分を備へ、其の鱗様の如何、其鱗容の如何、鰓齒頭尾の
形に至るまで、圓方尖長如何を質し、游泳浮沈の狀態、上下進退の
姿勢等、總て眞景を以て築得たるところ、千尋の洋底、寸下の水裏
一視能く其の何物たるを覺るを得べければ、幼童愚者と雖ども、是
必ずや溝渠をらん、河海をらん、能學んで智見を擴め、能識つて
才量を求らるの便少からざりしなり、我國今日水族館の設けたる、
未完 全せりと云ふべからずと雖ども、殆ど其の九を得たりと爲す

○某動物園を
観るの記

特に園を設けて、禽
鳥を放ち、更に園を
構へて、萬獸を住ま
しむ○海陸の獸類、
其數を盡し、山谷の
鳥種、其數を餘さず
○怪鳥あり鐵籠に囚
せられて、遠く穹天
を仰げるの状、實に

べく、今一步せば、整成滿備の域に達せんのみ、余某水族館に臨む
の記を作る

○某動物園を觀るの記

園あり林あり又叢あり、原野の摸型、山谷の景況、池澤河江の状
態あり、殊に世界萬邦の獸禽を集め、其種其類の習慣に應じて之を
飼ひ、其の強弱大小の如何に由つて之を護り、悉皆便利を講じ
て、注意怠りなければ、獅子は能く山嶽に走つて狸兎を驅るの勢あ
り、恐るべきの顔を張つて怖るべきの聲を放ち、前趾を揚げて敵者
を撲たんとするの猛威を示し、虎は千里の竹林に駈つて、右飛左跳
し、萬里の原野に奔つて、咆哮叫喚するの態を表はし、象は大なる
體軀を動かして、山の揺ぐが如くに進み來り、長き奇鼻を弄んで、
草苔穀粒を掴み、特に其孔を用ひて、一氣能く數斛の水を飲み、盆
大の蹠を揚げて、砂泥を踏めるの趾、極めて大なる圓形を遺すを見

○記事紀行文

○記事紀行文

哀恨に堪へず○奇獸あり、眼を怒らし、爪を鋭くして、鐵柵の下に叫ぶ○猛獅あり、各鐵柵の内を鎖せられ、無心の牙を磨して、觀者の來るに對ふ○孔雀の玉尾、鸚鵡の紅腹、麒麟の黄皮、獵虎の栗毛、各皆美を競ふが如し○獸鳥あり其身高くして

る、駱駝は長驅を伸して頸首を掲げ、怪獸を開いて食餌を取り、重荷を負ひ、人を乗せて踏歩するの状あり、麒麟の長體、能く鹿に似て角あり、否角ありと雖も、馬の鬣髪を飾れるに齊きのみ、唯頸伸びて柳梢の翠を齧むべく脚健にして能く敵獸を蹴るに足る、騷騷共に皆、馬に似たれども、其體小にして却つて耳長し、而も又能く人を乗せ荷物を負ふて遠きに行くの便を爲すべし、馱鳥あり形體大にして長丈高く、殆駱駝の如きに達す、然れども其翼小にして飛ぶに便ならず、唯急奔迅馳するに當り、風を切つて方向を正するの機と爲すに過ぎず、此鳥も亦能く重荷を負ひ人を背にするに足る、豹あり其體虎の如くにして、斑紋美あり、叫聲恐るべく、威勢頗る劇烈あり、熊罷あり、形體牛に似て顔面短く、頭廣くして角なく、脚大にして爪鋭し、此獸や能く高樹に登り、蔓蘿に攀ぢ、後脚を用ゐて高し起立すべく、前趾を撲つて遠く岩頭に駈け得べく、然

○記事紀行文

丈餘に達す、而も小翼にして之を張るも空天に翔るに足らず、僅に風を切つて急走するのみ○駱駝あり、身長高くして馱鳥に越え能く重荷を負ひ、人を乗せて遠きに達す○白熊の巨體頗る威勢あり○猩猩奇態を示して、人を笑はしむ

れども熊の黒毛漆の如きに反して、罷體悉茶褐色を帯ぶるの別あり、又白熊あるものあり、其體大にして牛に勝り、毛色白くして威勢亦極めて猛獠あり彼常に寒地氷雪の間に住み、海豹、膾膾の如きを追ふて餌を爲すあり、鱈魚あり、身の長丈餘に餘り、體厚甲を重ね、極めて堅牢強固なれば、鎗鋒の鋭さも、容易に之を穿つ能はず、小銃の彈丸、決して之を貫く能はず、殊に其頭の大にして長さこと、體軀三分の一にあれば、能く馬を齧み牛を殺し、猛威劇烈の状、實に驚くべきものとす、猩猩あり其狀人の如しと雖も、皮膚栗色にして頭髮楮く、敢て言ひ語ることなければ、僅に猿の如くに叫泣するのみ、大猿あり丈餘の軀を備へて、兩臂長く、其頭を開けば宛然朱盆の如く、齒牙相並んで鋭きこと小なる刀鋸に似たり、然れども是能く樹木に登り梢頭に飛び敏活、快捷の舉作多し、其他無數の怪獸あり奇鳥あり、特に細微精密ある筆を執らんには、蓋し

○記事紀行文

少小の楮皮にして、記し盡すべきにあらず、更に縦覽記として大なる一巻の書をかかへば、乃硯に蓋して此記を止む

○春曉野遊の記

朝天雲晴れて、鶯鳥遶林に啼き、青霞山を巡つて、暖氣頰をり○春曉の天色煖氣を透へて開く○東雲光邊 野色閑あり○曉雲金色を帯びて、春風煖あり○春風吹くところ野色

○春曉野遊の記

遠く眺むれば露々たる青霞あり、四圍の山野を繞つて遙に長閑の状を示し、近く野邊の草花紅黄の色を現はし、更に香を放つて芬々たり、余や毎歲 仲春平寧の日を卜して、曉天に途を發し、野遊散策の舉行あり今年亦和暖の日を期し、疾起つて杖を曳き、某野に赴くの企計を懷き、午前六時を以て門戸を出で、單身獨歩急行のとき、君請ふ暫く止らんことを、余、君に問ふことありと、大聲叱呼するものあり、余は其ことの意外あるに驚き、四顧傾首して聲あるところを探り、尙其の誰あるやを考察せり、而も未之が實際を索むるに至らず、沈念默慮の半、突然背後に來つて肩を叩くものあり、疾顧れば即友人某あり、余驚いて質して曰く、何が故の斯く如く余を

○記事紀行文

明あり○野景閑にして、雉子の聲あり○雉子の啼くところ、春色大あり○野邊の春色極めて長閑あり○朝風徐に來つて野花開き、胡蝶群り飛んで春色を弄ぶ○風微にして蝶の飛ぶを妨げず○野邊の景色悉く春あり○野外の春色、翠綠深く、特に

拊搦せるやと、友人曰く余決して君を拊搦せるにあらず、君却つて余を拊搦せるのみ、君何すれど歩を速めて疾行し、余が止むるあるを聞かず、益す迅奔敏走せるやと、是に於て余大に覺るあり、天下の事物たる、甲あり乙あり又丙丁あり、其甲にして迅急あるときは乙之に應せんとして亦迅急あらざるべからず、其丙にして緩慢あるときは、丁之に從はんとして亦緩慢あらざるべからず、余曩に急行せり、故に余を追はんとして友人某も亦急行せるあり、嗚呼社會の狀況 人世の情勢たる、悉皆此理の中に起つて又此理の中に歸るのみ、乃更に友人を伴ひ某野に出で、春遊を經にすれば、雲雀あり、浪の如くに連列せる菜圃麥畔の間より飛び、雲際高く昇つて聲を放ち、櫻樹の林裡鶯音あり、余等の耳をして清爽あらしめ、翠綠滴るが如き青山あり、叢下雉子の聲を齎らして春興益す大ありき、然れども是永く茲に停まる能はず、唯朝食を喫するの前に

○記事紀行文

花あり其香高し

○春日友を會

して詩賦を

試む

友を會して詩席を設け、特に春日の開美を賞す○友を會して、春色の美あるを賞す○詩あり長閑ある春色を賞し、文あり麗美ある雅景を讚す○文人墨客手を

して、暫く運歩を試みたるのみ、乃友人某を促して家に歸り、忽々筆を執つて此記を作れり

○春日友を會して詩旅を試むるの記

嗚呼愉快あるか此行や、嗚呼愉快あるか此行や、時は維某年春三月十日にして、朝來天晴れ風暖に、青霞遠近に盈ち、鶯聲四邊に聞ゆるの清況あり、既に五六の友人余が家に集り、各僉豫計準備のあるあり、途を屋後の野邊に搜り、南を指して行くこと里餘、一望隈なく東西に張り、一眺限りなく南北に亘り、寸餘の綠草地面を蓋ひ、清麗明美の春色を湛へたり、余等此處の一方を掃ふて筵席を設け、相圍樂して詩冊を繕き、左者右思して韻を索り、種々聯次して以て贊春の情を述べたり、其の愉快云ふべからず、古語に曰はずや、四季の風光は死物のみ、之を視るもの、情意如何に由つて生成すべきのみと、然れば今日の春景たるもの素より生成せる狀況ある

携へて來る○詩友を伴ふて、春景を探る○詩會を設けて春色を賞す○詩會席上雅趣大あり○雅趣を齎らして至る外來の客○客あり詩冊を携へて來る○二三の友人一詩を賦せり

○芝浦に春漁

を試むるの

○記事紀行文

にあらす、唯其美、其麗を現はすに過ぎざるべしと雖ども、特に余輩の韻字に由つて發起生達するに至れるならんか、否余輩の韻字は拙劣平凡の意思に呼ばれて現はれたるのみ、決して其効あるべきあり、古來名詩妙歌あり、能く天地鬼神をして感せしめ、自然の現象をして變轉せしめたること少からず、是全く詩歌其もの、優逸にして、非凡卓絶の妙あるに因る、今余輩凡庸の筆は、尙凡庸の意思を記する能はざるべきあり嗚呼懺愧々々、然るも是此は大智碩學者の行爲にして、敢て余輩の企及ぶべきところにあらずれば、余輩も亦余輩の身に應じ、心に適するの働あり、拙劣凡庸の行爲を示し拙劣凡庸の詞を吐くあらば、天然の景亦之に應じて輕侮を弄び、却つて奇變の効果あらんか、嗚呼愉快あるか是此行

○芝浦に春魚を試みるの記

浪波ありと雖ども、却つて音高く、白沫汀に飛べども、敢て急風を

記

芝浦の渚汀銀砂明
 あり○芝浦の清風、
 春色を吹いて来る
 ○浦邊の水は綠あり
 春曉の浪○浪波を排
 して芝浦に熾すれば
 、品川灣海魚鱖多々
 あり○浦砌に添ふて
 浪を蹴るの舟あり、
 釣を垂れ、網を投じ
 て、終に日の暮るゝ
 を知らず○芝浦の春

招かず、實に平寧靜謐の春曉あり、時に豚兒二人を携へて艇に投じ
 濱濱を離れて遠く漕ぎ、悠悠波上に浮んで、釣を試み網を弄ぶに至
 れり、即是芝浦を去つて東京灣の中央に進み、品川を右にし、鋸
 山を左にし、遠く横濱港を眺めつゝあるあり、殊に朝來暖氣濃にし
 て、漁魚に適すべき風光あれば、幼兒戯れに杆を投するあるも、特
 に大なる鱸魚を釣すべく、一釣一魚、一網千鱸、收穫の數擧げて算
 ふるに違わらざるあり、乃兒に命じて火を設け、鮮魚を焙つて行厨
 を開き、滄海滿々たるの間に在つて、企望を縦にし快怡を自由に
 するの行擧あること、實に無涯の幸福あり、西診に曰く、大なる志
 しを養はんと欲せば、必先づ常に滄海に遊ぶべし、偉ある企を計ら
 んと欲せば、遠洋航海を學ぶべし、特に之を幼兒に試みよ、其の思
 志堅固にして意想確立するに至らんと、眞に然り、眞に然り、余や
 斯く芝浦に船を弄びて、日暮家に歸り、興味湧くが如きの感に打た

月、浪上を照らし、
 特に魚族を集めて釣
 網に便す○舟艇を浮
 べて、釣網を試む

○夢に湊川に至るの記

嗚呼忠臣楠氏の墓石
 、吾人特に詣つて、
 神靈を拜せん○嗚呼
 忠臣楠氏の墳、特に
 誠標と成つて、千古

○記事紀行文

れ、再遊の情切あるに際し、二兒亦之を促して止まず、復船に投じ
 て行徳の浦に釣し、三度神奈川沖に網して、益す海遊の行を重ねた
 れば、二兒の意氣殊更に勇進し、余輩は必ず海軍の士たらんことを
 欲す、西洋航路に業を起さんことを望むと、健強快壯の状を示す
 に至れり、乃筆を執つて芝浦に春漁を試むの記を作り、併せて兒
 志養成の趣を述べ

○夢に湊川に至るの記

嗚呼忠臣楠氏の墓とは、楠廷尉、正成の墓に記したる、水戸烈公の
 誠字あり、余常に楠氏の忠死を思ふ、湊川の邊、民舎の古體を想ふ
 て血涙に咽ふこと頻あり、時に友あり余を誘ふて湊川に至り、松梢
 の翠あるところを指し、河を埋め、公園を設け、砂途清爽あるとこ
 ろに坐せしめて曰く、古楠氏あり、能く誠忠を盡して、此地に戰没
 せることの壯絶ある、實に天下無比の偉學たるあり、今や骨枯れ靈

○記事紀行文

の國民を警しむ○忠魂義膽の名士あり、既に此土を去つて其影ふしと雖ども、忠魂義魄天に在り、以て能く將來の志士に悔ゆ○夢裡忠士を思ふて、意氣大あり

○春日江の島に遊ぶの記

遠く翠波を望めば、

去つて、敢て其跡なきが如しと雖ども、其の忠志の情状は、特に歴史に記して明瞭あるべく、其の誠意の況態は、世人の耳に銘されて断焯たるべし、君視ずや彼方には其靈を祀れるの名社あり、社地亦誠字を刻みたる、名墳あり、真以て愉快の至りと云ふべし、而も之戦死の地、民舎に入り、忠弟と共に相刺せる状を遺すべきの紀念物なきを惜む、是余が切に遺憾として措く能はざるところなりと、余素より之を思ふて止まず、熱心以て敬望するところ、同情同志手を拍ち、脚を踏んで拊舞雀躍すれば、忽にして音あり余が耳を驚かせり、乃起つて四顧俯仰すれば、春眠曉を覺えず、尙褥中に臥して夢みたるありと

○春日江の島に遊ぶの記

一望限りなき天平洋、一瞻涯りなき大空の下、浪波あり、滄海あり又風雲あり、而も磯邊白砂の頭、數里聯綿たる青松茂り、梢頭高く

春色深し○近く青松を眺むれば春色麗開あり○沖は渺々たり春海の景○落は翠蒼たり春曉の景○遙に雲間に現はる富嶽の峰○遙に眺むれば却つて近く現はるるものあり○即是富嶽の頂あり○松林を越えて高く雲間に現はるものは、即東海の名山あり

○記事紀行文

登ゆ富嶽の頂、特に雪を冠して潮水に映じ、江の島の翠影、團球と成つて海中に浮べり、余や此頃藤澤の驛に在り、一日天晴れ風暖あるのときを計り、單身獨歩、單一挺の洋杖を提げ、愛犬一頭を誘ふて至れり、乃四顧俯仰して山を望み、水を眺め、快意愉情極りあさの感あり、是に於て余一詞あり

○春風狗を驅て藤巖を出で遠く富嶽を望み近く江島を觀れば、由井濱頭浪靜ある處、雪は空く天外に飛び翠は萬里の海洋に連る

夫斯の如きの劣句を弄して、特に自然の景色を賞せんこと、蓋し麟躡の龍車に向ふが如きの暴舉たるのみ、然れども天は敢て文客を咎めざるべく、詩人を罰せざるべし、余素より淺學にして、未文客詩人たるの價値なしと雖ども、少く之に習ふの志あり、古語に曰はずや、全く其の美事を行ふの力足らずと雖ども、常に之を習ふの志あらば、既に之を學ぶものとして賞すべきありと、余今、文詩を學

○記事紀行文

○海中に浮べる一島あり、世人之を呼んで江の島と云ふ

○某幼稚園を訪ふの記

ふの記
某氏の誘導に従ふて、某幼稚園を訪ふ。某園長の指示解説に由つて、園況を詳にするを得たり。園の構造甚堅牢にして、且精美あり。幼稚園内極めて清潔を

ふの美事を全うするに至らずと雖も、之に習ふの志あれば、天亦余を許して賛賞すべきあらんか、乃江の島に遊ぶの記を作らんとして、別に所感を陳ぶ

○某幼稚園を訪ふの記

余 聊 思ふところありて、某幼稚園を訪へり、時 恰午前九時三十分にして、既に各級授業の半あり、是に於て園長余を誘ふて、先講堂に至り、園の構造組織より、教員の姓名、生徒總數、男女の別、使丁の定數、年中經費、生徒學力成績の如何等に至るまで、最級密に説明し、極めて丁寧に談話したる後、余を導いて、各年級諸科の教授を示し、更に運動、遊戯の状を觀せしめ、特に精微なる事項を指摘して、之が利害得失をも陳釋したり、余は其の親切なる待遇を謝するとともに、幼児の保護、教導の懇篤誠實なるを喜ぶものあり、殊に教員總列の鄭重なる、能く教へ能く導き、宛然第二の母た

専とし、兒童保護教育の道、極めて整々たり。○幼稚園内萬規正く、保姆の懇篤極めて厚し。○保姆の任務極めて重し。○賢英の童兒頗る多々あり。○英明の幼兒少からず。○現今某省の大員たる、元是某幼稚園に學びたる人ありと聞く。○現時の豪商某氏の如きは、某幼

○記事紀行文

るが如し、否實母たりと雖も、全以て及ばざるの慈愛あるべく紙を示して鶴龜を折り、尙五彩七色の紙を分配して、之を組合せしめ、數様の小木片を與へ、之を接續配合して、種々の形態を摸らしめ、小球、竹針あり、物名骨牌あり、右に用ゐる左に掲げて、奇容快態のものを摸造せしめ、更に唱歌を教へ軍歌を歌ふて、運步散歩を試みしめ、喜戲快遊の間に於て、覺えず數字假名文を學ばしめ、英雄賢者、忠孝の人、貞操正順、實直の徒、甲乙の行爲は斯々あり、丙丁の心意云云ありと、能く暗念胸誦し得べからしめ、漸次諸種の校讐に登つて、終に立身成業の榮を得るの素因を作らしむるあり殊に當園の保姆たる、他に優るの熱心あり、外に秀づるの注意あり能く教へ能く導きて、其任を盡し其職に勉むること切あるが如し、乃聞くところによれば、現時内閣主要の職に在るもの、其の三分の一は尙此の園裡より出でたる人ありと、蓋今を去る三十有餘年の

○記事紀行文

穉園に學びたる童兒ありき

前に於ては、園規及其の教導の狀、素より整備せざるどころ多く、決して之を今日に比すべからずと雖ども、特に斯園よりして名士、貴紳を現はすに至りたること、眞以て慶喜に堪へざるあり、余園を退いて家に歸り、筆を執つて此記を作る

○某小學校を參觀するの記

校規整頓して、能く教育の道を盡せり○校則悉く行はれ、生徒全體成蹊の美あるもの多しと云ふ○校長の懇篤ある、訓

○某小學校を參觀するの記

高爽明潤の地、雲上に聳ゆるの壯館あり、四圍翠樹を以て繞らし、北方山を負ひ、東西小丘を以て挾まれ、南方一望の平原たり、眞に衛生上適切恰當の組築あり、是某地に有名なる明倫高等小學校あり、余一日間を得て、同校參觀の道に登れり、乃就いて觀れば、校長の親切ある説明、懇篤ある指示に依つて、各科教授の順次狀況を知察し、諸級生徒の學作品性をも認むるを得たり、然れば歴史、地理、算術、習字、讀書、圖畫、體操、裁縫、修身等、夫々細密なる觀察を下したるが中に、修身、歴史の科に於て、感じたるどころ

○記事紀行文

導の切實ある、實に他校の比に非ざるあり○常に懇切ある教授を以てし、特に切實ある訓誨を以てす○訓陶の教授は素よりのこの、校長の訓誨極めて精密あり○他校に優る成績多し○平素の教訓、完備整頓せり○余大に感ずるところあり、特に之を表さんとして

の一事あり、校長先づ講堂に登り、修身講話の口を開いて、村上義光の忠節即大和十津川に於て、護良親王の御身に代り、攘戰義死の美譽を現はしたる項を説き、錦旗を取返したる勇威の條を陳べ、生徒をして、其感ずるところ如何を答へしめたるるとき、其の生徒中數名のもの、應辭あり、曰く我日本は忠義の國あり、故に村上は忠義を以て死したるあり、曰く忠節の二字は國民たるもの、本分あり故に義光は之を行はんとして死したるあり、曰く忠を以て死するは美譽あり、故に村上義光は、此の美譽を爲したるあり、曰く國家の爲に働き、君上人民の爲に勉むるは忠義あり、而して此の忠義を行ふとは、我身を捨つるあるも、敢て退き去ることなく、專に勉勵するにあり、故に村上は此の忠義に勉勵したるあり、曰く我が國家は古來忠義の二字に由つて安寧あり、故に義光は、我が國家をして安寧ならしめんが爲、切に忠義に死したるあり、曰く忠義とは國君の

○記事紀行文

茲に筆を執れり○余特に感銘に堪へず、乃之が記を作る○忠節美談類々たり○忠義の講話極めて快味多し○忠義の二字を説いて、之が實行の状を示す○忠義の二字を質して、特に自己の意見を譚す○忠臣孝子の偉行を説く○忠君愛國の正義を語る○國家の要を

御恩に報ひ奉らん爲、我が身命を擲つあるまで、一心不亂に勉むるを云ふあり、即義光は常に此事を思ふて止まず、遂に親王に代り奉つて忠死するたあり、曰く我が日本國の他邦に勝れて清潔正白あるあるは、全く忠義の心ある人民多きを以てあり、否忠義の二字を以て本分とすべきことを知ればあり、即村上義光は、能く本分を知れるを以て、特に十津川に戦死せるあり、曰く人民として、常に安寧無事に今日を經過し得るは、必竟慈惠深き大君を戴き奉り、其の恩愛厚き政の下に在ればあり、然れば國民たるもの大君より聚り奉るところの宏恩や、蓋究極あかるべきあり、古人の教へに恩を蒙りて之に報いざるものは大逆のこのみとあり、故に村上義光は之を思ひ之を學んで、特に忠義に死したるあり、曰く忠義あらざれば國家成らず、忠義は是國家の大本たり、村上は此の大本を知れり、故に忠節の死を遂げたるあり、曰く忠義の二字は、國を思ひ

○記事紀行文

説き、忠孝の二字を講ず○國定の要を説いて、庶民の本分を示す○古來聖賢の偉行を談す○古來忠士の精勤を賛稱す○古今忠孝の事状を語る○昔時誠忠の偉業を説き、今代正義の美行を語る○古今の忠孝を比較し、内外の人心如何を談す○文明の状勢を説いて、

世を思ひ、君を思ひ民を思ふところの本心より發るものあり、一國あり帝王あつて、安穩靜寧の世に生れたる以上は、斯の本心あかるべからず、即村上義光は、常に專此の本心を明にせんことを欲しつゝありたるあり、時に十津川の騷擾あり、錦旗を奪はれたるに憤慨し、直に之を取返し、尙親王に代り奉りて戦死したるあり、然れば我々も亦斯の如き本心あれば、常に忠義の二字を以て、此世に處せんことを欲するのみと、校長曰く眞に佳しと、是に於て講話終りたり、余大に感歎して止まず、特に喜怡の念に堪へざりき、世界廣くして國土甚多々ありと雖も、斯の如きの舉行を專とするものをして、完全なる忠義ありと思ひし、其身自奮つて之を實決せんとするの國民あるなし、否有りとするも單に我が日本國民の間に於て行はるのみ、殊に小學生徒の心念にして、既に忠義を以て人の本分と爲し、尙腦裡全體をして、此の二字に浸染せしめたるが如きの状

開化の道理を講ず○
 文化の道理を示して
 學事の緊要なる所
 以を説く○文明の効
 顯を示して、學問の
 切要なる所以を論ず
 ○文化の道の大なる
 を示し、人智の發達
 を促すこと頗りあり
 ○開明の今日に處せ
 んと欲せば、宜く學
 事に勉めざるべから
 ずと説く○千艱萬難

あり、嗚呼我國古來、邦是を傷けたること多し、能く外戦に勝つて
 名譽の行爲多く、特に明治二十八年以後、遠く軍士を送つて、異域
 に戦ひ、連捷聯利以て國光を輝かし、世界萬國をして、驚怖恐懼、
 敬恭熱慕の念を發せしむるに至りたるもの、實に忠義の二字を忘れ
 ざるにあるあり、嗚呼今日の小學生徒にして、此の本心あれば、文
 明の觀念益々文明にして、萬世不易の忠節國、即忠義を以て國を
 守るべき、清美純潔なる人民を養成し、國家案寧の道際涯さかるべ
 きあらん、余又歴史の科に於て、其の生徒の質問上、大に感ぜたる
 ところあり、某訓導曰く、養老の瀧の孝子たるもの、特に其親をし
 て悦ばしめんと欲し、日々苦業の歸途、些少の利金を裂いて酒を購
 ひ、數年の間、敢て變ることなく、始終勉勵して止まざるあり、天
 之を助けて瀧水を酒に化し、其の孝子をして、別に資を要すること
 なく、容易に之を得せしめたり云々と、時に一生あり問ふて曰く、

は敢へて辭せざるを
 ころあり○千苦萬患
 は敢て辭せず○百難
 をも排して進み、千
 苦をも拂ふて行かん
 ○今日の苦難は、是
 必ずや明日の和樂た
 らん○眼前の苦煩は
 、遂に後世の幸榮と
 あらん○現時にして
 苦患を嘗むるときは
 、將來必ず慶幸を
 得ん○和樂を得んと

古の孝子あれば、人情濃厚の世に在りしを以て、天地の感應、斯
 の如くに切ありしあらんか、然れども、堯季の今日にしては、萬一
 至孝のものありとするも、決して天地鬼神を感せしむべきに至らざ
 るべし、先生の考慮如何、請ふ教へを垂れんことをと、先生曰く、
 汝の問や甚可し、余亦一説ありと雖ども、一度汝の思ふところを聞
 き、更に改めて説明せんと、乃某生之に應じて曰く、既に堯季の
 世ありとせば、人情極めて淺薄あり、茲に孝子の生ずるありとする
 も、蓋し完全整備のものあらざるべし、恐くは是皮想外見をのみと
 とし、眞實正當の美行あかるべければ、天地決して之を容れじ、
 神祇必ず之を擯にん、然れば今余輩にして、養老の孝子に習はんを
 あらば、彼が勉めたるの十倍を勉め、彼が勵みたるの百倍を勵まん
 のみ、抑天地は其の勉勵むところの數に應じて之を賞すと聞く、嗚
 呼余は至孝の行爲を專にせんと欲せば、千難萬苦を厭はざるありと

○記事紀行文

欲せば、必先苦難を
試みるの勇氣をかる
べからず

○洋行の士を
送るの記

遠く君を送つて、懐
裡涙に堪へず○君は
遠く去り余は近く歸
る○君は遠く洋波を
越えて去り、吾は近
く一野を過ぎて歸る
○海外の校舎に學ん
で、特に榮譽名聲を

訓導案を叩いて狂喜快呼して曰く、嗚呼好いかる佳いかる汝が辭と
余亦覺えず嗚呼と叫んで感嘆頗ありき、是に於て校を退き、家に歸
つて筆を執り、某高等小學校參觀の記を作れり

○洋行の士を送るの記

嗚呼君は今萬里の遠洋に航せんとし、我は空しく此土に止まり、唯蠢
々として世を経んことに勉めんとするのみ、余君の愛交を得てより
茲に二十有三年、余現に二十七歳の壯者あれば、世に生れてより七
歳に至れるのとき、幼童遊戯の間にして、知らず識らず君が懇切な
る惠慈に逢ひ、遂に數星霜の中、始終一徹、能く金蘭の友たりしか
り、即余の君に於けること、兄弟も及ばざるの交誼あれば、君が行
爲に従ふて余が行爲を定め、君が進退に隨ふて、余も亦進退し、千
件萬緯悉皆君と共にせんこと、素よりの定理あらん、而も今斯理
に則る能はず、君は遠く海洋に航して、遙に異邦に旅せんとするあ

○記事紀行文

得べし○歐米の校舎
に學んで特に其名を
海外に擴む○榮譽は
大なり君が今日の舉
○今日の擧たる眞に
大なる榮譽と云ふべ
し○數年あらずして
其業を卒ふべきのみ
○年あらずして、巨
大の富を效さん○終
に大効を奏せんこと
火を見るよりも明
かり○君が成効や、

るに、余之に背いて遂に袂を分つに至れり、嗚呼悲いかな、時に余
は遽然として覺れることあり、即佛國の古諺ある、親愛ある交誼
とは、常に其の兩者の行爲をして同じうせんことを要するにあらず
又其の思念をして齊しからしむるを規とするにあらず、全以て、相
互の便益を計り、幸福を設けしむるにあるありと云ふに感じたるあ
り、今君が遠去るは、自學び自勉め、將來立身成業の道を得ん
ことを欲してあり、是君が便益あり幸福あり、然れば余亦便益を蒙
り幸福に預るべきあり、敢て君が洋行に従はずと雖ども、平素の交
誼に戻るものにあらざるを知れり、嗚呼危いかな、余若し、佛國の
古諺を誦んせざりしならば、唯君が行爲に従はざるを以て、親友た
るの交誼に反するものとし、專悲哀の涙を注いで、拙き舉動を作し
たるあらん、古語に曰く人の遠行を送らんとせば、必愛念を表す
るに當り、拙き涙を注ぐ勿れ、拙き涙は其行を汚すべしと、乃余は

○記事紀行文

極めて宏あらん

○佛京巴里の圖書館に至るの記

此は是佛京屈指の圖書館たり○此の圖書館たるや、實に世界無雙の設計に成れり○余一日此館に至り○余幸に夏季休暇に遇ひ、疾く趨

特に此語を存し、慎んで思ふところあれば、大に喜んで君を送り、專快躍して、君に別るゝの今日を祝するあり噫々

○佛京巴里の圖書館に至るの記

美ある景色、麗ある風光、妍々たる服装、蕭々たる人俗、特に四方より起り四面より來り、朝夕、晝夜輻輳して、春は春たり秋は秋たり、否春秋のみならず、夏の炎街に於けるも、冬の寒巷に於けるも總皆盛昌賑繁の外なきあり、是佛京巴里の現況にして、實に世目を驚かしむるの姿勢ありと云ふべし、余や此京に止まり、某學校に在つて哲學科を學ぶこと既に二星霜、然るも未某圖書館に至らず、特に遺憾とするところあり、時に同校五十年紀念祝日に際し、一週日の休暇を得たれば、好機措くべからず、疾起つて赴むに如かずと急車に駕して同館所在の某町に達し、直に馳せて至り見れば、館の構造、室の設備、縦覽規則、書籍の配置等を始として、之が收藏

○記事紀行文

つて圖書館に至れり○某圖書館を訪ふて、珍書を閲せり○珍書の書典多し、特に請ふて之を閲せり○吾人豫て某圖書館に至らんことを欲したれども、未其機を得ず、遷延して今日に至れり○余某圖書館に過つて、世界の珍書を鑑み、大に智能を開達したり○天下

貸附の順序に至るまで、最好く調頓せり、殊に書籍の種類極めて多く、世界萬邦の巻册既千萬を以て算へらる、余は切に哲學の書を觀覽せんことを欲するものあれば、アリストートル、シヨツペン、ハウエル、の諸哲學者は素より、其外世に有名なる賢者の著書を請求し、一週日中、日々六時間を期して、鑑み學びたり、然るに書中著書に係る緊要の語あり曰く、著作の十分の九は、人々の囊中より、多量の金錢を奪ひ去らんとするより外の目的を有せず、而して著者、出版者、印刷者の三者は、此の目的を以て協同するありと、余之を讀んで大に悲哀に苦めり、世間の著書、實億萬の上に出づ、否億萬の上に出づるにあらす、尙數億萬をして、數億萬からしめたるあり、而も若し前陳の如きことよりして、唯獨りに著述出版するありとせば、冊中卷裡、實に云ふべからざるの空語あらん、徒然たる戲事あらん、決して信すべからざるの件々少からざるべきか、世人之を

○記事紀行文

の珍書を開して、利するところ多々あり

信じて之を讀み、之を讀んで之を信せば、遂に其の意思心を誤ること頗る多大あらん、余是に於て復大に感じて曰く、亂擾復雜なる多書を讀まんよりは、正實確直なる一卷を繕くに如かずと、終に七日にして此館を去り、復校に歸つて正科を學ぶときは勿論、總て廣く書冊を漁るの念を斷ちたり、乃聊感ずるところあれば、特に某圖書館に至るの記を作つて、自修學上の鑑戒を爲す

○某女學士の海外に遊ぶ

を送るの記

女子の身にして、單獨洋行の舉あらんとは、實に驚愕の外なきあり○巾幗の身に

○某女學士の海外遊學を送るの記

遠洋を蹴つて異邦に至り、遙に天の一方に停まり、久く故郷に離るるを悲むとは、古來男子にして、大に愛別の情に堪へざるもの多かりしを云へるあり、否多かりしと云ふのみにあらず、世人悉皆斯の如くありしあり、然るも近年文明の潮勢高く、漸次人智の達進するに従ひ、蝸牛の棲息に習ふもの少く、特に起つて衆庶に秀で、專に奮つて他人に勝れんことを欲するに至りたれば、人々相競ひ、胥

○記事紀行文

して、遠く海外に遊ばんこと、蓋容易の業にあらざるあり○余も亦之に習はんことを欲すれども、未其機に當る能はず○吾人も亦阿娘をして、遠く歐洲に學ばしめんと欲すること切あり、而も未其機に接する能はず、實に懺愧に堪へざるあり

争ふて、歐米諸州に赴かんとするに至れり、然れども女子にして此行を試みたるもの其數多からず、今君が奮行を以て、第八十八人と爲す、嗚呼愉快あることか、人の年齢八十八歳と云はば、米字に類するの慶賀あり、是素より俗間の慣式にして、敢て取るに足らずと雖ども、古來の祝儀却つて喜悅すべきところあしとせざれば、君が行數米字に相當することを慶賀せん、否米字に相當するのみを慶賀するにあらず、我國巾幗社會の勇奮勵起して、將來賢母才媛を作るの基本たるあらんことを慶賀するあり、西哲曰く女子は國家を經營するところの人を養成するの任あり、然れば必竟國家經營の主素たるべければ、此輩をして常に學ばしめ、專勵ましめ、大に其の心行を正うせしむること、實に緊切ありと、君よ々々、航上安寧にして、彼地に至り、尙靜穩、健固にして彼地に學び、壯快強怡にして業を卒へ、一日も早く歸朝して、巾幗社會の牛耳を取ら

○記事紀行文

○某友人の佛國へ流學するを送るの記

佛國に學んで、大に得るところあらんとす○君が流學の擧たる、實に近來の偉圖たるべきあり○遠く佛國に至り、特に某校に入つて、法律を學ばんとす○遠く佛

んことを欲す、乃君が海外遊學の行を送らんとして此記を作る

○某友人の佛國に流學するを送るの記

茲に志を立て、遠く佛國に流學せんとするものあり、是余友某氏あり、今日幸に某漁船の浪華灣を發して、歐州に赴くの便あり、某氏之に駕して其途に就かんとするを以て、余は特に之を送らんとして、安治川口に車を賃し、某氏の後を追ふて急駈したり、余是に於て手記の一紙書あり、某氏に呈して曰く、君は遙浪を越えて異邦の巖舎に學び、大に得るところあらんとして、廣く群籍を漁り、專堆巻を探らるべし、然れば切に注意せざるべからざること多々あり、今讀書に係る重要なる諺數句を記し、余が饑腹として贈るものあり、請ふ笑ふて之を受納せんことを、左に其諺を列記せん

○ヘンリー、ピーチャム

徒に藏書あるに誇りて、汗牛充棟の名を博するあるも、而も胸

○記事紀行文

京に至り、特に法學を窮めて、己の欲するところを行はんとす○君が今日の偉行たる、茲に數年あらずして美効を奏せんこと必せり○余は大に此擧を賛す○吾人は切に此行を賀す○吾人は特に此擧を慶すべきあり○吾は切に此擧を賀するのみならず、吾人自ら

裡智能才識なき人の行爲に習ふ勿れ、又萬卷の書を藏すると雖も常に之を利用するなくんば、恰枕側に燈火を照らして焯灼たらしめ、却つて其下に横臥して熟睡するに齊し

○ヘンリー、フィールヤング

吾々は書籍の爲に腐敗せらるゝことあり、是恰友人の爲に腐敗せらるゝが如し

○エアンバウル、リヒテル

學者は少しも怠慢を感ずることなし、如何とされば、吾々は書室たるところの新婚室あればあり

○プロンソン、アルコット

好き書籍は、良き朋友の如し、其數多からずして、特に秀で優れるものあればあり、尤も此の如く數少き良き朋友、良き書籍を撰ばんには、最も緻密なる注意を要すべし、注意緻密なれば、其

○記事紀行文

亦從ふて赴かんこと
 を欲す○遠く航して
 近く萬智の元を搜
 る○遠く海外に航し
 て、特に國家の効益
 を計らんとす○特に
 異郷に赴いて、大に
 爲すところあらんと
 す○特に萬里の海波
 を越えて、切に自國
 の榮幸を謀らんとす
 ○遠く異邦に學んで
 其の志すところ

書益す良好にして、其の朋友増す良好あり

○マキアベリ

人は常に書を讀むことに由つて賢者たらんと欲せば、是平素食を喫つして、身體を強からしめんとするに齊し、然れば總て書籍をして吾々の用を爲さしめ、特に心中健全と活氣とを供せしむるものは是全く吾々の思想意見及び消化の力に由るあり

茲に夜來れば、吾は家に歸りて書齋に入るのみ、吾は古人が遺したる古殿に入り、彼輩の最慈愛深き款迎を蒙るべきあり、吾に必要すべき、吾が將來立身の目的とすべき糧を得て、吾を養ふものあり、然れば是より一瞬にして、吾を惱ますべきものは逃遁するあり、吾は即總ての痛苦を忘れ、決して貧困を恐れず、如何とされば吾は吾身の狀情を語りつゝあるところのものに向つて、切

に吾身を委託したればあり

○マモンリ

汝書齋を充たすに、必ずしも書籍を以てするあるは、恰汝の財囊を盈たすに、必ずしも金銀貨を以てするよりも、汝の爲、最適當なる行爲あり

○レオー、アルラーシウス

全く吾人にして常に讀むべき書からんには、即之を委しく云へば、夥多の有名なる人の著書に缺ぐることをあらんか、吾人の身に於て恰も太陽の光りなく、且生命なくして、特に苦煩しつゝあるが如くあらん、乃書籍の價値と其の快樂と比較すれば、富貴快樂を始として、人生總て欲望するところのものは、却つて卑むべくして、一ツだも價値なきことあればあり

余は斯の如くに記録したる一紙を贈り、某氏が某汽船の左舷に起ち

を宏にす○廣く他邦
 に學んで、國家の利
 益を計らんとするの
 み○豈自己の爲のみ
 あらんや○曷ぞ私利
 をこととせんや○敢
 て國家の爲めに盡さ
 ん○國家を思ふの情
 切あり○國家の富榮
 からんことを祈る○
 邦家の隆盛からんこ
 とを願ふ○遠く海外
 に學んで近く内國の

○記事紀行文

○記事紀行文

隆盛を計らんと欲す
○敢て他念をなし、特
に邦家に盡さんのみ

○夏日山行の記

記

杖を曳いて某山に赴
く○杖を携へて某山
に遊ばんと欲す○某
山に杖を曳かんと欲
す○某山に赴いて夏
熱を避けん○炎威を
避けんと欲して、某
山に趨く○友を携へ

帽を振つて別を示し、瀟蕭曉々、淡煙の襲撃たる間に杏造として其
影を没するに至れるまで、亦齊しく帽を振つて應答し、遂に水天髣
髴の景を望み、胸中涙を隠して家に歸れり

○夏日山行の記

時既に夏なりと雖ども、未炎威甚しと云ふべからず、唯遠山近野翠
緑深く、川河水清くして朝夕静風あり、杜鵑高く啼いて、人の往來
するに可しとす、余は一日某氏の寓を訪はんとして、曉を冒して家
を出で、杖を某野に廻らして行くこと數里、然れども尙某氏の寓を
視ず、谿谷を越えて谿谷に出で、行程殆ど六七里を加へたるかの感
ありと雖ども、益す谿谷の深さに入るのみ、期刻己と午後三時に垂
として、未其の目的の地に達する能はず、群鳥樹間に啼いて余が愚
を嗤ふものゝ如く、否余が迂遠なるを嘲けるものに似たり、余は是
に於て茫然意想を失ひ、若し此儘にして進まんが、無限の深谷、無

て遂く某山に至り、
炎威を避けて、學ぶ
あらんとす○友人某
と共に某山に登り、
炎暑を避けて、身心
を養はんのみ○殊に
風光の美あるあり○
殊に佳景多し○特に
絶佳の景に富めり○
余一詩をかかるべから
ず○吾人一韻をか
べからず、乃茲に筆
を執れり○千尋の谷

○記事紀行文

疆に入り、遂に日暮れ夜暗くして身體を措くべきの術なきに至らん
寧ろ後に返さんか、是亦歸るべきの途は絶えたり、嗚呼谷れりと云
ふべきのみ、若かず暫く這に休み、静思默念して後、更に決すると
ころあるにはと、杖を擲ちて塊岩の頭に踞踞し、眼險を閉ぢて暗想
すること長し、然るに遽乎として背後に聲あり、余を呼んで問ふて
曰く、嗚呼は何の爲に此の谿谷中に在るや、君は全く某氏をらん、
余即某ありと、余驚いて眼を開き、直に起つて顧みれば、余が今日
其寓を訪はんとするところの主人あり、嗚呼余は安堵せり鎮念せり
余は今日曉を冒して家を出で、疾進んで君が寓を訪はんとことに切
かりしも、思はず路を失ふて轉遷し、谷又谷に入り、山又山を越え
て畢に行くべきの術なきに至れり、若し君に遇ふことあくんば、空
く叢裡森林の間に停められて、野歌怪鳥の爲に弄ばるゝに至りしか
らんか、嗚呼余は天の惠助を得たり、嗚呼余は地の愛救を蒙れりと

○記事紀行文

に入り、萬嶽の麓に迷へり○行かんと欲するも其道絶えたり○行かん欲するも其道さく、歸らんと欲するも亦其路さし○唯悄然として、天を仰ぐのみ

○夏日船に掉して海遊を試みるの記

試みるの記

某氏之を聞き殊に驚いて曰く、嗚呼君が情意や最深し、然るに途にして其向ふところを失ひ、竟に斯の如きの苦煩を嘗めたること、實に歎息すべしと雖も、天幸に余を誘ふて山麓に赴かしめ、尙鳥を追ふて此谷に至らしめ、僂倅以て、這に邂逅せしめたるあり、余が寓は山南二里の麓地に在り、是より途次を指示すべし、請ふ余に従ふて來らんことを、余は某氏に尾して其寓に到り、極めて多大なる愛遇を蒙り、徹夜相談笑して、翌午後六時家に歸れり、余茲に此記を作らんこと、眞に以て慙愧に堪へずと雖も、過失を表明して後來を戒むるとは、古來聖賢の誨辭に在り、余特に之を筆して、自己將來の鑑戒に供へんと欲すと云爾

○夏日船に掉して海遊を試みるの記

嗚呼愉快あるから夏日の曉、炎日高からず、蒸雲密ならず、四面清爽として却つて微風あり、時に校友三四輩を促して、艇を渚汀に懸

○記事紀行文

○炎日田圃を

時に船を進めて、海遊を試む○時に艇を懸して海洋に浮ぶ○時に暑熱を避けんとして、遠く船に掉し且釣魚を試みて、怡々頗あり○夏日の船行たる、特に愉快のものあるべし○夏日の舟行たる、極めて快怡のことあるべし

○炎日田圃を焦すの圖に題するの記

し、釣具網機を齎らして、潮水に浮び、桃島、櫻島の間より、右に漕ぎ左に掉して、神島に渡り、島影高く水底暗くして、海草最繁茂せるところを探り、杆を伸し釣を垂れて夥多の鱗鱗を獲、尙島影を離れて、少く砂底の淺きところを索め、網を投じて汀上に繰り、益す多々ある甘魚を收め、更に無數の白魚を獲たり、然れども校友各游泳の術に長け、艇舟を用ゐんこと、素より易々のことのみあれば、天晴れ風静にして、海況極めて靜謐あるを幸とし、日暮れ月の昇るを待ち、特に夜浪を弄んで、興味を加へんことを欲すと、遂に神島に登つて午晚兩回の食を整へ、金鳥西海に没して、四邊寂たるのとき、東雲銀色を帯びて水鏡を掲げ來り、波上燦々麗美深く無涯の美景浮漂し來るを羨ち、復釣を垂れ網を投じて夜漁を試み遠く某寺の鐘聲あり、已に半宵を告ぐるに至つて棹を還せり

○記事紀行文

焦すの圖に
題するの記

炎焰天地を焦し、田圃悉く焼燃せり○炎威最烈しくて、既に田圃を焦すに至れり○暑熱頗る盛にして、已に田圃を焦盡せり○田圃悉く青色あき、地泥愈龜裂を生じ、四圍全く水氣を絶てり○眞に以て慘忍酷薄の畫圖

天日最烈くして、炎威燒くが如く、山谷原野之が爲に燃え、田圃園庭之が爲に焦がさる、嗚呼暑熱の劇烈あるも、其害頗る多く、遂に天下の庶民をして、苦亡せしむるに至る、時に某氏あり余が家を過ぎつて、一軸の彩畫を示し、切に請ふて之に贊辭を筆せんことを求む、余嚴然形を正うして之を拜し、謹慎鄭重、最務むるところあり、是に於て某氏、怪疑の念に堪へず、慨然として余に問ふて曰く君は是何が故に斯くの如きの狂體を爲すや、此は唯干燥焦乾の畫圖あるのみ、然るを謹慎敬恭して、之を拜するありとは、余甚以て奇異の感に迫られたりと、余大に笑ふて曰く、君の見解や極めて疎忽あり、干燥焦乾にして山林を災し、田圃を害するときは、國家衆民の悲歎、眞に窮りあき、天下を損すること、決して容易あらざるべし、蓋是天怒り地憤り、大に世人を戒むるの行爲たり、古書に曰く天時に年災し、庶民の怠惰を懲すべきありと、嗚呼干燥焦乾の圖

るあり○實に慘酷のことあるのみ○實に酸鼻の至りあり

○夏日夜遊の記

獨杖を曳いて某野に至れば、涼風袖を拂ふて炎威を除けり○某野に至つて涼風を迎ふ○某野は特に涼風あり、暑熱を避くるの名地たり○野色

たる時に之を實際に現はさずして、筆紙の間に教指するあること、實に至便簡易にして、能く其の教誨の道を盡したるものと云べし、余謹慎敬恭して以て、拜覽する所以ありと、遂に此の答辭を書して題言を代へたり、乃余が將來を戒めんとして、之が記を作る

○夏日野遊の記

朝來風あくして、炎威蒸すが如く、草木將に枯れんとするの暑熱あり、是に於て余驚歎して曰く、天然のものにして、現狀の如き苦思を嘗むるに至る、實に云ふべからざるの難事たり、之を避けんとして却つて理に戻るの行爲あらば、遂に身を害するの悲況に陥るからんか、然れば唯自然の發象に従ふの外なきありと、特に謹慎警戒して以て、身體を衛るに勉めたり、而も日一日より炎威多きを加へ、四圍既に縁を絶ち、遠近水稀にして、庶民皆喝に泣かんとするの感況を呈したり、嗚呼は何の元因あつて斯くの如きの慘憺を見るに至

○記事紀行文

晴れて、清風至る○
 野色閑にして、清風の至るあり○清風吹いて、野色麗あり○清風至るところ杜鵑啼く○野邊風落ちて杜鵑の啼くを聞く○郭公の聲は遠し、夏露の野○夏露の野景、云ふべからざるの快風あり○袖を拂ひ襟を開かしむ、野邊の風○夏夕野邊に赴

れるや、嗚呼は何の理由あつて此の如きの苦煩を嘗むるに至れるや血涙袖襟を濡はし、哀伸胸に迫るのみ、時に友あり余が家を過つて曰く、天威強烈にして、炎熱燐燐が如きるときに於ては、白晝他に赴き去らんこと容易ならず、素より身體を害すべきのみありと雖も數日家に籠つて敢て他に出でずば、煩悶益重なり、苦患極めて多々あるべく、終に身命をも絶つに至るべし、請ふ夜陰を冒して、風氣清爽あるところを探り、特に涼冷を迎へて炎塵を洗はんことを、余も亦之を望むこと久し、乃友に従ふて某野に向へり、時恰午後八時にして、暮煙高く昇り白露途邊を濡はして、炎熱焦蒸を拂はんとするの状あり、殊に月色此景を照らして清快云ふべからず、友の勸むるに聽せて、或は右に或は左に、漫歩散行して以て夜の閑くるを知らず、益す運動して止まざりしあり、余謹んで一辭を作り聊感するところを述ぶ、曰く天威劇烈にして大に動植のものを苦

いて、涼景を迎ふ○特に清涼を覺えて、快怡云ふべからず○大に怠意を戒しめて、勤勉の心を勵ます○喜怡限りなし○鬱氣を散じて、清情を促すに至れり

○暑を有明の濱に避くる

○記事紀行文

ひるありと雖も、更に夜に在つて涼風を送り白露を降し、切に救護保衛するところあり、蓋是天は一を以て懲し一を以て恵み、一を以て罰し一を以て救ふものあらん、夫斯くの如くにして、庶民相謹み宵戒しめ、特に精勵勉務するところあらば、復自然にして之を救ひ之を助くるのとき至らん、嗚呼快怡あるか否、嗚呼快怡あるか否、實に人生は苦患の中に在るが如し、然れども是平素怠惰懈慢のものゝ上に行はるべきのみ、心を正うし、行を直くし、誠意以て勉むるあらば、天地能く之を濟し、更に之を守護するに至らん嗚呼快怡あるか否と、友人も亦一辭あり、曰く煩痛是見レ現ニ於怠慢之身而已、常謹慎勉切則天助之垂ニ救護ニ、幸榮可レ莫レ除也と、乃特に涼を入れ、更に東雲金光を放つに及んで家に歸れり

○暑を有明の濱に避くるの記

熱氣焯灼として天地將に燒けんとするが如きの状あり、而も自然の

の記

○記事紀行文

青松長く列つて、
 翠綠蒼海の浪に映す
 ○青松の翠色、浪
 に聯ある○浪波近く
 來つて、青松の緑を
 迎ふ、翠松白砂の濱
 に列る○蒼松銀砂の
 頭に在り○長く聯列
 す、有明の松○有明
 濱頭翠松茂し○銀砂
 蒼海の浪に映す○翠
 彈山頭清風高し○琴

理あり、人爲に儘せて之を避くるの便あらしむ、余往年岐讀に遊び
 有明の濱の勝を探り、特に之が絶景麗色あることを知れり、乃遠く
 途を發して、浪華港より瀛船に乗じ、丸龜に至りて瀛車に便し、多
 度津に出で、更に腕車に駕して西に向ひ、三豐郡觀音寺町に達した
 り、此地や遠く雲邊山を東南に負ひ、近く内海の浪を西北に叩へ、
 尚遙に藪備周防の沿岸を望むを得べく、風光清温にして、景色甚
 佳あり、殊に町端琴彈山と稱ふる一高岳あり、岳頭應神天皇、神功
 皇后、武内宿根を祀る、社殿青松の間に聳え、有明の濱に臨み、白
 砂相重あつて、一帶の汀渚を形り、古松枝を垂れて、綠翠滴るが
 如きの研様を瞰下し得べく、磯邊に釣を試みるの艇あり沖に往來す
 る白帆あり瀛煙の舸あり、鴈鴉の漂ふところ却つて浪靜に、靄霞の
 如く模糊たるの間、長く帶を引けるが如き對岸の地、鹽飽、龜島を
 始め、多々異狀の群島あり、其形奇にして頗を麗光あり、余幸に社

○富士山に登るの記

○記事紀行文

引山頂巒洞あり○琴
 彈山下有明の濱○對
 岸の山は微あり○靄
 霞の中○遙に山陽沿
 岸を望み、近く内海
 の青波を掬す○呼べ
 ば答へんとする狀あ
 り○對望藪備の濱、
 松風の動くあれば、
 特に浪に依つて告げ
 んとするに似たり

衛洞官に知己あり、其の社室に入つて暑を避くるに至れり、此の社
 室たる、琴彈山頭の西北に在り、眼下一望、有明の濱の青松白砂を
 瞰るべく、綠波遙茫の間云ふべからざる絶景を認め得べく、恰明石
 人丸神社より、淡路沿海を望むものをして、廣く數里に延遷せしめ
 たるの觀あり、否此景に限るにあらず、須磨、舞子の麗色をも抱合
 したるの狀あり、實に是風光明美山水絶佳のところたり、余是に於
 て三週日の間、避暑忘熱を縦にし、特に筆を執つて空觀偉録と題す
 る一書を著し、朝夕涼風を袖にすべきのときを以て復腕車に投じて
 善通寺に出で、瀛車に駕して丸龜に亘り、高松に赴き、大阪商船會
 社の瀛船に便して神戸に還し、更に瀛車に乗じて浪華に届れり、嗚
 呼此行たる余が今日に至れるまでの現況に在つて、空前の快事と云
 ふべきあり、乃記して以て後の念標と爲す

○富士山に登るの記

○記事紀行文

るの記

雲外の峻嶽姿勢大
あり○雲外の靈嶺
其形白扇の倒に懸
れるに似たり○雲頭
高く貫くあり、富士
の峯○雲頭に聳えた
す、富嶽の頂○遙
に仰見る富士の頂
○原野を過ぎ山腹を
攀つて、頂頭に至る
○夜山路に登らんと
して、濃霧を冒して

某年某月、第三日朋友三輩と共に、途を發して富士山に登らんとす
此日や天晴朗にして朝來炎熱烈しく、特に風脚を絶つて、四圍總く
焼かるゝかの觀ありと雖ども、山麓の氣色却つて涼く、時々袖を翻
へし袂を振ふの松風あり、午後第八時にして吉田口馬返しの旅館に
入り、晚餐を喫して後、暫く脚を休め體を慰はしめ、更に程に登る
幸にして三友各健康の人のみ、僅に一人の先導者を賃したるに
過ぎずして、手に松炬を輝かし、勇進奮登、能く斜阪の難路を走り
能く巖頭石塊を踏んで駈り、第一合目を號する石室より順次合を追
ふて六合に至れるとき、東天俄に紅雲起り、漸々金色を放つあり、
嗚呼奇あるか奇あるかと、覺えず手を拍つて賛歎すれで、又俄
にして金雲破れ、脚下數尋のところ、遙に旭日の登らんとするを視
る、其狀恰大なる紅球の如くにして、遠く翠波の頭に浮びつゝ
あるかと疑はれたり、嗚呼快あるか快あるか、壯あるか壯ある

○記事紀行文

進む○登途の苦煩實
に云ふべからず○登
るべきの道あり、一
里ごとに石室を備ふ
○石室あり入つて休
ふべく、且宿るを得
べし○砂走と稱する
の途あり、此地に走
つて歸るを急ぐ○山
を下らんとして砂走
の途に就かば、一期
急滑して、忽其麓
に達す○雲煙朦々た

るか、天地自然の妙、實に云ふべからざるの麗景あり、乃此勝
に屬まされて歩を進め、終に頂上に達したるときは、既に午後第
三時ありき、余等淺間神社に賽して、社側に休ひ、復起つて、釋迦
ヶ嶽、劔ヶ峯に登り、四顧俯仰して天地の風光景色を縦にするを
得たれば、高く蒼穹の窮りなきに感じ、六十有餘萬の星宿を以て盈
たされたる圓空の中、二萬有五千里の球塊を懸くるのみならず、無
数の惑星此間に回轉し、山あり水あり、風あり火あり、土あり人あ
り、植礦あり、禽獸魚介悉皆並列連存するあるを知らんと、魁偉宏
大の狀態を想ふて、轉驚愕恐怖の念に堪へざりしあり、嗚呼自然の
設計構造のことたる、決して人為の及ぶべきものにあらず、眞に以
て不思議の至りのみ、否天地の間、一の不思議あるなし、悉僉理
に由つて成り道に従ふて現はるゝあり、然れば余等今此の靈峯に登
り、快絶快妙の風色を見るを得たること、是亦大なる理あるに因

○記事紀行文

る間より聳ゆ○恰
雲梯の如くにして、
高く空際に聳ゆ○遙
に雲外に峙つ○遙
に雲邊を貫いて聳え
たり○仰見れば雲頭
高峯の聳ゆるあり○
仰視れば高嶽の屹然
たるあり、仰見れば
遠く雲外に巨峯あり
○芙蓉山頭雲外に現
はる○長閑あるか
芙蓉の峯○長閑ある

る、是必ずや明々白白々ある道あるに基くあるべし、茲に獨逸人ヘル
ケルツヒ氏富士山に登ると題するの脚詩あり、譯して以て、余等登
山の行を大にせん

第一、富士の裾野

彼方はるかに眺むれば、
青き御空に貫きて、
見ゆるかぎりは隈もなき、
得も云はれざる景色かを、

第二、富士の山路

寒けき冬の朝にや、
まだ身に沁まん風吹けば、
今六月のあかばあり、
峰にこぼれる雲もあふ、

雲に聳ゆる富士の山、
積れる雪は白妙の、
高根おろしの風をきて、
裡野よりして見わくれば、

長閑き春の夕には、
登らんことの最かたし、
積れる雪は皆をけて、
山路は更に晴れてけり、

かち富嶽の曙○東
海の名峯高く空際に
峙つ○佳良の風色
際涯なきが如し○絶
佳の風光敢て語るべ
からず、又筆すべか
らざるあり○天下無
雙の名峯たり○宇内
無比の美山あり○世
界無二の美峰たり天
地間、敢て他に比す
べきものなし○天下
無比の清美を爲せり

第三、富士の旭

遠き雲間を貫きて、
旭のかけの隈あつて、
あたりに照りそふさま見れば
水と天より外ぞなき、

第四、富士の宿

富士の高根に宿りして、
此身のさまの面白や、
異なるさまの若き人、
臥しするべども眼もやらず、

第五、富士の下山

登るに難き山の間、
一瀉千里の勢に、

黄金にまがふ色やたつ、
まはゆさまでに輝きつ、
驚くばかりにひろくの、
質にこちよき眺かを、

岩窪に夜をあかしける、
くしき衣の老える人、
皆もろとも枕して、
霧を撫の山の室、

降るに易き阪の途、
礫の上に身をまかせ、

○記事紀行文

○記事紀行文

○世間無類の麗景たり
○筆を執つて之を記せんか、恐くは是其の眞景を損せんのみ○之が狀況を語らんこと、蓋容易あらざるあり

○暑を避けん

として寶塚の温泉に赴くの記

寶塚の地、温泉あり其の効顯誇るに足

すべりてくだる砂ばしり、

早や麓まで着いてけり、

隣くひまにはかきりて、

あふ世のさまに似てけりあ、

是明朗明美の原文より成れりと雖ども、余が文筆拙くして、之を譯するの力鈍ければ、世諺に所謂、原種玉の如くにして、摸型瓦に似たりとは、蓋し斯の如ときものを指せるあらんか、余等又此詩の示すところに従ふて、砂走りに至り、一機急下を試みて麓地に達し、道を變へて相摸路に入り、更に瀟車に駕して家に歸れり

○暑を避けんとして寶塚温泉に赴くの記

灼々又爍々たる炎熱あり、唯家に在りて朝夕を消さんこと、最難きに似たり、然れども近郷暑を避くべきの名地に乏し、嗚呼是茲に蒸々として焼かるゝが如きの今日に於て、徒然之に當らんこと容易の業にあらざるあり、若し一步にして遷延せば、余輩の如き軟弱平凡のものは、疾魚消焚死せんのみ、嗚呼我身は既に亡びたるかあ、

○肥前紀行文

ると云ふ○寶塚の温泉たるや、其熱甚しからず、又冷に過ぎず○温泉の効能頗る大なりと聞く○余嘗て寶塚の地に遊び、特に温泉の効驗を辨せり○此の温泉に浴して、某の疾痾を醫せり○某疾痾を療せんとして、寶塚の温泉に投せり○余未斯の如き良泉のある

嗚呼我命は已に失はれたるかあと、歎息悲哀に堪へざりしあり、時に一書あり避暑指南と題せり、之を讀いて閱讀すれば、最近輕便の地として、攝津寶塚の靈地あるを知れり、嗚呼愚魯の極と云ふべし余や迂遠にして斯の如き必適の名場あるを知らず、碌々として空しく時期を過したり、敢て寸秒をも待たざるあり、請ふ是より途に登らんと、忽々準備整裝して、瀟車に投じ、阪鶴鐵路に従ふて彼地に至れり、此地や南西山を負ひ、東北原川を扣へ、少しく奇異の景色あるが如しと雖ども、温泉場下清水あり鮮魚あり、風光の摸狀極めて涼く、能く暑熱を避くるに適し、病痾軟弱の人、能く其の痾疾を療するに足る、殊に雜關幅擾あらず、頗る閑靜穩寂の名地たり、乃余が爲の恩場たるあり、然れども常に孤獨單一の身にしては、特に寂寥を覺え、心意空虚として、遂に由るところあきやの感あらん、詩人歌客、文仙筆師、今敢て之を撰ばず、切に一友たらんもの、訪來

○記事紀行文

を知らず○吾未斯の如き好温泉あるを知らざりき○疾彼地に赴いて此病を療せんと欲す○急ぎ赴いて此の痼疾を治せしむべし○請ふ余が行を助けて、彼地に趨かれんことを

○宇治川に螢を觀るの記

らんことを欲して曰まざりき、天之を哀み地之を惠みたるか、突然隣室に聲あり、余が知れるもの、語音あり、竊に寄つて障障より窺見れば、是れ余嘗つて西國に遊びたる時、筑紫に於て交を厚うしたる詩客某ありき、余覺えず奇と呼び快と叫んで、障を開き、某の姓を稱せり、某も亦其の意外あるに驚き、且悦び且樂んで快と呼び奇と叫びたり、乃遂に室を同にして膝を交へ、或は共に温泉に浴し、或は手を携へて、山川に逍遙し、或は詩を譚じ文を語り或は古を稱し今を述べ、快怡喜々として、茲に二週日を費したり而も永く止まるべきの身ならず、某を勸めて家に伴ひ、尙袖を停めて五週餘日の賓客たらしめ、竟に歸るを送つて神戸に赴き、悲くも埠頭に起つて別を告げたり

○宇治川に螢を觀るの記

○記事紀行文

流水縁を湛ゆるのどころ、特に螢火あり點々として映す○激々たる宇治川の流れ、夜色深くして、螢火の映するを觀る○宇治の川景や、螢火に依つて大ならん○宇治の河水、深流れて、螢火の湛ふを觀る○無數の螢火、河水に浮んで流る○千寓の螢火、河水に浮

千を以て算ふるに至る、否幾萬千を以て算ふるに餘り、敢て之が際限なきが如し、是山城宇治に發生するところの螢あり、余幸間暇を得て此地に遊び、某友人の周旋整理に由り、艇を賃し行厨を整へて宇治川に浮び、夜色清爽として天水明々たるのとき、東西より來れる螢火あり、南北より集まれる鱗焰あり、或は進み或は退きて上下昇降し、或は馳せ或は駢りて縱往還轉し、或は飛び或は踊つて前後に動搖し、或は追はれ或は驅られて左右に翔翔し、其狀恰も萬千の星宿にして、雨の如く霰の如くに飛降するに似たり、殊に一團の炎塊と成り、高く浮び低く素れ、或は撃ち或は撲ち、散じては集まり、聚りては去り、宛然戰陣に臨めるの狀あり、實に云ふべからざるの絶景たるあり、余や是に於て往年佐々木高綱の先渡を顧み、池月磨墨の名馬、相競ふて汎流の浪に争ふたるの情容を想ひ、悄然として胸を撫で、悵然として水の行くを眺め、啞然として時節の變化

○記事紀行文

んで美あり○一國の
螢火あり 忽相分れ
て、萬火と成る

○田子の浦に
漁するの記

嗚呼美あるか田子
の浦の景や○嗚呼麗
あるか田子の浦の
浪や○田子の浦頭船
歌の聲あり○田子の
浦邊棹櫂の聲あり○
松梢の間に現はる富

せるに驚きたり。古語に曰く、時去り時來りて敢て一齊の状勢を止
めず、人去り人來つて敢て其の情態を同うせずと、余今宇治川に遊
び、大に感ずるところあり、切に胸を打ち膽を刺すの感頗ありしを
り嗚呼

○田子の浦に漁するの記

青松の間、遙に隠見するものあり、是富嶽あり、浪上麗美の姿を映
せるものあり、是亦富嶽あり、古の歌仙、山部赤人あるものあり
田子の浦頭に佳景を詠じて曰く、時に田子の浦頭に出で、遠く汀
後を眺むれば、富嶽高くして白雪皚々たりと、余其の佳色を穿ちた
るに感じ、拙劣を顧みず、否素より詞を爲さざるをも耻とせず、二
詩三歌を試みたり、而も之を懐にして某氏の寓を訪ひ、自詠自賦
を示して評辭を請へり、乃某氏大に笑ふて曰く、此は是君が詩歌を
るか、君之を以て詩歌なりと稱するあるも、余は敢て之を詩歌と爲

○記事紀行文

嶽の景○青松の間
に現はる白雪の峯○
白雪の嶺頂雲間に
聳ゆ○白帽を戴ける
に似たり、富嶽の景
○松頭遙に視る東
海第一の山○富士の
山景、翠波に映ず○
富士の嶺頭、波間に
浮ぶかと疑はる○白
色の山は緑波に映じ
て、益美あり○船
を浮べて棹櫂を搖せ

さず、如何とされば韻字の用法最拙くして、語句整はず、支離
滅裂して極めて素擾なればなりと、余大に驚いて曰く、余特に田子
の浦の勝を探り、浪波の揺くところ富嶽の影を浮べ、青松白砂の頭
漁歌船櫂の聲あるを聞き、覺えず雅趣風流の情に誘はれて、斯の如
くに賦詠したるあり、然れども其辭拙劣にして句整はず、韻字の用
法其規に適はずとして排斥せらる、嗚呼余や不文短才、素より詩歌
を弄ぶを得べきものにあらず、決して筆墨を執るの任に堪へざる
べきこと、今更之を知了せるにあらず、唯取るに足らざるの句辭た
りども其の意思存念を述ぶるに於ては、敢て他に異なるかあるべきを
信ずと、自思ひ 自慮れるの餘り、疾家に歸つて詩冊を開き、
文卷を繙き、熱心以て斯道に勉むること半歳の後、更に二詩三歌を
聯ねて某氏を訪ひ、之を示して斧正を請へば、某氏大に驚き歎じて
曰く、嗚呼君が今日の韻詠や、極めて精妙あり、頗る麗美あり、之

○記事紀行文

ば、恰も富嶺に登るが如し、蓋是富嶺に登るにあらす、其影浪に映じて船下に在れば、特に進んで其頂に達せるが如きの観あるのみ

○琵琶湖上に涼風を迎ふるの記

湖水清くして、涼風あり○清く湛ゆ琵琶

○琵琶湖上に涼風を迎ふるの記

を曩日の試辭に比較するに、實に雲壤月籠の差あるを見る、尙之を悉く説かば、兒童の戯畫に成る駭筆を取つて、雪舟、探幽の名品に對するが如きあり、君如何ぞ僅々の月次にして、此の麗辭を綴るの力量を得たるや、吾人之を訂正校査せんこと、決して及ぶべきにあらざるあり、請ふ名人優師の許に就いて、宜しく評判を蒙るべしと余頗る慚愧に堪へずと雖も、某氏の勸諭に應じて、更に某學士の門を叩き、謹んで斧正を請ひ、某雜誌に投じて掲載の榮を得れば世間の贊評忽に興り、思はず珠韻玉辭の稱を蒙るに至れり、嗚呼松の下に浮び、尙棹を進めて遠く漂ひ、竟に其の沖に出で四顧する

○記事紀行文

湖の水○静に来る琵琶湖上の風○琵琶湖頭の風○琵琶湖中の浪○時に雨あり湖水の浪を打つて渦紋を生せしむ○雨脚湖水を撃つて、渦紋現はる○微雨は却つて湖景をして静ならしむ

○和歌の浦の夏夕を賞するの記

浦頭波岡にして、海

○和歌の浦に夏夕を賞するの記

ところあれば、石山の巖傍、翠樹深く、堂塔伽藍、梢を貫いて聳え瀨田の狭流、二片の橋を架し、宇治の源淵、其水の潔あるを示し、粟津の青松、嵐を含んで美あるを瞰るべく、矢橋の濱邊歸舟を迎ふるかど疑はれ、堅田の里、觀月堂の側、無數の雁鴨翼を洗はんとして浮沈するあり、比良の山頭、未雲ふらずと雖も特に冷氣を催すかの觀あり、時に三井の晚鐘高く、湖上渺々たるの間、緩く響いて靜に聞ゆるあり、嗚呼麗景佳色のことあるのみ、余琵琶江頭に涼風を迎ふるの記を作る

時に船あり余を乗せて某浦に至る風光景色、甚佳あり、山あり家あり人相談まり、浪あり波あり魚背群り、對望の遠嶺、南海の陸往來の舸船、各帆あり、白く映じて綠潮の頭に動き、瀛煙霞の如くに蹙蹙として、益す妍嬾の狀あり、是和歌の浦夏夕の眺望あり、玉

○記事紀行文

鳥の浮ぶに宜し○浦外波高しと雖ども、船を行るに難からず○浦内浪静なれば、鴨鵝の眠むるに便あり○古歌あり、之を賞して餘蘊なし○歌仙の名句、能く浦頭の好景を陳べたり○歌神あり、玉津島の明神と稱す○玉津島神は是衣通姫ありと聞く、衣通姫は和歌津島上一祠あり、衣通姫を祀る、蓋此神や元和歌に巧にして、尚秀才賢英の聞えありき、嘗つて帝に仕へて、一詩あり、這宵は是、帝王の幸駕を迎ふべきのときたり、乃未其の龍影を仰ぐを得ざれども、蜘蛛ありて俄に飛來れり、即鳳顔を拜すべきことを遠らすと、斯くの如きの國歌に類するもの素より少からず、百首千句悉玉たりしあり、然れば世人の尊崇あり、特に神として祀れるあり、余は船を停めて陸に登り、社頭に詣りて神前に額さ、更に遠近に逍遙し、復船に駕して勝脚を勵まし、波浪を排して海洋の上に出けり、是に於て遙に左海を眺むれば、紀伊海頭の水深く、空く昇る半輪の月、嫵然として銀色を湛へ來り、近く右海を瞰れば淡路島影暗冥にして、大濱住吉、浪華の沖、恰も青疊を列ねたるが如く坦々乎として敢て一微の激紋を掲げず、余や今船中の客たり、涼風徐に至つて炎威を拂ひ、清氣快爽の間に遊びつゝあり、頗る愉怡の情に迫ら

○記事紀行文

に堪能ありしと聞く
 ○和歌の浦景、極めて美あり
 ○宍道湖の傍に漁舟を弄ぶの記
 松江の鱸は其肉美あり○松江の鱸は其肉肥えたり○一日船を松江に浮べ、特に釣を垂れて鱸魚を獲たり、一日松江に懸して鱸魚を釣せり○一
 此地は是山陰の名市松江たり、遠く大仙の涼風を迎へ近く宍道湖の水に清めらる、斯湖特に唐土の松江に似たれば鱸魚の鮮肉を以て其名あり、或る學士の評詩に曰く、是東洋の是涅槃波ばかり、實に絶佳の妙景あり、余も亦某年夏六月、山陰巡途の序を以て、此市に至り知人某の周旋に由り、一夕船を賃して湖上に浮び、釣を垂れ網を投じて鱸魚を漁し、直に火に上して行厨に加へ、友人と共に飽食せり、其味や極めて美あり、否其味の美あるのみにあらず、東西七里、南北二里の水、深く陸中に巡つて、江湖を爲し、遙に石見三瓶嶽の頂上を眺め、雲煙模糊の間より、今市、杵築の村邑を認むべく、大仙の衰姿雲邊に聳え、虹の如き長橋、水の狭きところに架せられ、更に里餘の川を形つて内海に亘り、終に伯洲の沿岸を迎

○宍道湖に漁舟を弄ぶの記
 此地は是山陰の名市松江たり、遠く大仙の涼風を迎へ近く宍道湖の水に清めらる、斯湖特に唐土の松江に似たれば鱸魚の鮮肉を以て其名あり、或る學士の評詩に曰く、是東洋の是涅槃波ばかり、實に絶佳の妙景あり、余も亦某年夏六月、山陰巡途の序を以て、此市に至り知人某の周旋に由り、一夕船を賃して湖上に浮び、釣を垂れ網を投じて鱸魚を漁し、直に火に上して行厨に加へ、友人と共に飽食せり、其味や極めて美あり、否其味の美あるのみにあらず、東西七里、南北二里の水、深く陸中に巡つて、江湖を爲し、遙に石見三瓶嶽の頂上を眺め、雲煙模糊の間より、今市、杵築の村邑を認むべく、大仙の衰姿雲邊に聳え、虹の如き長橋、水の狭きところに架せられ、更に里餘の川を形つて内海に亘り、終に伯洲の沿岸を迎

日友を携へて漁船に
 掉し、遙に湖上に浮
 んで鱈魚を釣せり○
 遙に望む大仙の頂
 近く眺む千鳥の城○
 湖上遙に望む三瓶の
 峰

○船上山頭に海波を望むの記

船上山頭、青松あり
 ・特に蒼々として、
 誠忠の跡を表するに
 似たり○船上山頂

へ、境灣口、美保關外、荒暴猛烈たる日本海に達すべきあり、三
 瓶は西たり、大仙は東たり、水色嬋々山又美ければ、特に鱈魚の美
 なるを知れり、今にして此湖を遺して去らんこと、實に慨悲の至り
 と云ふべし、而も余は旅客たり、永此地に止まるの身あらず、胸裡
 愛別の情に迫られ、覺えず一月有半を費やして去れり

船上山とは是伯州の名山たり、古南朝の聖帝を迎へ奉り、特に義
 旗を掲げて、忠勤を専とせる、山陰の名士名和長年の居城地あり
 しあり、余此山に登りて遠く隱岐の兩島を眺め、畏くも、後醍醐天
 皇行宮の所在は如何、天皇自弓ヶ濱に還らせ玉ひ、名和兄弟之を
 迎へ奉りて、此山上に陣を構へ、山陰、山陽、近郷の志士を招き、大
 に勉めて軍を發し、遠く鳳箏に従ふて、兵庫に送り奉りたるの偉行
 ありしを想ひ、覺えず謹慎敬慕して、低く地上に伏し、高く天を拜

青松の下、南朝の忠
 臣、誠勤の跡あり○
 船上山峰、老松の
 緑、誠忠の名譽を罩
 めて、千古に盛ふ○
 此山は是名和氏の忠
 跡たり○即、是名和
 長年の偉跡地たり○
 余特に此地に來り、
 名士の遺跡に接して
 袖を濃らせり

○筑紫の海汀
 に奇火を觀

したるあり、嗚呼敬すべきの山たり恭すべきの岳たり、余や今何の
 爲すところもなく、徒此山に在つて空く水陸を眺むるに過ぎざれど
 も、名和兄弟の苦心極めて多大ありしこと、敢て之を明狀せんとす
 るも、決して能はざるべきあり、然れば特に文辭を綴り、以て之を
 追懷せんのみ

浪波能く龍鳳を載せて來り、山地能く金輦を迎へて堆し
 乃余や這に海波を望むのみにあらず、特に聖帝の賢許を仰ぎ奉り
 切に名和氏の忠節を思ふて止まざるあり謹んで筆を執り、恭く之が
 記を作る

○筑紫の海汀に奇火を觀るの記

仲夏の項筑紫に至り、肥後を訪ふて宇土に過ぎり、某旅館に宿して
 時の移るを待ち、遂に館主及二人の從者を携へて海頭に赴き、高
 く半島の絶端に進んで筵席を設け、行厨を開き杯を傾けて、夜の更

○記事紀行文

るの記

遠遙の波上奇火の點々たるを觀るの遙に海頭を望めば無數の奇火あり○無數の奇船空天に燃ゆ○無數の奇船空中に群り、或は高く或は低く、灼々燦々として、其美云ふべからず○灼々たる奇火あり、遠く空中に浮ぶ○筑紫の海頭怪船あり○肥

るを窺へば、三々五々、他來の客あり、彼に數輩、此に數人、各皆準備あり、然るに幸にも天晴れ氣靜にして、奇火の昇ること早く、初二三の點船現はれ、西天一抹水邊を去ること、殆ど丈餘、浮々漂々として軽く燃え、轉々遷々として高く焼るゝに似たり、觀人僉手を拍つて奇ありと呼び、快ありと叫びつゝあり、余も亦大に感ずるところあり、注視凝目して之を瞰望すれば、點々班々現はれて又現はれ、右に昇り左に飛び、船々灼々相聯あり霄竝ふのところ、十點百點、其數を加へ、千火萬船、遂に算ふべからざるに至れり、古來年々夏宵を以て現はるゝ而も何の火たるやを辨せず、故に世人之を呼んで不知火と云ふ又此地斯く如き火あるを以て、火の國と稱したれども、後に至つて肥字に改めたりと聞く、余是に於て夜を徹し、既に曉鳥の聲を耳にして旅館り歸り、途次西南諸地の舊跡を探り、秋暮冷風に追はれて東に向ひ、門司海峡に涼船を索め、廣島、岡山

○記事紀行文

州の海上奇船あり○余幸に肥州に在り、一夜海頭に出で、奇火を望めり

○魚津の海洋

に屋氣樓を

觀るの記

北海奇景あり、屋氣樓と云ふ○魚津の海洋、屋氣樓を望むに便あり、古來屋氣樓を稱して、蛤貝の吐くところありと云へ

の二市に遊び、更に瀋車に駕して浪華に出で、洛陽、潞賀、名古屋に至り、特に東海の鐵路に便して家に還せり

○魚津海洋に屋氣樓を觀るの記

余は幸に越中魚津に知己あり、或年北國周遊の途次、同地に至り、友人某の家を訪へり、某曰く嗚呼此の珍客にして此の珍期に至れること、蓋珍上の珍あるのみと、余之が意義を解せず、茫然として友人に對し、珍上珍たるの所以を問へば、某答へて曰く、魚津は是屋氣樓の名地たり、年々春夏の候を以て、海洋遠く此の奇景を現はすべし、君は是余が爲の珍客たり、屋氣樓は是余が生地の珍景たり、恰好初夏珍景の現はるべきときたり、余是に於て珍上珍たりと云へるありと、余之を聞いて切に快怡に堪へず、直に謝して曰く、余嘗て地誌を開し、屋氣樓景の奇象を視んことを欲せり、而も土地遠遙にして、容易に之を實行するの期なく、徒北方を望んで空

○記事紀行文

り、而も今日開明の世特に覺るところあり、遠く雲霧に映じたる、山容堂態の影あることを知れり○遠海の邊、奇樓現はる○遙々たる海波の頭、高塔大厦の影を映す○雲霧に映するの奇景あり、特に魚津に於て其名高し○魚津の奇勝たる、實に麗氣樓を以て第一

忙情たるのみ、今幸にして此の奇景を瞰るの地に來り、尙其視るべきの機に接せり、實に以て君が平素の懇情よりして、誘引せられたるものならんか、余も亦快上快を覺えたりと、某之を質して曰く、快上快を覺ゆとは如何と、余之に應じて曰く、親友に遭ふて舊を語る、素より快あり、然るを尙奇景妙珍の風光を視ること同じく快あり、是快上快を覺ゆるの理由ありと、某大に悦んで曰く、珍上珍あり、快上快あり、實に云ふべからざるの盛事たりと、竟に余を停むること五日にして、一日細雨濛々たるの後、海面遠く波を治め、洋天微に雲霧を遣せるのとき、特に行厨を携へ瓢を提げて津頭に赴き、濱後の某丘に登つて余に語つて曰く、君請ふ彼の邊の雲霧を視んことを、今少く濃霧遮り大に妨ぐるところあれども、幸にして微風至らば、明々瞭々として奇景現はれんと、余之を眺むること暫時にして、天の一方より樓臺秀で、漸次闊わり門廊あり、其數實に算ふべからず、余覺えず妙と呼んで膝を打てば、瞬間忽變す樓臺の景、千萬里程に亘るが如き長城と成り、五歩に一樓十歩に一廊、聯々綿々として美上美を加ふるの景あり、乃余切に某に請ふて曰く、君は嘗つて東都に在るとき、水彩畫に妙を得たり、決して平凡一庸の筆にあらす、請ふ余が爲に此の美上の美を畫かんことをと、某亦之を甘諾し、疾人を賃して家に走りしめ、筆硯彩具を齎らして、余が企望に應じたり、其筆極めて健にして却つて艶あり、其趣疎にして還つて密あり、余某と共に津頭を去り某の家に向りて、尙二夜を過ぎ、終に別を愛みて西途に登れり嗚呼珍上珍あり、快上快あり、美上美あるの記を作り、魚津海洋に麗氣樓を觀ると題せり

○記事紀行文

と爲す○余北遊の途次、魚津に過つて、此勝を觀たり○實に稀有の風景たり○全く以て無二の影色たり○海洋遙に現はる樓臺の影○遠洋の波上麗廈の影あり○浪上臺廊あり○波上千樓萬廊あり

○弓ヶ濱に消夏を試みる

炎灼甚しからずと雖ども、笠をくして途に登らんか、頭髮必す焼

○弓ヶ濱に消夏を試みるの記

○弓ヶ濱に消夏を試みるの記

の記

弓濱の頭、北海の浪
 ○弓濱の明景、近國
 に冠たり○弓汀の風
 光、頗る清爽たり○
 弓渚の夏色、頗る清
 快あり○余伯耆に事
 あり、夏日弓濱に至
 り、涼を迎へて、大
 に煩鬱を拂へり、吾
 人伯州に事あり、遂
 に弓濱に臨み、切に
 涼風を捕へて、煩熱

かるべく、陽光烈しからずと雖も、傘をくして往來せんか、皮膚
 必ず焦さるべし、否焼焦すべからずと雖も、之を蓋ひ之を防ぐの
 道亦からんか、身を害し體を損じ、實に云ふべからざるの災厄至ら
 ん、余嘗つて伯耆船上山に遊び、弓ヶ濱の勝景あるを知れり、乃
 某年夏七月、愛兒を携へて此地に屆り、某旅舎に就いて炎暑を避く
 ること五週日、時に濱頭に出で、遠く海水の漂ふところを眺め、
 時に感銘胸に迫り、意考案念の極りなきを覺えたり、即中の島、影
 遠くして、後鳥羽帝の行宮を知るに由あり、尙後醍醐帝の艦を發せ
 られたる灣港の邊、雲か浪か、將霞か、靄々朦々として、辨ずる能
 はず、徒空想を走らし、之を計るのみ、然れども胸中の精念は
 疾く彼地に至り、畏くも兩帝親しく苦煩を嘗め、慘愴云ふべからざ
 るの痛患を経させ玉ひたるの舊跡に過るが如く、覺えず頭を垂れ雙
 手を支へて禮拜せり、殊に此山たるや、後醍醐帝を迎へ奉り、義旗

を除けり○弓濱の風
 光、極めて大あり○
 弓渚の景色、頗る佳
 頁あり

○高砂に涼風

を迎ふるの

記

濱頭の白砂、最美を
 り○濱頭の景色、頗
 る妍然たり○妍然た
 る佳景あり、高砂の
 濱○麗然たる好景あ
 り、高砂の汀○名松

を躑へして忠士を集め、終に風箏を送り奉りて、遠く兵庫に赴き、
 楠氏に合して誠忠を盡したる、名和兄弟の偉ある遺跡たれば、今更
 感慨頓にして、暗涙襟袂を濡して止まず、余是に於て懐紙を取り、
 鉛筆を揚げて和詩一首を賦し、悄然忙乎として降去れり

○高砂に涼風を迎ふるの記

時は既に暮夏たり、日已に初秋に近し、而暑熱烈くして家居に難
 く、尙書を讀み文を綴るの道を妨ぐることも大ければ、知人某氏の觀
 論に従ふて、遠く高砂に遊び、切に身心を養ふて、終に苦煩を逃る
 るを得たり、嗚呼此行や余が郷里東都を去ること、百六十有餘里、
 北方連山を負ひ、南方海水に對ひ、隣邑加古川に出れば瀨車の便あ
 り、殊に白砂廣くして、青松茂り、波浪靜にして鮮魚多々あり、曾
 根、尾上の名松あり、社頭狹からずして、風光清く、古翁媪の住
 みたりしと云ふ珍跡を遺し、遠景近影總て麗美なるの觀あり、余此

○紀事紀行文

あり、尾上を云ふ○
曾根、尾上の名松あり○尾上の松下翁媪あり○古來相傳へて曰く、高砂の祠前翁媪あり、各百歳の壽を保てり○高砂の濱頭、雙壽あり

○三保の松原

に遊んで夏

日の炎威を

知らず

駿州の地、明美ある

處に滞まること六週日にして、杖を束に返したれば、全く以て初秋

の候景をも探るを得たり、余大に感歎して曰く、須磨の明月、舞子

の青松、尚進んで明石の煙霞に至るまで、其景極めて優美にして、

悉皆秀勝の趣ありと雖も、近來避暑療病の客繁く、騒雜素擾

して、眞の風流を弄ぶに適せず、然るも此地閑謐にして却つて景色

明あるべく、汚濁稀にして朝夕清風あり、晝夜晴氣あり、費少く

して輕便簡易の樂土たるを識れり、嗚呼是此の計畫や、誠に可し、

吾人特に感銘して敢て忘るるをかるべきあり

○三保の松原に遊んで、夏日の炎威なる

を知らざるの記

三保の松原、其形長く、渺茫たる水を扣へて、遠州洋に通じ、砂

砌波上に浮んで、清水港に聯なり、遙に清見寺を望んで、富嶽の高

きを映じ、波上波あり浪下浪あり、蒼々たり翠々たり、總皆綠色

海濱に富む○清水港頭、青松を以て美あるの地あり、世人之を呼んで三保の松原と云ふ○三保の松原は、蒼海に臨み、更に富嶽の白雪を負ふが如し○三保の景色は山水を以て美あり○青松長く列あつて、汀渚に茂り、高く富峯を負ひ、低く清見寺の鐘聲を宿む○

○紀事紀行文

の湛ふあるのみ、沖行く船、磯に漁る舟、或は釣を垂れ、或は網を

投じ、或は貝を拾ひ、或は藻を刈り、或は潮を酌み、或は鯨を驅り

或は人を送り荷物を齎し、頭繁願賑限りなきの状あれば、頗る雜鬧

の態に視ゆ、然れども風光清美、景色絶佳あるが故に、敢て無厭を

生せず、決して倦怠を發せず、益す愛慕敬追の思ひあらんとす、時

に青松相列あるのどころを顧みれば、仙女羽衣を遺して遠く砂汀に

逍遙せるかの如く、姿勢明美、容貌麗妍ある一姬あり、徐々として

歩み、跣々として進みつゝあるに似たり、余之に近いて其誰あるや

を問はんとすれば、彼は大に耻ぢて敢て答ふることをなく、袖を翳し

面を蓋ふて地に伏すあらんとす、余尙詞を續いで問ふて曰く、汝は

是神女あるか、將仙姬あるか、今特に羽衣を携へずと雖も、必ず

や雲妃の類あらん、請ふ一曲の舞踏を試みんことをと、彼大に驚き

周章狼狽して、疾走急駆、後を見ずして影を隠せり、今是に於て忙

○記事紀行文

汀頭の青松は、白砂に映じて艶あり○青松の梢、玉露を停めて富嶽の景を映じて美あり○清水港頭松濱あり○清水港頭、三保の汀、松樹繁茂して、蒼海の緑に競ふ

○初秋松島に

然爲すあるを知らず、天を仰ぎ地を撫で、大に歎じて曰く、嗚呼余が愚昧なる。蓋し他に比すべきものなきか、余古の奇夫に習ふて、仙姫の妙手を視んことを欲し、特に無禮の言を吐いて、他を驚かしたること、實に懺悔の外なきありと、時に人あり余が肩を叩いて曰く、何爲れを空く汀頭に起つて獨り煩念し、左視右望して更に悵情たるの状ありやと、余又大に驚いて看れば、親友某の至れるあり盟僚某の誨ゆるあるあり、乃具に思ふところを語り、感ずるところを告げ、相笑ひ胥ひ誓つて松樹の下に坐し、清風を迎へて襟袖を晒し、爽氣を懷にして麗景を賞すれば、忽開ゆ梵鐘の聲、既に夕影の至れるを報ず、余等此の清景を愛すること切ければ、今にして去らんこと、甚難しと雖ども、天色朦朧として、日將に暮れんとするの時に迫れば、遂に杖を反して家に歸れり

○初秋松島に遊ぶの記

○記事紀行文

遊女の記
時は既に初秋たり○時は已に秋頭たり○初秋の候を迎へて、既に炎氣を絶てり○秋色至れりと雖ども、而も残暑あり○殘炎ありと雖ども、敢て之が苦煩を覺えず○千種の島影、萬様の松景○船を巡らし、て島影を望めば、千容萬態、眼頭に現は

麗々たるか松島の景、輝々たるか千賀の影、右より眺むるも千様の島嶼あり、左より望むも亦千種の島嶼あり、殊に老松杖を垂れて翠波を拘するが如きの状、異違變化して、頗る珍奇の態あり、即舞はんとして轉輾たるの杖あり、走らんとして衣を褰げたるの袴あり、或は飛ぶかど疑はれ、或は踊るかと思はれ、或は招き、或は弱し、或は指し、或は打ち、或は撲き或擲ち、或は進み或は退き、萬態續々として敢て限りなきが如し、余嘗つて北國に遊び、初秋の候を以て鹽釜に至り、船を賃して浦水に浮び、緑波翠浪の間に巡りて、遠く海洋を眺め近く島影を認め得たり、古來名手の詩文あり歌句あり、常に之を賞して敢て措かず、余亦特に之を賞し、實に神島あり靈松ありと云ふ、如何と云れば、余が賃せるところの船を浮べて浦頭に掉せるとき、無數の島影眼前にあり、各奇松を生じて翠色深く、悉く綠葉を戴いて海よりも青く、妙姿情容萬々たるの觀あり

○記事紀行文

れ、其奇、其妙、實に明狀すべからざるあり○島頭悉く奇松あり○島頭の松は翠緑に富めり○松葉の緑は、海水の青に映じ、島苔の翠は、空天の腕に比す○濱頭神祠あり、鹽竈神社と稱す○千賀の浦頭、松島の影たる、實に我國優秀のもとの云べし

さ。然るに少く西に廻り、甲島を過ぎて乙島に進めば、景色俄に變じて、更に精妙の趣を示すあり、尙斜に進んで左方を顧みれば、恰幼兒の母に抱かれ、乳房を口にして戯るが如きの狀を視るべく相撲を學んで相摺み骨握り、肩を怒らし腕を張り、脚を固め腰を轉じて將に相擲つあらんとするの勢を認むべく、翼を鼓つて空天高く翺飛せんとするの鳥に類し、四脚を張り眼を怒らし、一叫風を呼び二哮山をも劈くの虎に比すべきものあり、雲を渡り雨を潜り、金鱗碧鱗を現はして、高く天外に飛ぶの龍に擬すべきあり、人の行くに似たるものあり、白帆を掲げたる船かと思はるゝものあり、其狀の明美麗快ある、敢て言辭を以て陳べ得べからず、筆紙を以て書き盡すべからず、是全く神島あり靈松ありと稱するの外なければあり、乃船を左に還して鹽竈社殿の下に纜し、更に神前に額いて天下の泰平を祈り、踵を揚げて旅舎に歸れり

○記事紀行文

○松島に月を觀るの記

云ふべからざるの麗景あり、剩月光の灼くれば、蓋他に比すべきの佳色をからん○島影美にして、青松の麗あり、加之明月の輝くを觀る、實に無限の好趣を呈す○余一夕松島に遊び、特に圓月の美あるを知れり○

○松島に月を觀るの記

云ふべからず述ぶべからざるの妙島あり奇松あり、古來名詩秀歌の贊美あり、文人墨客の筆跡少からずと雖も、千賀の眞景を寫したるもの極めて稀れあるのみ、然れば余が如き、平凡常庸のものにしては、詩韻を試みんこと素より難し、否難きにあらす、斯の麗景の應せざるあり、文を綴らんか、句を試みんか、是亦決して能はざるどころあり、嗚呼悲いかな、人は自然にして此世に生れ、自然にして天性を備ふるあれば、茲に天然の風色を賞するに於て、敢て難しとすることなきあり、而も之を難しとするあるは、唯々悲歎の至りあるのみ、否余は敢て悲歎せず、疾く起つて一詩を試みん、大に奮つて一文を綴らんか、乃野硯を開いて秃筆を染め、竟に駄辭を聯ね得たり

松島の勝景に題す

○記事紀行文

月あり松あり、又島あり、特に波上に浮んで麗妍窮さし○一夜松島に臨んで明月を眺む○松島の麗景にして更に明月を添ゆるあらば其趣や、實に明状の外あらんのみ○既に無限の妙景あり、更に明月を加へて風光を大にす○人あり余を誘ふて松島に赴き、特

○秋水茫茫として夕照斜る時、閑に竹杖を把つて汀沙を歩み、更に舟艇を浮べて島後を巡れば、聯々たる翠松浦々に現はる時佛人某、余が拙詞を視て大に思ふどころあり、別に國韻を綴つて感情を陳べたり、即之を意譯せん

限り知られぬ島の數、

算へやられぬ松の數、

千々萬々の姿あり、

雲に飛びかふ龍の形、

風に嘯く虎の姿、

高くかけゆく鷲の羽根、

近く馳せゆく蝶の影、

實に面白の松島や、

夕に照りをふ月視れば、

涙に映ふ枝と枝、

風にゆるるける幹と幹、

船を浮べて眺むれば、

漕ぐにまかせて様々の、

趣かはる美ごとさよ、

今更賞むる言葉あり、

實に面白の松島や、

是に於て東天月の輝くを羨ち、靈景益す靈景を重ねるを眺め、終

○記事紀行文

○秋季陸軍演習

に明月の勝を示せり
習志野の蟲を聴くの記
叢裡群蟲あり、秋を賞して鳴くこと頻あり○廣漠たり習志野の原、東西蟲聲あり南北の冷風あり、習志野の頭、萬蟲の聲を聞けば、秋色深くして、四圍冷かり

に曉を徹して去れり

○習志野に蟲を聞くの記

時既に秋季たり、冷風徐に至つて襟袂を濡はすの感あり、即友入某と共に習志野に赴き、月下に逍遙して蟲聲を聴けり、蟋蟀あり、鈴蟲あり、又松蟲あり、或は横笛の如く、或は笙の如く、或は筆葉の如く、曉々嚶々、又朗々、妙聲奇音耳を貫いて來り、愉快々として、其狀云ふべからず、殊に毎歲陸軍演習の地たれば、草裡彈丸の埋もれるところ、無心の聾蟲哩々と呼び、無意の螟蟲翅を張つて飛び、古句に所謂、嗚呼哀憐あるか、兜下の蟲の眞情あり、然るに白露濃にして、叢草濡ひ、風冷にして、肌膚寒さを覺ゆるのとき、遠山月を胎んで四面輝き、蟲聲更に清明にして、秋色高し、乃特に國詩を賦して此景を賞せり

○秋期陸軍演習を見るの記

習を観るの

記

秋季陸軍演習の地たり
○本年も亦陸軍演習の催しあり○本年も亦陸軍演習の設計あり、勇兵猛卒既に來集せり○機動演習の設けありと聞く○機動演習の地として、暑適切なところたり○年々歳々演習を行はる○歳々年々

○記事紀行文

草木既に黄み、野風已に冷あり、時に某師團の軍兵あり、豺貅を盡して某野に陣せり、夜來急雨あり、天未晴れず、雲脚益す凝結して、遠く北嶺に群集するの状あり、然るも猛兵之に屈せず、勇士敢て撓むところなく、威氣凛々として雄奮し、勢姿活達して向ふところ敵なきの觀あり、是に於て軍令定まり、遽然陣を進めて山谷に馳せ、或は谿河に逢ふて橋を架し、或は要地を索めて砦を構へ、斥候を送つて敵情を探り、竊に動き密に轉じて暫く相窺ふのとき、忽にして敵軍現はれ、對山の傍砲兵あり、遠く火蓋を切つて甲陣を狙へば、甲陣亦砲兵あり、隊伍を揃へて岳頭に列り、遙に撃下して之に應じ、騎兵を走らして突貫し、尙歩兵を勵まして急衝すれば、乙軍奮つて之に當り、竊に隠れて山後に入り、横に巡つて南方に現はれ、甲軍を欺いて挟み撃たんとすれば、甲軍亦謀を建て、之を防ぎ、横縦無盡相攻め骨撃ち、相追ひ討ち、彈丸雨下の間にして

陸軍演習の設備ある

を見る○眞に以て演習の好適地たり○陸軍の勇兵萬餘の數○數萬の陸兵、各精英を以て名あり○無數の軍兵火焰の中に在り○砲銃の洪音天地に轟く○砲聲山を貫き、吶喊地を碎くに似たり○猛士勇卒、山後に在り○攻撃の砲聲、天地に溢る

○記事紀行文

苦戰難争の勞を試み、實に明狀すべからざるの勇圖あり、殊に砲丸の響くところ、百電千雷の轟くが如く、硝煙火焰の群るところ、恰雲霧の集まれるに似たり、然るに復山東吶喊の聲あり、砲擊銃戰頻々たるの間、抜劍の軍士相接して闘ひ、更に相分れて乙軍の退くもあり、甲軍山後に構へて、竊に銃聲を隠し、流れに添ふて西谷を渡り、遠く巡つて乙軍の背後に出で、俄に砲を放つて急戦すれば、乙軍頗る狼狽の状あり、隊を退けて岳南に潛み、暫く鋒を休めて、再舉を謀らんとして別に斥候を送つて敵情を索るに當り、甲軍も亦斥候を發して窺ふところあれば、途上相逢ふて大に戦ひ、乙軍一士、甲軍の猛者を虜にし、疾く諺去つて本部に返し、敵狀を質して更に軍略を改むるとき、甲軍大に策を建て、逆に急進して乙軍の側面を衝けば、乙軍復破れんとして、苦戰難闘し、突然圖るところあつて、隊勢を改め、漸々軍を退くること五里にして、某山の麓に陣

○紀事紀行文

○黒煙空に漲り、雷
 火山谷に轟く○巧み
 埋没したり地雷火の
 機○巧みに爆發して
 、一機萬兵を倒す○
 彈丸霰の如くに飛
 び、烟煙雲の如くに
 群がる○甲軍の作戦
 其機に適へり○乙軍
 の方畧戦法に適へり
 ○遽然山後に現はれ
 、突然嶽下に出でた
 り○猛進勇突して、

し、更に隊を分つて三部を爲し、前面斜阪の如き原野を叩へ、左側の平地を表とし、右傍の高丘を楯と爲し、備へを正うして、敵の至るを俟てり、是に於て甲軍大に慮るところあり、敢て之を攻撃せず、徐に進んで、靜に近き、遠く發砲して戦ひを挑めり、乙軍期するところなれば、遽然之に應じて混戦し、殆ど一時有半の亂闘にして、甲軍頗る勝算の氣あり、密に乙軍の背面に出でんと、隊を分つて高岳に巡り、尙進んで山邊に至らんとするとき、乙軍の斥候之と認め、疾く馳せて本部に通じれば、乙軍大に警むるところあり、部隊を合せて一期に禦ぎ、蕩然横に衝來つて甲軍の中腹を破り、終に亂戦益す亂れ、劇闘増す劇く、甲士遠く混進して乙軍の中陣に在り、乙兵近く追つて甲軍の本部に臨まんとし、一騎軍歩勇威を勵まして奮躍突飛のとき倏然喇叭の聲あり、戦闘中止の命あり、甲軍の進退法に適ひ、能戦ひ能く勉めたりと雖ども、某河を渡らんと

既に萬軍を破れり

○田毎の月を賞するの記

田毎の明月、秋色を
 齎らす○田毎の明月
 、鐵裡の蟲聲を促す
 ○田毎の月あり、萬
 蟲之に依つて唧く○
 水田 悉く月光あり
 ○水田 悉く月影を
 浮ぶ○水田の月影、
 光々として熠く○明

○紀事紀行文

○田毎に月を賞するの記

して、少く周章の態あり、惜むべくも空虚現はれ、遂に乙軍の狙撃するところと成り、前隊中軍、既に其半を破られたるの状明なり又乙軍の戦法頗る勇雄に過ぎ違つて道理に適はざるの進退ありと雖ども、防禦の術甚巧みにして、某河上甲軍の慮あるを認め、一齊射撃を以て之に當り、特に勉めて戦ふたるの状、既に敵軍を攻め退けたるものと認めらると審判せられき、乃兩軍相携へて某地に退き、威氣を休めて本營に歸れり、余幸にして斯の演習を觀るの榮を得れば、鐘を實地に執つて、之が眞況を記す。

鳴呼奇あるか田毎の月、前後左右 悉皆水田あり、高低あり起伏あつて、決して平様均一ならざれども、遠く山頭に登る明月の影は一畦一畝の中に映じ、無数の圓鏡田面に浮び、特に空に對つて焯々たるの状あり、故に之を名づけて田毎の月と稱す、余此勝を觀んて

○記事紀行文

月水田に映じて、其影深し○一望萬畦の月を觀る○一眺にして萬田の月を認む

○小倉山に紅葉を觀るの記

小倉山頭、紅葉あり

特に今日を以て、

其の盛昌を極む○小

倉山頭、紅葉美あり

○小倉山頂、紅葉の

絶美あるを賞す○友

を誘ふて小倉の山頭

とを欲して果さず、空く年を重ねる既に十有五年ありき、時に友人あり信濃に旅し、更科に過ぎて姨捨山を訪ひ、大に觀月の興を試みんとす、君請ふ余と共に途に登らんことをと、余是に於て裝を整へ杖を曳いて其行に従ひ、八月十五日を以て田毎の里に達し、天晴れ風靜なるの夜景を眺めて、茲に全く斯の如きの勝を縦にするを得たり、乃筆を執つて之が記を作る

○小倉山に紅葉を觀るの記

此山は是小倉山あり、此山は是嘗つて聖駕を迎へたるの名地たり、嗚呼峰頭の紅葉にして、若し茲に心念あらば、尙切に請ふあらん、鳳聲聖駕の再び輦り來らんことをと、貞信公の和詩に於て其狀最明あり、時に余單歩して此山に登れば、頂麓共に皆紅葉を以て盈たされ、宛然霞の如く錦の如く又花の如し、殊に其色精美にして、他の楓類に優ること數等、麗娟絶婉として實に云ふべからざる、風

○記事紀行文

に登れば、無數の紅葉、眼下に在り○紅葉の時節、山色精美あり、紅葉の時節、山色燃ゆるが如し○紅葉、峯に盈又谷に満ちたり○山上山下總紅葉を以て盈たさる○山頂の楓葉、二月の花よりも紅かり○山楓夕日に映じ、特に三月の花よりも紅あるを觀る○

光あり、余覺えず手を拍つて之を賞して曰く、紅葉は是秋山の花あり、氣煖ならず驚嚇せずと雖も、恰春の如きの麗色あり、紅葉は是唐錦あり、絹の織緯なく、絲の織地なしと雖も、特に綾羅に似たるの絶美あり、余大に之を愛好するの念に驅られ、更に贊文を綴つて斯勝を擴めんを欲す

遠く山谿を探れば、明美云ふべからざるの紅葉あり、近く原野に索むれば、精麗比すべからざるの錦綾あり、蓋是誰が織手に依つて織られたるものあるか、誰が斲手を以て植ゑられたるものあるか、吾人自之を釋くに由なしと雖も、古來歌仙の妙評あり、能く其眞を穿ち、能く其秘を盡したり嗚呼斯の如くにして之を懷裡に誦んじ、歩を速めて家に歸るの途次、友人某の寓を訪ひ、更に筆紙を請ひ求めて、之を記し、友人某に示して批評を煩はしたれば、彼之に應じて曰く、此は是賦文のみ、

○記事紀行文

紅葉にして心意あらば、特に謹んで幸行を請ふならんか○畏も帝王の幸行を辱らし、山靈益其の精美を促して紅葉を捧ぐ

○長崎港に秋月

を觀るの記

皇國の西端、長崎の灣、月色明にして秋季深し○長崎港頭秋月清し○長崎港上月輝々○明月波上に

○長崎港に秋月を觀るの記

西國の名港長崎の灣、古來海外遠來の船舶多く、東西相通し南北背和するの元と成り、貿易通商の基礎たりしあり、余遠く南洋諸島に旅し、其の歸途斯港に入つて三泊せり、幸にして風あけられども雲拂はれ、時は秋あれども冷氣至らず、尙八月三五の明月を迎ふるの夜とは成れり、午後第八時にして甲板に登り、安樂椅子に憑つて天の一方を仰視れば、東空忽明開して白氣現はれ、暫にして鏡の如き

○記事紀行文

浮んで港景美あり○明月波頭に映じて、秋光頗る艶あり○船を浮べて港外に掉せば、明月輝々として秋色の深さを示す

○三尾の紅葉

を採るの記

三尾の紅葉たる、素より皇國の名品とす○三尾に紅葉を採ると聞く○三尾山頭紅葉美あり○三尾山中

○三尾の紅葉を採るの記

圓月の昇るを觀、港水湛々として翠綠深きところ、銀波連々船底を洗ふて去り、鮮魚踊躍して所々に音あり、實に愉快の極と云ふべし乃船僕に命じて饅酒を齎しめ、杯を傾けて之を賞し、竊に象山の詩意を思ひ、特に松蔭の文情を想ひ、血淚滾々袖を濡はすに至り、忽冷氣を覺えて、肌膚將に凍えんとするの感あり、周章階を降つて室に去れり、記して以て後の紀念に供ふ

○記事紀行文

○肥前紀行文

特に紅葉の美あるを
観る○三尾の紅葉、
秋候の全さを示す

○焼津に秋色
を觀るの記

此地は是古代の名跡
あり、世人歴史に依
つて、其の事項を明
にす○此地や元駿國
の一原野のみ、而も
日本武尊の偉功に由
り、焼津の稱を蒙つ
て美名灼々たり○燒

に之を歎じて止まず、茲に意を決して三尾の紅葉を探り、特に他の
知らざるるところを識るに至れり、今之が記を作ると云ふこと爾り

○焼津に秋色を見るの記

嗚呼此地は是焼津たり、古日本武尊と稱するの親王あり、畏くも
父帝の命を蒙りて東征の途に登り、終に駿河國に至り、賊を討つて
之を降服せしめたるのち、彼の勸むるに任せて郊野に遊べるのと
き、羣を誘ふて草深きところに入り、俄に火を放つて之を燒き奉ら
んとせり、羣大剣を抜いて草を刈り、豫て腰に帶せる袋囊あり、燧
石を藏せり、即之を取つて草を燒きたれば、天風遽然として其の
方位を變じ、賊を逐ふて益す延焼し、大に敗北せしめたることあり
是焼津の名ある所以ありと、余或年秋九月、東都に歸るの途次、此
地を過り、一夕明月を賞せんとして焼津を訪ひ、更に叢裡萬蟲の聲
高きに感じて、遠く古代の情狀を思ひ、切に羣の偉勳を仰ぎ奉り、

心意誠惶、覺えず地に伏して宏恩を拜し奉れり、乃焼津に秋色を
觀るの記を作る

○秋夜田原阪を過ぐるの記

津の地たる、古代有
名の偉跡たり
○秋夜田原阪を
過ぐるの記
時恰秋九月某日
り○時恰仲秋に
して、夜田原阪を過
ぎんとせり○夜深く
して、田原阪傍に蟲
聲を聞く○夜は更け
たり、田原阪の蟲○
露は清あり、田原阪
の森○時に田原阪の

夜色深しと雖も明月あり、時秋末ありと雖も襦袍あり、敢て暗
からずして途を行き、敢て寒からずして風を防ぎ、特に快怡を懷い
て旅杖を曳けり、此地は是田原阪にして往年西南戦争に當り、陸軍
の兵威頗強く、能戦ひ能く防ぎたるの名場あり、否官軍大に陣を
盛にし、苦戰難圖、死を決し命を擲つて奮進勇撃したるの遺跡あり
然れば當時人家の墻壁は素より、樹林叢裡、悉く彈丸の痕あらざる
はなし、今尙途上の松杉にして、其幹其枝、之を遺せるもの多々あ
り、余肥後に遊び、舊跡名所を探らんとして此地を過り、特に夜路
に就いて、感想最深かりしあり、古人云へるあり、人各思ふと
ころ切にして、專其一方に偏し、己先之を可として、他に及さん

○肥前紀行文

○記事紀行文

古戰場を過ぐ○路傍の古松、彈丸の痕あり○阪路の叢裡、彈丸の遺棄せられたるあり、塙壁悉く彈丸の痕跡あり○余西南に事あり、一夕田原阪を過り、特に明治十年を回想して、

悲哀胸に迫れり

○天草洋に夜船を訪ふの記

余天草洋に過り、某

ことを欲すれども、他亦別に計るところあり、其一方に凝つて人の言動を容れず、相誇り胥傲つて敢て譲らず、遂に鬭争して之を決定せんと欲す、然ればは何れも正義あり明分あり、己獨公平にして他は皆邪曲なりと信じ、終に旗を揚げて之を死地に試みるに至る、故に若し勝算あつて我意を貫くを得ば、世人之を呼んで、正義公平のものぞ稱し、若し一敗地に塗るあらば、衆庶之を評して邪曲奸暴の賊と爲す、嗚呼人世の情状は、虚空のものあるか、實に悲歎の外なきありと、余此語を思ふて、南洲西郷氏の胸中を察し、轉慨念に堪へざるあり、切に感ずるところを陳べて、之が記を爲す

○天草洋に夜船を訪ふの記

天晴明ならずして、少く朦朧たり、海浪靜ならずして時に音高しと雖ども、巨舸大船泰山の如くにして敢て動かさず、錨を投じ綱を張つて灣頭自若たり、余事あつて肥後に至り、宇土、八代に過り、遂に

○記事紀行文

船を訪ふて某知人に面せり○某船に至つて、某知友を訪へり○余肥州に在り、下島に至り、更に長崎に渡らんとして、天草洋に某船を訪ふ○下島は是天草洋に置ける小島あり○志岐崎停泊の一船あり、余が知友某の所有たり○往年希督教徒の戦亂ありき○往年

肥前に渡らんとして船を賃し、下島に登つて止まること三夜、然るに志岐に一船あり、郷里の豪商某の在るを聞き、夜明を便として別に艇を用ゐ、浪を蹴らして之を訪へり、幸にも某の款待を蒙り曉天群雨の濛濛に飛び、遠く日光を迎へて海禽の騒ぐとき、艇を廻らして旅舎に歸れり、此島は是往年耶穌教に係る、劇戦猛闘の舊跡たり、實に惨忍苦酷の古蹟趾たり、殊に頼氏の名詩あり、遠く海洋を望めば、空茫限りなく、雲か山か、吳か越か、水天髣髴の間にして、朝鮮南端、勃海の浪、滿國南東の濱汀を窺ふの觀あり、余一詩をかかへるべからず、又一文をかかへるべからず、而も才短く學に乏しければ、今特に之を試みんこと難し、乃筆を投じて歎息するの外なきあり

○秋夜麿島灣に詩情を縦にするの記

親友某と共に麿島に遊び、往年南洲戦没の地に過り、其の大志偉

○記事紀行文

耶蘇教徒に係る戦闘あり、其の騒擾云ふべからず、四圍の衆民災害を蒙れること多々ありしと聞く

○秋夜鹿兒島灣

に詩情を縦にするの記

秋色深くして、海波翠あり、鹿島灣○鹿島灣頭、秋色大なり○鹿島灣外波浪高く、明月皓々として

量を思ふて覺えず壯快の情に驅られ、手を拍ち足を踏んで、踊躍すること屢ありき、而も退いて深く考ふるときは、其の大意にして遂に成ることなく、其の偉量にして全く用ゐること能はず、空しく城山の土と化し、切に千古の鬼と成つて、徒草裡に消えたること、實に慨歎に堪へざるあり、是に於て懷念忽悄悵たり意氣突然亡敗し、暗涙滾々として襟袖を濡はすに至れり、嗚呼止さんく、我事止さんとは、南洲自戦闘に望むの前、疾く歎息して云へるの語ありと聞く、南洲は決して平凡の人にあらず、否平凡の人にあらざるのみならず、勇魁にして膽力大に、明智にして度量廣く、實に優秀、非凡の俊傑たりしなり然れば彼素より西南戦争の利あらざるを知れり、必ずしも敗北せんことを察せるあり、特に勝算を得んことを最難きを悟り、尙其の行ふべからざることを識れりと雖も、周圍の猛士、勇雄の輩、頑固執拗、愚蒙の徒、切に迫り頻に促して戦

○記事紀行文

秋色麗々たり○鹿島灣上、明月高く、特に詩情を促して秋色更なり○明月曬々として、秋景深く、特に詩情を促して來る○秋月波間に漂ひ詩情港頭に満つ○詩を吟じ文を誦して、古事を思ふ○詩を賦し文を綴つて、英雄の心事を想ふ○船頭に坐して遠く海上の

闘せんことを勧め、其の請望止むべからざるを思ふて、遂に詮なくも之に應じ、自大将と成つて劍を握りしあらん、嗚呼悲いかな悲いかな、嗚呼斯の如き智蒙、此の如き英雄たる南州にして、却つて斯の如きの愚者に誘はれ、尙此の如きの拙策を計りたること、實に萬歳盡るなきの悲事たるあり、余常に之を想ふて袖を濡らすこと多々あり、今宵親友朋と共に船を鹿島灣に浮べ、詩宴を設けて古人を吊ふの事あり、乃南州親僧の月照と相抱き、深く海底に投じて、將に死せんとせるとき、疾く救護に逢ふて復命脈を繼ぎ、大に奮つて東軍に戦ひ、大將主宰の榮職に當り、盛位巨勳を帯ぶに至り、遽然轉化して賊命を負ひ、漸く愛名を辱くして、復位稱を蒙りたりと雖も、甲東、松菊に優るの名士にして、終に之が満全の大勳を表するの術なきに至れること、眞に以て千古の遺憾たり、時に詩情の勃々たるあり、先づ南州を吊ふの一首を賦し、桐野、篠

月を眺め、近く英雄の心事を歎す○船頭明月を眺めて轉哀歎に堪へず

○屋島の海上に漁火を觀るの記

屋島海上、遙に漁火を認む○屋島海頭、無數の漁火あり○屋島の海波、漁火を浮べて動く○海波靜にして、無數の漁火を

○記事紀行文

原の英雄を吟じ、舊今名傑に題するの韻字を試み、大に鬱胸を開くを得たり

○屋島の海に漁火を見るの記

浪波起伏して、或は山と成り或は原とあり、否山嶽を摸り、平原を形り、一搖一動、畔と成り畦と成り又堤と成る否決して、畔と成り畦と成り又堤と成るにあらす、風あり海水を追ふて之を助揺せしめ、轉々移々して以て、之を作成せるのみ、時に秋八月五日の夜、屋島海沖千百の漁火あり、遠く濱汀に起つて之を望めば、浪波の揺ぐに應じ、風の過るに従ひ、明滅斷續、敢て齊一あらす、或は一期にして千燈列り、或は點々所々に焰き、或は一方に盛にして、一方に衰へ、或は百火五十火として燭き、或は突然消亡せるの觀を呈し或は沈み、或は浮び、千態萬樣、實に云ふべからざるの佳景たり、蓋是秋夜魚鱗を漁せんとして、船艇を離し、遠く數里の海上に進ん

浮ぶ○波浪平靜にして船舟を浮ぶるに易く、風風きて漁火を燐くに便あり○海上遙に觀る千萬の漁火○千萬の漁火あり、屋島の波頭に漂ふ○往年義經の偉効あり大に源家の威勢を誇り○海上微に認めむ對岸の煙○夜海上に浮ぶ漁火の影○漁火浪に映じて美あり

○記事紀行文

○衣川に秋草を見るの記

で、燐火を燃き、特に釣を垂れ、網を投じて相勉むるあり、余や讚岐に遊んで屋島を訪ひ、畏くも安徳天皇行宮の趾を探り、源廷尉の勇謀智略、教經の怪雄豪舉、嗣信の忠死、菊王の難、與市が効手、三保の屋の頸骨、景清の腕力等彼を思ひ此を想へば、悉く暗涙の種素あらざるはさければ、切に胸を閉ちて轉惘然たること久し、而も今漁火の輝くを觀て、大に感銘するところあり、乃筆を執つて之が記章を綴る

遠き千歳の古に於て、英武俊傑の鋒を交へたるところ、今は變轉して瓦屋櫛比の街衢と成り、智將謀士の帷幄を張れるところ、今は遷違して、廣野と成り、新陳代謝し且移動し去り、敢一瞬間たゞ佇留することなし、時に余は友人某に誘はれて衣川に至り、馬上の兩雄、國詩を吟じて、戰中雅趣を弄んだるの快事を思ひ、轉慘涙に堪

○記事紀行文

○衣川に秋草

を観るの記

衣川の碧染英雄あり

○衣川の柵は堅牢を

以て名ありしと云ふ

○往年の衣川は英雄

の偉蹟を停め、現時

の衣川は才俊の遊旅

を廻ふ○安部の豪俊

能守つて能防ぎ、源

氏の名將、能戦ふて

能攻めたり○兩將和

歌を詠じて戦鬪を緩

へざりき、殊に郊野田圃の邊、流水草樹の狀態を眺め、終に胸臆を裂き、臆勝を破るかの感ありしあり、否其感ありしのみならず、今尚之を思ふて感慨措く能はざるあり、爰に於て友人某、余が袖を取り、竊に引いて語つて曰く、君見ずや對岸草深きところ、古狸の如きものあり、右に走り左に飛び、大に樂むあるを、古語に曰く、千有餘年の前、英雄俊傑戦鬪の場、今は草蒸して、狐狸の棲巢たり實に慘忍暗冥の極、更に化して、空く怪獸の巡るところと成る云々今此の衣川も亦斯の如きの類のみ、夫安陪の貞任は北軍の豺豕たり否虎獅たりしあり、能く戦ひ能防ぎ、能く守り能く勉めて、其軍を用ゐたるあり、尙其の猛威、他に優れ人に勝るを以て、北狄野蠻の暴賊と爲せり、然れども茲に名將義家の弓矢に追はれ、既其命を落すべきの期に臨み、衣の楯は破綻せりの次句に應じ、年を経ること既に久く、絲緯特に紊亂したるが故と、前句を陳べて遠く退くを得

○記事紀行文

ひ○貞任の英邁奥地

に轟き義家の優智關

東に振ふ○太郎の弓

勢能與賊を倒せり○

古英雄の姿あり○

兩雄の偉勢今尙存す

るが如し○苦戦の情

實に思ふべきあり○

前後十二年の戦ひ、

實に千難萬苦のこと

のみ○太郎の誠忠、

實に偉ありと云ふべ

し○太郎能く大弓を

たるのことあり、真に以て武者文を語るの美談ありき、然るも是古のこののみ、余今此地に來つて、之が古戰場を訪へば、僅に怪獸の走るあるのみ、嗚呼哀愍の情に堪へざるあり、嗚呼余は寧ろ歸らんかあと、遂に踵を反して去らんとせるとき、脚下蟲聲あり、切に余を停むるに似たり、是に於て少く右に巡り、蟲聲を追ふて進むこと十歩にして、桔梗の花あり、紫色相群つて、最盛顔せり、乃就いて見れば、其傍に女郎花あり、黄金の色を湛へて、頗る精美あり一枝を手折らんとして行くこと三步、俄然菝葜の開くあるを認め、菝葜の蒼堆せるところ、葦莖直く伸びて、秋蘭の香を慕ふが如く、笹輪棠花の奇美あるに應じて盛るあり、其麗限りなく、其艶窮りなければ、左視して以て、右に歩み、右顧して以て左に行き、運動散策畢に星光を負ふて家に歸れり、余特に此行の序次を筆し、題して衣川に秋草を観るの記と稱す

○記事紀行文

用の一射千人を倒すの勇あり

○遠く桶狭間に

秋暮の月を觀

るの記

遠く雲際を望めば、

桶狭間の古戰場あり

○遠く望む桶狭間の

月、既に秋暮の景を

誘ふて輝く○秋暮の

麗月、桶狭間の古戦

場に輝く○時は既に

秋暮たり○時恰も秋

○遠く桶狭間に秋暮の月を見るの記

嗚呼此地は是桶狭間にして、往昔今川義元の憤死したるところなり。實に義元は勇士たり智略に富めり、然るも切に陣を構へ、大に威勢を張つて勉むべきのとき、大雨大雷あり、天候頗る騒々たれば、敢て敵の來り犯すあきを思ひ、氣色緩み意思怠り、杯を傾けて餘念を斷ち、特に愈斷の狀あるに際し、織田の軍旗、其の背後に現はれ、遽然たる攻戦極めて烈く、竟に敵手に襲はれて憤闘し、空く野陣に命を落せり、余關東に事あり、秋夜月を負ふて鳴海を過ぎ遙に野南の一丘を望み、深く追懷の情に堪へず、轉暗涙に咽べるあり、乃別に一詩を賦し、路程を速めて某驛に届れり、是に於て旅窓の下に枕し、時に眠らんとして眠る能はず、復桶狭間の戦情を思ひ、義元憤死の狀勢を察し、案念益す胸に迫り、悲哀交至れば、特に人世の苦難を避けんには、常に勉めて怠たらざるにあるを知れり、嗚

○記事紀行文

末にして、月光輝々々蟲聲を促すこと頻あり○時は既に秋暮たり、月光灼々として四圍に輝く○余登京の途次、桶狭間に至り、遠く今川氏の戦を想ひ、轉悲哀に堪ざりき

○春日野に鹿鳴

を聞くの記

春日野の邊鹿鳴高し

春日野の邊明月輝き

○春日野に鹿鳴を聞くの記

呼愈斷たるものは、百難の素と成るべく、實に恐るべき僻事たるを悟れり、余是より學に勵み職に勉むべきの身たり、而も若し一時の快に耽り、他を侮り外を輕するの愚を學ばんか、突然として障害起り、忽然として災厄來り、企望は破れ設計は碎け、俗に所謂千日を要して苴り得たる萱あり、一朝雨に遇ふて、悉皆濕潤したるの類に歸せん、嗚呼愈斷すべからず、怠慢すべからず、鞠窮龍勉、以て大に務むべきありと、苦念煩想して夜を徹せり

秋色既に更けて、山水寂寥たり、四面綠ありと雖も、草苔の盛れるのみ、樹葉悉く紅を帯び、冷風低く涉つて軒頭を撃つこと頻あり、時に人あり余が家を訪ひ、今夕は是天晴れて風なく、俗に所謂秋和のときたり、請ふ共に春日野に赴いて鹿鳴を弄ばんことをと余も亦素より望むところあり、直に起つて行を同じうし野邊に届つ

○記事紀行文

遠く鹿鳴あり秋色を
深くす○春日の野頭
鹿聲濃にして、遠
近の草露、月光と共
に輝く○月あり春日
の野頭に照き、鹿あ
り、春日の野外に鳴
く○鹿聲を聞かんと
して、遠く野外に至
る○特に鹿鳴を聞き
て、哀情切あり

○某園に菊を
観るの記

て筵席を設け、樽酒を招いて談笑し、快氣類に催すのとき、三笠山
頭、半輪の月、斜に懸つて白雲の間に輝けば、鹿聲遠く聞えて、燐
況を加ふるあり、嗚呼悲いかな、余は特に燐況を求めて此野に至り
たるにあらす、切に鬱氣を除かんとを思ふて、鹿鳴を待てるのみ
然るに其聲極めて悲く、余が胸底をして破碎せしむるのみ、余が臆
肝をして苦縮せしむるのみ、嗚呼余は事を過てり、何が故に斯くの
如きの愚を學べるや、若し余を促がして鹿鳴を聞かしめたる人あか
りしあらば、決して斯の如きの煩難を覚えざりしならんにと、歎息
痛念して止まず、疾く家に歸らんことを欲せり、乃伴友余を戒し
めて曰く、汝は是愚鈍のもののみと嗚呼

○某園に菊を見るの記

時は是秋九月あり、某園の菊花、最盛昌ありと聞けり、乃疾く赴
いて園を訪へば、無数の花盆聯列し、赤黄淡紅、又真紅、赭色丹朱

○記事紀行文

園裡萬草あり、特に
菊花の隠逸なるを觀
る○園裡秋色深く、
菊花の色、特に麗美
あり、園中菊花を以
て盈たさる○園内隠
逸の君子あり○隠逸
の君子とは、蓋是菊
花の謂あらん○隠逸
の君子とは、則是
菊花を云ふあり○園
裡芬香あり、黃菊の
盛満あるを觀る

斑紅色、白辨、濃黄種様のもの、園地一面に滿々たり、嗚呼美ある
かき麗あるかき、古陶淵明あるものあり、之を愛して閑居の友た
らしめきと聞く、實に清逸純淨の心あるが如し、然れば世人之を
呼んで隠逸の君子と云ふこと、其理あるを知る、余も亦此花を愛す
ること最深し、古人云へるあり、年中花多し、然れども其の終末
の花として、極めて美麗に、尙清爽たる香素を含み、姿勢艶にして
却つて淫みならず、媚ぶるが如くにして諛るにあらす、奢れるが如く
にして傲らず、常に君子の風容あり、嗚呼此花や特に清士潔俊の心
に比すべきものあらん、古來梅、竹、蘭の三種を取つて菊花に合せ
特に稱して四君子と云ふ、蓋其由るところあればあり、余之を觀る
の記を作らんとして、餘言を列ね他辭を録し、聊思ふ旨を述べ

○某山に茸狩を催すの記

數名の友親あり、遽然約を定めて某山に赴き、菌茸を索めて野食の

○部事紀行文

○某山に茸狩り
を催すの記

某山は菌茸に富めり、秋季香芬を以て盈さる。菌茸山に満ち、遙に窺ふも香氣あり。○某山松樹深くして、菌茸に富めり。○某山の菌茸たる、其味美にし且香氣に富む。○山上山腹總て茸を以て満たされたり。○松林あり菌茸茂し

味を試みんとす、此日や幸に天色闊にして風あく、朝來日輝いて野邊暖されば、疾く行くべし遲々すべからず、若し機に後れ順に違ふあらば、或は他のものゝ奪ふところと成るべく、或は既に生長して、眞味を失ふの虞あらん、決して躊躇遷延すること勿れ、若し汝にして踟躕せば、吾獨歩して某山に届らんのみ、疾く進まんことを欲す、速に馳赴かんことを願ふと、友人某々を催促して急ぎ至れば幸ひ晷日の雨に養ふはれ、多々益す繁生しつゝあるを観る、夫彼處に群茸あり、夫此處に菌叢あり、我即之を取らん、汝も亦之を採れよ、否此の山腹は軟土多く、且芥様の苔土あり、恐くは茸茸を得ん、疾く掘反せん、決して愈斷すること勿れ、若誤つて採掘せずば、他手に奪はれて笑はるゝのみ、嗚呼愉快あるか否、愉快あるか否、吾人今茸狩の擧たる、唯菌茸を得んことと欲するのみにあらず、平素隱鬱の氣性を開き、散策運動して、切に身體を養ひ、且力

○部事紀行文

○松樹の下、菌茸夥多あり。○松露夥多にして、能く菌茸を養ふ。○菌茸の生するところ、自香氣あり。○香氣を尋ねて松林に入れば、苔下草裡、夥多の菌茸あり。○余は常に茸を好む、乃某山に入つて之を索む。○茸々相並んで松樹の下に榮ゆ。○山行の伴友千興を盡して

量を盛にして、健壯勇雄の人と成らんことを望めばあり、吾或老人の言に聞く、山に入つて菌茸を探らんこと、恰も敵の状情を探つて軍器作戦の實向を定めしむべき、斥候隊の任に似たり、吾人今一山に登つて、菌茸の在るところに至らんとするも、豫め之を熟知するの法なし、僅に斥候を放つて、所々巡歴せしめ、或は谷に或は原に或は山腹に或は嶺峰に、東西南北相走り胥馳せて、樹林叢裡泥苔の下を探り、其の發生するところを認めて、而後初めて之を掘採すべきあり、全く斥候兵、即菌茸穿索の順序拙劣あるときは、終日之を捜らんとするも、決して其の一莖だも獲る能はず、遂に空しく虚籃を携へて家に歸り、剩へ勞を覺え慙を感じて、其効あきき歎息し止まんのみ、然れば吾人、今日の山行に於けるも、専茲に注意して、斯の如きの拙策あからんことを希ふあり、乃伴友相約し、伍を立て順を整へて、探索したれば、各皆夥多の收穫あり、喜嬉怡々と

○記事紀行文

歸る○快怡際りなし
して家に歸れり

○清快云ふべからず

○關ヶ原の霜

路を過ぐる

の記

關ヶ原に過らんとし

て、特に英傑の大計

を想ふ○關ヶ原を過

ぎんとして、霜路を

踏むのとき、切に某

智將の英謀を思ふて

感歎頗あり○徳川氏

の大謀や蓋此時に成

○關ヶ原の霜路を過ぐるの記

嗚呼此の原野は三百餘年の古、東西兩軍最終結末の戦争に於て名を
大にしたるの地たり、即關ヶ原と云ふ、吾人暇阜に赴かんとし、
滋賀を経て同地に至り、大に感ずるところあり、聊か思意を陳べて
一記を綴る

夫關ヶ原の地たる東大垣を越えて、尾張に達するの途西不破を過ぎ
て近江に入るの堺、地勢頗る戦ひに適し、西より進むも、東より來
るも、兩々其の用法の宜きに任すべからば、何か利、何か不利ありと
云ふべからず、乃徳川氏遠く軍を發して此地に來り、大に爲すと
ころあらんとし、石田氏亦此堺に入つて陣を構へ、特に企つるとこ
ろあり、相互以て劇烈猛獍ある闘を交へ、終に東軍の勝算當り、着
々進涉して、日本全國總管の基を開き、明治維新の初年に至るまで

○記事紀行文

妙せりと云はん○徳
川氏三百年の盛榮た
る、實に關ヶ原の戦
闘に由つて定まれり
と云ふ○徳川幕府の
成効たる、此地の勝
戦に基因せるあり○
西軍の無謀、遂に豊
臣氏を亡ぼすに至れ
り、實に悲歎の極た
り

○新井の古關を

過ぐるの記

○新井の古關を過ぐるの記

二百八十餘年の間、徳川氏の一手を以て、天下を政治するの快舉と
は成れり、世之を呼んで、天下決裁の戦争ありと云へり、嗚呼人生
の此世に處するあること、其の士たり農たり、商たり工たるを問は
ず、常に取るどころの方法にして、其宜きに適ひ、他の機先を制し
て能く運轉循環するあらば、一舉手、一踏足にてし、漸次利福を
招くべく、幸榮を得るべきあり、殊に之が利福幸榮を得るの秘訣た
る、必ず敏捷にして、能く他の狀況實情を量り、最速に之を
決裁するにあり、徳川氏茲に志し、大に思ふところあり、能く西軍
の機先を制し、尙能く時を誤らざりしに由るあり、吾人此地に朝露
を踏み、頗る感慨に堪へず、吾人處世の鑑戒に供へんとして、自
思ひ自考ふるところあり嗚呼

余大に思ふところありて、道を東海に取り、特に鐵路を便とせず、

○記事紀行文

余一年關東に事あり、道を東海に取、新井の古關を過ぎたり。○余東都に赴かんとして、新井の地に過り、古關の趾を訪ふて追懷頭ありき。○余東都に旅するの途次、新井の古關を索めて、舊情を催せり。○古一關あり、往來の人を質し、旅次の警戒に勉めたりき。

單身獨歩、杖を曳いて東都に向ふるとき、一日鞠子より出で、長橋を渡り、左濱名湖を望んで、終に新井に達したり、此地や元當道樞要の關門あり、常に往來の人を査覈して邪謀の徒を停め、尙能く非常の企あらんことを慮りて、特に警戒守護に勉めたるの咽喉場たりしあり、實に徳川氏の政體たる、專一固定窮結にあつて、封權制度を主とし、二百八十有餘の諸侯あり、各國地を別にして、割居異政の奇法を用たりと雖も、能く六十餘州と平定し、能く四海を鎮靜し、内豐に民和樂に、外異邦の犯すところとあらず、武あり文あり、以て東洋の一島國をして、先安泰康平ならしめたること、眞に感すべきの至りと云ふべし、然れども斯の如きの政法に由つて更に生じたるどころの弊害、極めて多く、王政復古の後、之が改良變革に於て、最大なる煩擾を重ねたるあり、余今古關の跡を瞰て感ずるところあり、路傍の茶亭に投せんとして踵を反し、少く斜に

○記事紀行文

○古來關門あり、常に出入の人を査し、特に警戒に勉めたりと云ふ。

○不知親を過んとして霰風に追はるの記

北越奇勝あり、不知親と云ふ。○北越の地一奇勝あり、不知親と云ふ、此地波浪高く、冬季の往來極めて困難多しと聞く。

○不識親を過ぎんとして霰風に追はるの記

北越濱邊不識親の汀、春夏平靜穩寧の候、風あく浪あくして氣煖するのとき、緩歩順進して以て和樂の旅を行くあらんか、蓋愉快のこたれるべきのみ、然るに余一僻あり、平寧のときにあつて、平寧の道を行き、安穩の期に由つて安穩の舉を試みんこと、全是凡庸の至りにして、敢て眞正の快情を覺ゆるに難し、茲に人生處世の道に於て、完全整齊たる快樂を得んと欲せば、特に艱難のときを用ゐて、大に艱難の事に當り、苦煩危厄の狀況に接して、苦煩危厄の行爲を取らんか、是必ずや無疆の幸榮あらん、無數の利福來らん。

○紀事紀行文

越後の濱邊不知親の奇勝あり、之を過ぎんとして、若し大風強雨に遇ふことあらんか、迅馳雷走するにあらずば、動もすれば海浪に奪はるゝの危難あり、實に恐るべきのことたり○激波汀頭を洗ふて、岩邊に碎く○山の如き波浪、岩邊を洗ふ○一步を誤るときは無限の和樂を得べけん、冬季風暴れ雪霰降り、海津浪波高く濱渚砂を飛ばすのときを計り、遂に越後に入つて、不識親の難所を通過したるあり、實に此の難所たる、素より難所たり、若し過つて脚を停むれば、山の如き波來つて奪去らんのみ、若し遅々として行く能はざるときは、未其の波脚を避くる能はざるに先ち、浪激高く襲ふて、拂除かれんのみ、而も余單身にして、勇奮英進し、敢て一の恐るゝところなく、濱砂を蹴つて岩洞に馳せ、岩洞より走つて濱砂に飛び、既に其浪に奪はれんとせること十有三回、屢害せられんとして、屢之を避け、敢て障るところなく之を經過し去れり、其狀極めて危険にして、却つて快怡多く、今將に死地に陥らんとして之を脱れ、又將に遠く海底に奪はれ、空く藻屑たらんとして、之を凌ぎ還つて喜悅を覺ゆること多々ありき、然れども身を顧み行を思ふと深く、再三再四鎮念默慮すること久しうて、此行爲の疎暴ありし

○紀事紀行文

遂に激浪に奪はるゝに至る○一脚遅々たるとき、遂に危難を蒙るに至る○實に怖るべきところたり

○甲斐の猿橋を渡るの記

甲斐山中一奇勝あり、猿橋と名づく○木曾山道猿橋の奇勝あり○余甲斐國に至り、一奇橋を渡れり○

こと、且無謀にして思志するところ淺く、必竟愚人の擧作に習ふに過ぎざりしを悟り、懺愧耻悔の至りに堪へず、古人云へるあり、無謀のことを爲すは、痴人の業のみ、強暴の行ひあるは智者の取らざるところあり、如何とされば無謀の擧たる、動もすれば其身を亡ぼすに至るべく、強暴の行ひは、必ず災害の元たればありと、吾人亦斯の災害を蒙るに至らんとせるあり嗚呼

○甲斐の猿橋を渡るの記

朝霧風あり、途上頗る寒冷にして、旅杖を曳かんこと、甚難きが如し、然れども茲に遅々すべからざるの急絆あり、止むことを得ずして家を出でたり、即行くこと五里にして深谿あり、高き岩山の斜腹に當り、特に奇橋を設けて、往來に便せり、余木曾地に生れて、屢々東走し數々西馳せりと雖も、未嘗つて此の奇橋を過ぎたることなし、俗に所謂燈臺元暗しの類あらんか、是に於て其の橋脚に達

○記事紀行文

余甲斐の國に在り、奇橋猿橋を過ぎ、特に其の美勝に驚けり。○錦帯橋は周防にあり、愛本橋は越中にあり、是皆一種特得の構造に成り、甲斐の猿橋と共に三奇橋の名を負ふたり

○佐野の渡に夕雪を眺むるの記

佐野の渡に夕雪を眺むるの記

し、遙に下底を望めば、千尋の巖谷と成り、翠緑湛々たる流水を叩へ、樹木森蒼たる對岸の邊、峨々たる尖岩、塊石に架したる梓蔓の組橋を視たり、世人之を呼んで猿橋と云ふ、殊に其奇あるのみにあらず、四邊の風光頗る閑雅にして、大に贊すべきの趣あり、余効にして地誌を繕き、周防岩國に於ける錦帯橋、越中黒部川に架したる、愛本橋を合せて日本の三奇橋たり云云の章句を讀み、必ずしも實地に臨んで之を視んとを欲し、伊豫宇和島に至れるの序を以て、船を三田尻に巡らし終に岩國に入つて之を関觀し、更に北越修學旅行を企て、黒部川に達し、各其の眞景を試みたりしが、今又猿橋を渡つて、三奇橋の勝を認め盡したり、實に喜怡のことのみ

○佐野の渡に夕雪を眺むるの記

遙々たる原野、渺々たる郊地あり、常に田圃として綠翠の植物多く農耕の道頗る大あり、然れども今既に冬十二月に類し、朝暮雪降る

○記事紀行文

佐野の渡場夕雪美あり○佐野の夕雪特に佳景あり○佐野の地雪景に富めり○佐野を過ぎんとして、夕雪の勝を觀る○佐野の暮雪を觀て感あり○暮夕の佳景たる、實に此地の勝を以て首と爲す○中納言定家の秀詠あり、特に此地の夕雪を賞して餘蘊なし

こと少からず、遠山近野、悉皆體々たるのみ余友人某と共に佐野の地に在り、一夕雪深くして、人の往來を絶ち、寒氣嚴烈にして、肌膚將に破裂せんとするのとき、特に此景を眺めんことを欲して止まず、竟に二人相携へて戶外に出で、靴を運んで進むこと半里許、一川あり板橋を架せり、四邊廣くして遠く雪を以て蓋はれ、前後左右總、食白銀の筵席を伸べたるが如し、實に美麗の景色なり、中納言定家の國詩あり、曰く馬蹄を止めて、袖上の雪を拂はんを欲すれども、敢て一の樹蔭を穿てるに驚けり、否驚けるのみにあらず、を懷想して、其の眞景を穿てるに驚けり、否驚けるのみにあらず、恭敬の念頗るありしあり、是に於て暫く橋頭に起つて、四方の麗色を眺め、詩を賦し文を綴つて寓に歸れり

○原の驛に富嶽の雪を賞するの記

原の驛とは、是東海道途、富士山の麓、静岡縣駿河國駿東郡の一村

○記事紀行文

○原の驛に富

嶽の雪を賞

するの記

原の驛たる、富嶽の麓に在り○原の驛たる、東洋名山の麓、吉原の隣邑あり○明治維新の以前、徳川幕府の政下に在り、日本全国諸侯の往來、繁く、特に之に由つて家を成せるもの多かりしあり○村民

落たり、素より農民の家舍を列ね、漁夫の軒端を竝ぶるに過ぎず、真に寂寞閑静の地たるのみ、而も富嶽の麓にして、四時の絶景朝暮の佳況を望むべき、最良好のどころあり、此地元明治維新の前、徳川幕府天下を統治し、六十餘國の諸侯を指揮し、大に覇權を握めたるのときに在つては、東西去集往來の旅、日々萬を以て算ふべく、夜々千を以て計るべきの盛況あり、途上の戸々商肆を張り、旅窓を開いて之を羨ち、繁華盛昌云ふべからざるの趣ありしと雖も諸侯廢せられ、華族と成つて東都に集住するに及び、旅客俄に減少し、剩へ漁船ありて遠州灘を越ゆるに難からず、汽車行はれて、一日の行程、東西兩京の間に貫通すべきの今日に至つては、平常此地を過ぐるもの、極めて稀有なるのみ、實に寂寥たる趣を遺せり、然るも此の寂寥なる趣あつて、初めて富嶽の美景を視るべきあり、抑雅致風流の景たる、決して繁華盛賑のときにあらずして、却つ

○記事紀行文

訪ふの記

友人の許を

雪を冒して

概旅客に由つて糊口せるありき○六十餘州諸侯の往來あり且通常農工商の出入に依り、常に相當の繁賑を効せり○今は既に寂寞の一村落と成れり○現今特に寂寥たる、一村部落に過ぎざるのみ

て静寂鎮寥の際に由つて現はるゝものなれば、今斯の如くに閑静寂寥たる原の驛よりして仰視るときは、廣く四圍に跨れる山脚の姿、遠陵相甲の三州に亘り、雲外高く聳えて、白雪を冠し、東海の波上其頂を映じ、敢て明狀し得べからざるの絶景を表し來れるあり、嗚呼原の驛や、殊に寂寥たりと雖も、東洋秀逸の名嶽を視ること、に於て、他に優るの好便地たるあらん、乃所感を陳べて之が記と爲す

○雪を冒して友人の苦難を救はんこ

するの記

雪片霏々として下り、風に追はれて馳駈奔騰するの狀、實に美麗の景たるあり、然れども今日特に嵐勢烈く、朝來頻々として雲飛び、戸々障扉の間を突いて至り、寒氣膚を劈くかの感あり、否其感あるのみにあらず、近凍劇甚にして、全く指をも落すかと疑はれ、近年

○記事紀行文

夜來の降雪、今尙止
 ます○夜來雪ること
 頻にして、往來絶え
 たり○積雪既に數尺
 の深さに達せり○積
 雪深きこと既に數尺
 ○雪深くして致て足
 を入るゝの地をし○
 積雪深くして、進む
 に由をし○途上雪を
 以て埋められ、敢て
 是を進む能はず○雪
 ること頻にして途上

稀有の冷候ありと雖も、余が友某、某村に赴き、遽然大雪に遇
 ひ、竟に途を埋められて歸る能はざるかと思はる、若し今日正午に
 至るも、尙霏々として降り、敢て止むときあからんには、特に人を走
 らせ、余も亦之に従ふて赴き尋ねんものと、準備豫計すれば、積雪
 益深く、實に恐るべきの勢あるを以て、斷然意を決して戶外に出
 で、従者三名と共に道を急ぎ、某村に向つて足を揚げたり、嗚呼強
 烈あるか寒山の嵐、顔を撃ち頭を撲ち、袖を拂ひ裾を捲き、靱
 を飛ばし、鬘を驅り、道傍既に暗く、眼前咫尺の外を辨する能はざ
 るに至れり、嗚呼既に通は絶えたるか、一步たも進む能はず、一步
 たも退く能はず、同行四人のもの、悉皆途頭に直立したるのみ、
 嗚呼如何せん余が友死せるを、嗚呼如何せん余等も亦將に命を絶つ
 べらんとするを、嗚呼是天の命あるか、嗚呼是地の理に由れるかあ
 否々斯の如くに恐るべきものにあらず、必竟吾人の勇氣あきあり、

○記事紀行文

既に尺餘に達し、敢
 て往來せんこと難し
 ○一友人あり、雪路
 に妨げられて、往來
 する能はざるか○友
 人積雪に妨げられて
 、歸るに途をし○友
 人の苦難、極めて多
 々あるべし○積雪山
 の如くにして、進退
 に苦しむ

奮勵して以て脚を揚げん、邁進して以て此行を全うせん、先試みに
 起つべきありと、余自大聲叱呼して前に向へば、他も皆之に勵ま
 されて、嗚々叫び應と喚んで、一步／＼深雪を蹴りつゝあり、時に
 天候忽にして變じ、風治まり雪止んで、四圍悉く暈々たるの景色
 あるのみ、嗚呼天未余が友を捨てず、且余等を救ふのときを絶たず
 と、意氣益す鼓舞せられ、特に進むこと一里許にして、馳來るもの
 あり、腫を定めて熟視すれば、三人の旅客あらんか、各黒色の外
 套を被り、尙黒布を以て面を包み、服装堅固の扮打たり、余等全く
 相違ふて、途上の難苦を語らんとし、友人某の聲あるに驚き、其
 の無事安寧あるを賀せり、友人某も亦之に應じて、余等此行の何
 たるやを疑ひ、疾く所以を質して、懇情の深さを謝し、其の途上に
 して大雪に追はれ、既に死滅せんのみありしも、山樵二人の助けを
 得て、事あく歸路に就きたる旨を告げ、更に七人相合して、余が家

○記事紀行文

○六甲山頭に猪を獵する

六甲山頭積雪堆し
六甲山上積雪を胃して登り、犬を追ひ、銃を放つて、猛猪を獵す○武庫の邊高山あり、六甲と云ふ余一日積雪を胃して

の記

に還し、盛火を設け、温酒を傾けて凍沍を凌ぎ、山樵に謝し從者を休はしめて以て難擧了れり、古語に曰く能く身命を擲つて、友を救ふものは、未之を救はざるに先ず、天其情を憐んで衛護するに至るど、嗚呼余輩今日の擧たる切に斯語に適せるあるか

○六甲山頭に猪を狩るの記

勇奮猛起、朝風を胃して進み、銃を肩にし彈藥を腰にして走り、數尺の埋雪脚を没するのどころ、縱横無盡、臆路を踏んで駈け、三頭の獵犬鼻を低うして奔り枯木の蔭、巖石の間、雪下の叢、茂林の中右に追ひ左に驅り、搜索探偵最密あるとこころ、忽然現はれ來る二頭の猪、牙を磨ぎ頭を張つて跳躍し、特に余に向つて突飛せんとする狀あり、是に於て余銃を掲げ、連發以て一頭を倒したれば、却つて他の一頭の勢威を勵まし、三頭の獵犬に對つて鬪を挑み、或は縦に或は横に、或は斜に或は前に、或は後或は上に、或は下に或は傍

○記事紀行文

猪を獵せり○六甲山頭體々たる雪あり○余特に獵犬を驅り、銃を携へて六甲山に登れり○猛猪を追ふて山谷に走る○猛猪あり、牙を鳴らして來る○憤猪の勢蓋當るべからず○余敢て猛猪を恐れず○猪の勢極めて烈く、今之を獵せんこと容易ならず○余憤猪

に、打擲擊撲、咀嚼嚼喫、毛を抜かれ耳を破られ、骨を碎かれ眼を潰され、鮮血淋漓として流るゝの間に鬪ひ、實に恐るべきの勇猛を試みつゝあり、余之を視て、直に銃を試みどんし既に口蓋を切らんとしたれど、轉輾相重あつて鬪ふものあれば、若し過つて獵犬を傷けんことをおしとせず、大に意を用ゆべきありと、近く進んで猪の尾に出で、靜に銃口を當て、一發其の腸部を貫き、其機に乗じて銃臺を掲げ、力に任せて猪の頭部を衝き、終に二頭を倒すを得たり、是近來の快事ありき、時に山頂より呼ぶ聲あり、手を翳して之を仰視れば、神戸在留の英人某あり、某は余が舊來の友にして、彼亦常に山獵を好み、積雪を期として銃犬を携へ、曉を胃して山を巡るれあり、而も未一の獵物なし、徒然銃を肩にし、愛犬を牽いて歸らんとせるのとき、銃聲を耳にし、三犬の哮るを聞いて、途を變じ、竟に此地に至れるあり、乃余は二頭の猪を縛し、某と共に各愛

○記事紀行文

一頭を獲て家に歸れり○憤猪の猛勢避るに難し、而も能く之を捕獲す○一環能く憤猪を倒ふす○魁勇恐るべし

○航路に雪を

観るの記

遠洋航海の船、突然雪に遇ふて、甲板艦々たり○航路降雪飄にして、四圍を辨せず○翠波の頭、白雪

○航路に雪を觀るの記

犬を誘ひ、疾く馳せて懸底の民舎に過り、主人に請ふて二猪を擔はしめ、山を降つて家に歸りたるあり、然れども余大に勞憊して、別に之が記を作るの勇氣なく、荏苒日を経ること三日、時に某より使者あり一書を贈らる、開いて之を視れば、余に代つて六甲山頭に猪を狩るの記を筆したるあり、余切に之を謝し、更に一日の後、之を和譯して某に送り

四面白雪の霏々たるどころ、一天雲に蓋はれて、波上特に緑色を湛ゆるのみ、余將に上海に航せんとして、神戸港より汽船に投じ、山陽沿岸四國の間を過ぎ、既に玄海灘に出で、針路を轉じて西南に向はんとせるとき、寒氣更に加はつて、雪降ること益多々なれば船艦の動搖頗る烈く、波浪揚がつて舷を打ち、尙浸洗して甲板を越ゆること屢、船員の苦勉實に云ふべからず、乗客の艱痛甚く、將

の霏々たるあり○緑波に浮ぶ白波あり○波は緑にして雪は白し○緑波の間、白雪漂ふ○時に雲晴れて青空現はる、而も遠山雪に埋められ、其色皓皚たり○航海の船舶、雪を冠つて艦々たり○既に雪晴れたりと雖も、遠望遙地總て皓々たる景のみ○海波線にして

○記事紀行文

に頓覆せんとするの状あり、沈没せんとするの感あり、嗚呼人生の氣運は素より天あり、即天の命に従ふべきあり、自然の理に任ずべきありと雖も、各皆企望を懷き、遠く他邦に赴いて、其の成效を見んことを欲し、切に奮つて勉勵すべきの輩なれば、官務を負ふて異郷に使用する人、海外の事情を探らんとして旅する人、學に志して、歐州の地に渡らんとする人、巨資を携へて歐米の貨物を購ひ、夥貨を齎して南洋諸島に歸かんとする人、悉是國家の利益を造るべきの舉を有せるあり、今にして怒濤増加はり、風雪愈裂しきに至るならば、終に海底に沈まんのみ、全く魚腹に葬られんのみ、嗚呼悲いかなと、心裡切に哀歎に迫られ、胸腔鬱結して、意思消滅せるが如きの感ありしならんか、然れども特に此船に投じて遠く海洋に航せんとするものなれば、心中鬱悶の氣ありとするも、敢て之を外貌に現はさず、大に威容を張つて、其の悠々として難に

○紀事紀行文

遊山白し○雪後の海上、更に緑色を加へたるが如し○船頭白雪を冠つて、緑波の上に進めば、一種云ふべからざるの好趣味あり○波頭の雪花縹々として飛ぶ○緑波白雪を浮べて美あり○海上の雪景、實に云ふべからざるの美趣あり

恐れざるの状を示さんとするあり、否總僉斯の如きにあらず、全く以て英志に富み、豪邁勇猛益發り、愉快喜悅を覺えて雀躍するの徒も少からず、談笑話樂泰然自若として、敢て常に變らず、快と呼び嬉と叫んで他を勵ますの英士あらん、余も亦難波を怖れず、屢甲板に登つて緩歩漫歩し、却つて船員の注意を蒙り、室に籠つて寝に就けることあり、時に天色順に歸り、風治まり波鎮まり、尙雪止んで四圍限りなきの青穹現はれ、水面遙に一字を爲せる連山を視のみ、特に望遠鏡を取つて、之を眺むれば、皎々たる白雪の堆さを認むべく、實に云ふべからざるの佳景あり、乃三日にして復雲氣起り、更に雪降ること頻れば、清國東岸の地、我が臺灣の山、或は遠く、或は近く、眸下瞳裏に映するもの、極めて清白純潔の麗を示し、筆を執つて之を畫かんこと、文に由つて之を叙せんこと、詞を以て之を語らんこと、素より難きことのみ、嗚呼美あるか此景や、嗚呼麗あるか此景や

○金澤に曉雪を觀るの記

相州金澤の地、特に八景の勝あり、金澤は是相州有名の地たり○金澤の入勝たる、實に云ふべからざるの佳趣を備ふ○余此勝を觀んと欲して相州に至れり○余一夕金澤の旅舎に宿り、特に某山に登つて

○金澤に曉雪を觀るの記

茲に冬あらざるときは、金澤八景として、相州名所の麗美甚大なるを知る否四季に渉るべき八景にして、之を一期に視んこと、決して爲し能ふものにあらず、故に今曉雪と云ふときは、暮雪の勝に反すべしと雖も、暮雪既に麗ありとせば、曉雪亦其麗あるべからず故に余一日鐵倉に赴き、横須賀に出づるの途次、遂に此地に至つて旅館に就き、特に一泊して以て、曉雪の景を見るを得たり、即翌未明を以て旅館を出で、高き丘に登つて遠く眺望すれば、起伏せる田圃の邊、遙々として浪に沿へる濱汀、浮々として潮水に漂ふ船舶東西に翔翔する群禽、南北に往來する漁夫白雪に映じて淡墨を塗れるが如き鹽釜の煙等、今更に云ふべからざるの佳趣を帯びたり、余曰く、古來八景の勝を云ふ、必ず某地の暮雪を擧げ、漢土、朝鮮は

○紀事紀行文

○記事紀行文

夕雪の景を望めり○
 余澤の暮雪たる、特
 に美妙の景色あり○
 旅窓を開いて遠く暮
 雪の瀟景を眺む○雪
 を霽して家に歸らん
 とすれども、途上六
 花深く、脚を容るゝ
 に難し○遠く金澤の
 暮雪を眺め、近く旅
 窓に一詩を賦す○關
 東の名勝たり○此勝
 たる、實に海内稀有

敢て論せず、我國の絶景上、總て斯の如きの慣例あり、實に愚見た
 るべきあり、余今金澤の曉雪を瞰たり、遠く白雪を破つて昇らんと
 する旭日の光あり、紅を染めて其雲を彩し、片々として降れる雪を
 照らさんとし、忽にして密雲溢れ、遂に其光を閉ぢ、復其雲破れ
 て光線八面に輝き、或は雲と成り或は微風と成り、或は晴れ或は曇
 り、種々變遷するの狀、實に眺みすべからざるもののみならず、
 旅館に歸つて朝食を喫し、既に旅装を整へて去らんとせるとき、驟
 變交降つて敢て止まず、正午にして益多きを加へ、午後に至つ
 て途上尺餘に堆積し、決して俥を用ゆべからず、否俥のみにあらず
 徒歩にして容易ならずと聞き、更に此館に宿つて翌曉の雪を眺めん
 と、東雲光線の貫くを期として、窓を開き遠く望めば、皚々たる山
 皓々たる瀟、皎々たる田圃、四圍一として白色をあらざるは、海
 洋一面の緑特に其色を増して、實に意想外の好景を現はせるあり、

○記事紀行文

と云ふべし○余嘗て
 斯の如き絶景を見
 り、否決して見たる
 にあらず、唯夢想せ
 るのみ
 ○雪夜阪鶴鐵
 道に依つて
 福知山に赴
 くの記
 夜雪深くして、特に
 鐵路に依り、遠く福
 知山に赴かんとす○
 余は梅田驛に赴いて

幸にして、雲晴れ、空天青晴の間、時を去つて高く飛ぶところの群
 鳥あり、釣具網機を携へて艇に登るの漁夫あり、暖氣願に至つて堆
 雪少く溶け、若し俥を賃せば、藤澤に赴くを得べしと聞き、直に準
 備整計して去れり
 ○雪夜阪鶴鐵道に依つて福知山に
 赴くの記
 日本國內漁車の便普く、東西南北既に自由に旅すべく、朝に青森の
 曉色を眺め、夕に東都の明月を望み、更に進んで金城の曙風を入れ
 須磨、舞子の夕煙を認めて、赤間ヶ關の曉鳥を聞き、終に進んで長
 崎の暮色を視んこと、眞に易々のことのみ、一瀉千里の往來たるべ
 く、一期萬里の馳驅に足るべし、嗚呼文明の利器たる、實に意想の
 外に働くべきあり、余城の崎に事あり、雪夜を冒して梅田驛に登り
 鐵路に據つて神崎に出で、有馬郡三田に越え、竟に遠く進んで福知

○記事紀行文

瀧車に投じ、更に神崎に至つて、道を北方に取り、阪鶴鐵路に依つて福知山に行かん〇十有二の堅道あり、入つては出で、出で入は入る、其奇其狀、實に妙を極む〇山谷を涉り、山腹を穿ち、絶壁斜殿怪石の邊、自在に往來す瀧車の便〇斷岸絶壁の頭、瀧煙を吐

山に届れり、然るに時恰も冬十二月にして、微雪到り、生瀬以北一體の地、悉皆銀色の景を呈し、眞に妍美の趣あり、然れども余が梅田驛に登りたるは、既に午後六時にして、電燈所々に輝き、全く夜景を以て盈たされたれば、順次進んで驛を重ぬるに従ひ、一刻更を加へ、夜色益深きに至るのみ、雪雲滿々たりと雖も満月の宵あれば、天色暗からず、睭々たる景影、能く眸瞳の中に来り、沿道の風情頗る明晰ありき、殊に山又山、谷又谷ある難道あり、十有二所の長隧道あり、隠れては顯はれ、入つては出で、出ては入り現はれては匿れ、千態萬容、奇變妙替の狀を觀、頗る愉快の車旅を遂げたり、是に於て余一篇の唱歌を得たり

阪鶴鐵道

前車

第一

梅田の驛に夜の雪、樹々に花咲く頃あれや、

また春あらぬ時あれど、こゝ神崎を立出で、

○記事紀行文

いて急走す、途上の絶景、實に筆紙の及ぶのころにあらず〇車中絶景を載せて來るかど疑はる〇車の進むに従ふて、麗景を現はし來る〇山谷の堅道、巧工限りありし〇堅道を出で、奇景を眺め、堅道に入つて、暗闇を渉る〇進むに従ふて奇景百出す〇行に従ふて、

塚口さしてのりこめば、

伊丹の里の賑しさ、

伊丹の里に來て見れば、

いとど嬉々景色かき、

其二

池田の水に影映す、

武庫の山々緑りして、

夏の熱も白雪の、

冬の中山あらくに、

涼き風を迎ふ身の、

いとど嬉々景色かき、

これを浮世の寶塚、

心をこめて守らまむ、

其三

流れよどまぬ生瀬川、

底のいさを敷ふまで、

清くも澄める翠葉の、

武田尾驛をあとしして、

進む路のべ草しげく、

道場に通ふ人々の、

日ごと夜ごとに増すと聞く、

いとど嬉々景色かき、

其四

○記事紀行文

千景の變遷するを見
 る○千景萬色、實に
 數ふるに堪へず○千
 景萬色、實に窮極を
 し○千景萬色、實に
 暗念に堪へざるあり
 ○實に海内無二の奇
 景あり○毎内緊要の
 鐵路たり○設計工築
 の難、實に多々あり
 しあらん○精巧緻密
 あること、實に驚く
 に堪へたり○精巧な

三田の里も有馬山、

あふたこあたにそよぐある。
 我より告ぐる秋の月、
 またも相野の夜半のさま、

全 後車 第一

嗚呼藍本の名にかあふ、
 日出阪越えんとさきもとき、
 里のあふたは復晴れて、
 往來ふ人の脚しげし、

其二

大山かけの花紅葉、
 上よりおつる下瀧の、
 谷川までも通ふらし、

いさの笹原風ふけば、

廣野の草にさく蟲の、
 照り添ふおかに露ふかみ、
 いとど嬉々景色かあ、

第一

青葉しげれる松や杉、
 俄に時雨古市の、
 笹山かけの暖かあ、
 いとど嬉々景色かあ、

夕日照りさふうらふかあ、
 水は今更濁りあき、
 あふ面白の風情やあ、

塵の浮世を隔てける、

其三

こゝにまつてふ柏原の、
 石生く浮きたつ心地して、
 翠ふかみて黒井川、
 かぎりしられぬ風情あり、

いとど嬉々景色かあ、

其の甲斐ありと聞からに、
 昨日も今日と杉の葉の、
 そこに住むある魚の數、
 いとど嬉々景色かあ、

其四

西に東に往來ひの、
 梅の花さく春邊より、
 蟲の音高き秋の夜、
 變らぬまゝの福知山、

人を集むる市島や、

松の葉さかる夏の頃、
 竹田の竹に雪ふるも、
 いとど嬉々景色かあ、

○記事紀行文

る企設にして、全く
 他に比類なきが如し
 ○設計の巧みあるこ
 と、實に感歎の外な
 きあり○蓋是容易の
 業にあらざるあり○
 蓋是偉大なる工事も
 云ふべし○功効明
 にして、之が設計の
 緻密あるを知る○峻
 を越え岨を過ぎ、以
 て能く遠きに達す○
 險阻を平拓して、此

添へ、一を改め二を査し、前句を删り、後詞を飾り、漸にして完備
 即筆を執つて、之を手冊に記し、數之を唱誦して、甲を削り乙を

効を遂げたり○精巧にして且偉大なりと云ふべし

○雪夜梅林を

探るの記

雪降ること尺餘、而も梅林既に其蕾を含めりと聞く○梅林既に其蕾を含めり、而も夜來積雪深く、香芬却つて六花の裡に有り○六花梅林に茂く、梢頭特に醜々た

○記事紀行文

せるとき、福知山々々と叫ぶの聲あり、直に瀟車を降つて傳を賃し、迅駟急行、四時有半にして、十數里を飛び、城の崎某氏の家に達せり

○雪夜梅林を探るの記

嗚呼奇あるか此行や、余等五六の友輩相携へて、特に雪夜を冒し某梅林を探らんとす、然れども是寒風凜烈たるの朝にして、肌膚をも劈き、筋骨をも破り碎かんずる冷返のときあり、余輩之を快として装を整へ杖を曳き、威氣勃勃々勇意揚々として其途に就けり、嗚呼奇あるか此行や、古人云へるあり、奇を好んで特に奇を行ふものは、其奇益奇と成り、奇々終に云ふべからざるの奇を生ずるに至らんとは是を以て之を考ふるときは、奇より出づるものは、必ず奇に歸り、敢て喜ぶべく貴ぶべきの効果を見んこと難きが如し、余輩茲に此の奇行を爲す、素より喜ぶべく貴ぶべく効果あらんことを望む

り○雪降ること多々益す多々にして、梅樹の新蕾總て六花の裡に隠る、梅蕾積雪の下に埋められ、恰六花に香あるが如し○余輩五六の友あり、相携へて雪夜梅林を探る○雪夜梅林を尋ねて郊野に至る○雪路を踏んで某野に赴けば、雲間半輪の月を漏せり○梅蕾雪

○記事紀行文

にあらず、切に梅林を求めて、雪下の花を觀んと欲するに過ぎず、行くべしと敢て躊躇逡巡する勿れ、敢て遲々延遑する勿れ、敢て脚蹠遲疑する勿れと、相勵まして途を急げば、殆ど三里許にして其邑に達し、尚行くこと半里餘にして、高原あり、世俗之を呼んで梅ヶ原と云ふ、南地一里、東西十丁に亘るの深林あり、是悉く梅樹にして、春候無限の麗景を發すべきの名地たり、今雪を以て蓋はれ幹梢枝間總て醜々たる色を以て包まれ、恰白銀の角を列ねたるが如く、尙其の雪裡を窺へば、所々蕾を含んで、微香を放ち、實に云ふ得べからざるの雅趣あり、余輩覺えず快と呼び怡と叫び、各相語つて曰く、梅は是百花の魁たり、余輩亦他に魁けて、此の魁けの花を觀たること愉快の極と云ふべし、乃詩文あかるべからず、歌句あかるべからずと、各其思ふところを筆し、或は懷紙に記して楯に結び、或は吟じて、自興を催し、或は手冊に寫して他に示し、評

裡に縦にびたり

○記事紀行文

判批談駭々たりき、余特に同伴數友の雅誌を綴り、竟に一巻の稿を
作れり

○諏訪湖上に氷を渡るの記

諏訪湖上に氷を渡るの記
諏訪湖既に寒氷を結
べり○諏訪湖の水は
既に氷結せり○諏訪
の湖上堅氷あり、往
來の客、悉皆之を
渡つて去る○湖水最
堅し、故に人馬の
往來に堪ゆ○湖水

○諏訪湖上に氷を渡るの記

記

○記事紀行文
○諏訪湖上に氷を渡るの記
其の破砕するに遇ふことあらば、決して之を脱るゝ能はず、必ずや
氷下に埋没せられん、嗚呼怖るべし、恐るべし、輕々以て容易に脚を
容るべからずと、甲を案じ乙を思ひ、苦煩憂仲頻ありき、然るに傍
一旅人あり、余躊躇して進む能はざるの狀を目し、大に笑つて曰く
汝は何たる怯懦の人ぞや、此湖の結氷たる最堅牢にして、古來
突然破砕したること稀なれば、特に人命を損せるを聞かず、請ふ奮
起して以て勇進せんことを、余常に人に接すること多しと雖も、
汝の如き柔弱婦女子に、似たるものあるを觀ず、嗚呼汝は何する
ものぞ、疾起つて踏入せよ、余大に老婆心あり、若し汝にして進む
あくんば、余は汝が手を取つて誘導せんと、或は顯を開いて大笑し
或は諄々諫言して止まず、或は詞を重ねて訓誨し、或は悔言を放つ
て罵詈訕罵し、切に勸むるところあれば、余漸くにして之を信じ、
突乎として心慮を勵まし、順々躍進して渡り了れり、古語に曰く、
説いて疾渡らんこと

○記事紀行文

○記事紀行文
○諏訪湖上に氷を渡るの記
其の破砕するに遇ふことあらば、決して之を脱るゝ能はず、必ずや
氷下に埋没せられん、嗚呼怖るべし、恐るべし、輕々以て容易に脚を
容るべからずと、甲を案じ乙を思ひ、苦煩憂仲頻ありき、然るに傍
一旅人あり、余躊躇して進む能はざるの狀を目し、大に笑つて曰く
汝は何たる怯懦の人ぞや、此湖の結氷たる最堅牢にして、古來
突然破砕したること稀なれば、特に人命を損せるを聞かず、請ふ奮
起して以て勇進せんことを、余常に人に接すること多しと雖も、
汝の如き柔弱婦女子に、似たるものあるを觀ず、嗚呼汝は何する
ものぞ、疾起つて踏入せよ、余大に老婆心あり、若し汝にして進む
あくんば、余は汝が手を取つて誘導せんと、或は顯を開いて大笑し
或は諄々諫言して止まず、或は詞を重ねて訓誨し、或は悔言を放つ
て罵詈訕罵し、切に勸むるところあれば、余漸くにして之を信じ、
突乎として心慮を勵まし、順々躍進して渡り了れり、古語に曰く、
説いて疾渡らんこと

を勸めき○奮起歩を進めて、危氷を渡れり○奮躍して之を渡れり

○雪球を製つて擲闘ふ

の記

數十の童兒あり、二部に別れて、隊伍を組み、雪を握つて白球を製り、相互亂投して、闘ふこと頻あり○數十の壯者幼童

○記事紀行文

人生皆勇氣あり、而も常に之を用ひるの道を講せざるべき、勇氣阻損して、遂に怯懦のものたらんのみと、余が今日諏訪湖の氷面を渡らんとして、遲疑躊躇したること、蓋斯語の趣旨に由れるあらん真に以て懺愧の外なきあり、嗚呼

○雪球を製つて對擲するの記

嗚呼愉快あるか否、愉快あるか否、南方二十有三名の童兒あり、北方十有一員の壯者あり、各勇氣勃々として奮起勵突、一機にして大敵を倒すべき猛勢を備へたり、今之を委く説かんに、北方は十有五員ありと雖、總皆血氣盛々たる壯者にして、一騎當千の膂力あり南方は其勢堂々として敢て他を恐れざるの威氣ありと雖も、全少童にして、腕力の足らざるどころあらんを慮り、尙其の進退の宜しきを失はんことを怖れ、特に二十有三名の數を備へたるあり、是に於て南北兩軍、相擧つて雪球を製り敵を撃つ彈丸を、調理す

あり、各便宜に由つて兩部と爲し、雪球を製つて亂擲す○壯者幼童、兩隊に別れ、各部所を定めて雪戦を試む○北方の幼童、南部の壯者、各擔任を分つて雪戦を試む○南北兩軍勇氣高く、刻一刻を重ぬるあるも、未敢て勝敗を決せず○亂擾混雜の戦ひのみ○

○記事紀行文

るに忙しく、一時間にして、數千有餘を整頓したれば、更に擔任を分つて、三部と爲し、甲部は撃手即對擲の任に當らしめ、乙部を遊手として、豫て腕力臂勢を養ひ、甲部に代つて撃手たらしめ、丙部は彈丸即雪球採擷の務を執らしむるものとす、夫斯の如くにして南北相隔つること二十間、別に指揮者あり、其の中央に立つて號令を下して開闘と云へば、南北各雪球を取つて、相擲つこと頻々たり、其勢頗る勇猛にして、漸々胥近き、雨の如く激の如く、激々教々として突撃し、敢て寸秒たも間隙なく、或は空を飛んで松頭に碎け、或は斜に走つて岩石を打ち、或は高く揚つて氣中に散亂し、或は肩に或は腰に、或は腕に或は臂に衝突的中して喝采の聲喧く、或は頭を打つて帽子を飛ばしめ、或は顔を撃つて鼻を凍えしめ或は頬を撲つて其面を傾けしめ、或は敵を打たんとして自顛倒し或は其の雪球を避けんとして轉輾し、或は之を脱れんとして積雪の

○記事紀行文

右撲左撃、能く敵軍の急所を襲へり○能く奮進して敵手を討つ○勇進猛飛、頗る激戦の状あり○奮戦の状、極めて壯快あり○勇氣満々たり○英雄豪傑の容貌あり○猛奮勇闘の状を有せり○憤激の勢あり○進んでは勇戦し、退いては恐驚す○嗚呼壯快なる哉

中に埋められ、劇烈猛終に相接し、雙手數個の雪球を握り、一機にして敵の顔面に擲り、周章狼狽の虚空を突き、推雪を擲して、之に投じ、其倒るゝを俟つて、雪中に埋むるの勇者あり、或は左手に由つて一敵を撃ち、右手を以て一敵を打ち、連發連中、敵手をして、雪球を用ゐるの術をからしむるの猛者あり、混戦亂闘、曳と叫び、噓々と喚び、上下、縦横、旋回、斜曲、追撃、驅打、虚々實々秘術を盡して闘ふたり、其の壯快なること決して明状すべからず、乃斯の如くにして相環つこと殆ど一時間、復、指揮者の號令あり、南軍勝利の聲最高く、二十有三名の童兒、相竝んで、一丘に立ち、各、雙手を揚げて威勢を示し、萬歳と呼んで丘を下れば、北軍も亦之に應じ、頭を垂れて禮を表し、更に指揮者の命に依つて、南北兩軍一所に集り、雪中茶菓を喫して勞を休め、千萬の快愉を擔ふて去れり、余も亦斯軍の一員たれば、家に歸つて之が記を作れり

○記事紀行文

○雪達磨を製るの記

數名の童兒相群つて遊ぶ○兒童相群つて、雪球を製り、相押し脅催して竟に大團を作成するに至る○幼童相群つて雪達磨を製り、木炭を用ゐて之が顔面を畫く○數名の青年、雪塊を製り、相寄り脅群つて之を厭倒し、右に

○雪達磨を製るの記

夜來の積雪、尺餘に達し、往來已に絶えて、途上最寂寥たるのとき、戶外群童の聲あり、曳々、耶々と叫んで奔走旋廻するものゝ如し、余其何の故たるを知らず、大に怪んで之を質さんことを欲し、門を開いて之を窺へば、三々五々群を爲せるの童兒あり、雪塊を回轉して其層を加へ、右往左往の中、之をして益す大あらしめ、遂に三團を設けて相重ね、木炭を取つて顔面を畫き、純然達磨の像を製り、周圍に繞つて相笑ふものあり、又雪塊三層のものを製り、怪貌奇面を畫いて相樂むものあり、其の雪塊をして、特に大あらしめ、十有餘名の童兒、各、雙手に草履を携へ、之を雪體に當て、一方より厭倒し、輾轉層を加へて、全く驚くべきの巨團を製り、別に階を刻んで頂上に登るものあり、戲々千萬の和樂を罩め、遊々無窮の愉快を博しつゝあり、余之を觀て感ずるところ切ありき、嗚呼學を修

○記事紀行文

曲り、左に斜めにし
て、轉輾頻あり○轉
輾して其の形態を培
す○雪塊は是遷轉し
て以て、其層を増す
○寸餘の小雪塊あり
、更に取つて雪中に
轉するあらば、終に
驚くべきの大團と成
らんこと必せり○雪
を固結して遠塵を制
る○雪塊の遠塵あり
、其形奇にして妙を

ひること恰も雪團の如く、之を回轉すること多々なれば、其層益す
加はり、終に人力の得て動かすべからざるに至る、然れども若し之
を放棄して、敢て顧るところなければ、漸々溶解縮消して、一點だ
も其形を止めざるに至る、抑人の學を修むるに當つて、孜々兀勉
能く時を用ゐ、能之を守り、一寸の光陰、必ず萬金の價あることを
思ひ、一字一句も等簡に附すべからず、一語一章も疎忽おらしむべ
からず、身命の續かん限り、奮勵せんと、學力決して界域なく、身
を終はるまで以て學ぶべきものたるを知らば、其學漸々増進して
平庸普通の限より、眺めんこと、容易さらざるまでの高きに達せん
而も僅に學びたるとき、吾人既に廣く識れり、吾人は全く學者たり
否博學非凡のものありと、疾くに自負慢心を生じ、別に書を讀むを
要せざるあり、世間は皆余より劣れるもののみ、余何を學ぶべけん
や、否學ばざるを欲するにあらず、全く學ぶべきの書とありと、

○記事紀行文

るべく、其狀大に
して、其趣深し○雪
達磨あり、無数の兒
童に依て製られたり
○雪窓の下に書
を繙くの記
朝來積雪あり、吾人
敢て外務に堪へず、
特に書齋に入つて英
文を作る○寒窓の下
に歴史を繙き、特に
古今の事情を探る○
朝爨未消えへず、今

依然放任自棄するあらば、既に學べるところ、順を追ふて消亡し、
終には未學ばざるの人にも及ぶべからざるに至る、實に謹むべく
慎むべきことあり、乃之が記を作り、特に自戒の明鑑と爲すと云
ふ
○雪窓の下に書を繙くの記
霞窓扉を叩いて憂々の聲あり、余此頃某書を著さんとして、書齋に
入り、客を絶つて研究涉獵に際なく、單身獨坐、字句文章を讀了し
之が事由、形跡を探查するの外、餘念なきあり、西哲曰く書を學ぶ
ものは、常に他事を思ふ勿れ、唯一心以て己の欲するところに熱着
せよ、道は必ず一途より進むを要す、若し二途に行かんとせば、遂
に其の企望の地に至る能はずと、又漢書に曰く二兔を獲んと欲せば
一兔をも獲ずと、是學問の道單一あり、敢て雜騷複擾あるの二途三
路に迷ふべからざるを要す、余之を思ふて、書齋に入り、客を絶つ

○記事紀行文

又暮霞あり、其の寒
冷云ふべからず、而
も書齋に入つて、群
冊を友とせば、身心
大に煖温を加ふるの
感あり

○冬夜學友を
會して時事
を談するの
記

雪片霏々として下り
柴門既に開くに難
し○門外六花を以て

て學友をらんせざるあり、而も今窓扉、霞の音を耳にす、未一心不
亂あらざるあり、尙修學の道の何たるを知らざるものあり、乃茲
に戒慎するところあり、朝暮書に對して文語を誦し日夜巻に向うて
義意を質し、心思皆書中に在り、意念悉卷内に罩り、終に他音を
耳にせず、異聲を聞くの暇なきに至れり、嗚呼

○冬夜友を會して時事を談するの記

風雲の動くところ常ならず、雨ること一ならず、雪霰霜露總て規期
あるにあらざるあり、必ずや天候地季、寒暖温冷の如何に由つて變
化あり、人世の狀情も亦斯の如く、遷轉移動して以て千樣萬態の形
行を現はすべきあり、時に余等親友七人あり、常に懇信を以て相交
はり、誠實を以て胥結び、公私を論せず身命を擲たん、心意を同に
して苦患を救ひ、存念を併せて和樂を效さんと、月次二回の集會を
催し、特に名づけて七友會と云ふ、某月某日斯會を開き、先づ現今

○記事紀行文

盈たざる、然れども
友人數輩踵を續いで
來れり○多來の友人
室に盈ちたり○五六
の親友、悉集まれ
り○數多の友人、雪
路を胥して來れり○
親友相集つて時事を
談す○益友あり親友
あり、悉愈余が爲
の寶師たり○友は鑑
の如し、能く吾人の
姿爲を正さしむ○冬

の教育上に就いて大に論ずるところありき、即其の主要なる論題

二三を記せん

- 一 婦人の體育を論ず
- 一 婦人の教育に就いて感あり
- 一 童女の教育を論じ、併せて其の父母兄弟の責任を説く
- 一 文語章句に拘泥すること勿れ
- 一 華麗の文を作らんよりは、寧ろ平庸實直の詞を學ばんことを要す
- 一 教育者の義務とは如何
- 一 教育の道の至大あるところを説く
- 一 教育者たるもの責任を論ず
- 一 現時の家庭は、果して正常なる教育を施しつゝあるか
- 一 校内教育の本領を論ず